板　　付

板付会館建設に伴う発掘調査報告書

福岡市埋蔵文化財調査報告書第73集

1981

福岡市教育委員会

板　　付

～板付会館建設に伴う発掘調査報告書～

福岡市埋蔵文化財調査報告書第73集

1981

福岡市教育委員会

序　　文

市内周辺部における宅地開発進行は，衰えることを知らないようです。

弥生時代初頭の農耕集落跡として知られている板付遺跡もこの例にもれず，往年の農村環境をほとんど失いつつあります。

今回の調査は，福岡空港騒音対策の一環事業として，市立板付会館の建設が計画されたことに伴い，教育委員会が調査主体となり昭和54年７月から11月にかけて実施したものであります。

発掘調査の結果は，本文に記載いたしますように，夜臼及び弥生時代の遺物含有層が検出され，半製品の木製鍬が出土するなど，縄文時代から弥生時代に至る社会を知るための多くの成果を収めることができました。

本書が市民各位の文化財保護及び学術研究の分野において，貢献することを念願いたしますとともに，調査に際してよせられました多くの方々のご協力に対し，心から謝意を表する次第であります。

昭和56年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　西津茂美

例　言

- 本書は福岡市経済局の航空対策の一環として板付北校区の集会所（板付会館）建設に伴う事前調査として，福岡市教育委員会文化課が1979年7月～11月に発掘調査を実施した報告書である。
- 本報告には，関連として国庫補助による民間宅地造成に伴う緊急調査報告も併載した。
- 本書に掲載した遺物写真は浜用昌治による。
- 本書に使用した図の作製は，土器を浜石正子・沢皇臣・原俊一，石器・木器を山口譲治が行い，製図は，山口・浜石・岡部裕俊が行った。
- 本書に掲載した土器及び土製品，石器及び石製品，木器はそれぞれ，土製品（1～　）石器及び石製品（SI～　）木器（WI～　）と通し番号を付した。
- 本書の執筆は，山口・松村道博・浜石で行ない，編集・総括を山口が行なった。

本　文　目　次

第1章　序設

Ⅰ　はじめに……1

Ⅱ　調査区の位置……3

第2章　調査の記録

Ⅰ　調査概要……4

Ⅱ　遺構と出土遺物……5

Ⅲ　包含層及び川出土の遺物……14

第3章　調査のまとめ……73

付編　福岡市板付E-5・6地区出土の木質遺物の樹種……76

図　版　目　次

PL. Ⅰ　板付遺跡E-5.6地区Ⅰ区全景……

PL. Ⅱ　板付遺跡E-5.6地区Ⅱ区全景……

PL. Ⅲ　第1号竪穴遺物出土状況……

PL. Ⅳ　第1号竪穴出土土器……

PL. Ⅴ　第2号竪穴三又鍬出土状況・第3号竪穴出土土器……

PL. Ⅵ　第1号建物……

PL. Ⅶ　第9層出土土器……

PL. Ⅷ　第9層出土遺物・第8層小盛出土状況……

PL. Ⅸ　第8層出土土器……

PL. Ⅹ　第8層木製品出土状況……

PL. Ⅺ　第7層出土土器……

PL. Ⅻ　第7層出土遺物……

PL. XIII　第5層出土土器……

PL. XIV　第5層・川出土遺物……

挿　図　目　次

Fig. 1　板付遺跡の地形と各調査区 …… 2
Fig. 2　板付遺跡E-5・6地区遺構配置図及び断面図 ……(折り込み)
Fig. 3　第1号竪穴実測図…… 5
Fig. 4　第1号竪穴出土土器実測図(1) …… 6
Fig. 5　第1号竪穴出土土器実測図(2) …… 7
Fig. 6　第2号竪穴及び出土遺物実測図…… 9
Fig. 7　第3号竪穴及び出土遺物実測図…… 10
Fig. 8　第4号竪穴及び出土遺物実測図…… 11
Fig. 9　第1号建物実測図…… 12
Fig.10　第9層出土土器実測図 (1) …… 15
Fig.11　第9層出土土器実測図 (2) …… 16
Fig.12　第9層出土土器実測図 (3) …… 17
Fig.13　第9層出土土器実測図 (4) …… 19
Fig.14　第9層出土土器実測図 (5) …… 21
Fig.15　第9層出土土器実測図 (6) …… 22
Fig.16　第9層出土土器実測図 (7) …… 24
Fig.17　第9層出土石器実測図…… 24
Fig.18　第8層出土土器実測図 (1) …… 26
Fig.19　第8層出土土器実測図 (2) …… 27
Fig.20　第8層出土土器実測図 (3) …… 29
Fig.21　第8層出土木器及び石器実測図…… 30
Fig.22　第8層出土木器実測図…… 31
Fig.23　第7層出土土器実測図 (1) …… 33
Fig.24　第7層出土土器実測図 (2) …… 34
Fig.25　第7層出土土器実測図 (3) …… 36
Fig.26　第7層出土土器実測図 (4) …… 37
Fig.27　第7層出土土器実測図 (5) …… 39
Fig.28　第7層出土土器実測図 (6) …… 40
Fig.29　第7層出土石器及び木器実測図…… 42
Fig.30　第5層出土土器実測図 (1) …… 44
Fig.31　第5層出土土器実測図 (2) …… 45

Fig.32　第5層出土土器実測図（3）…… 46
Fig.33　第5層出土土器実測図（4）…… 48
Fig.34　第5層出土土器実測図（5）…… 49
Fig.35　第5層出土土器実測図（6）…… 50
Fig.36　第5層出土土器実測図（7）…… 51
Fig.37　第5層出土土器実測図（8）…… 52
Fig.38　第5層出土土器実測図（9）…… 54
Fig.39　第5層出土土器実測図（10）…… 55
Fig.40　第5層出土石斧類実測図…… 57
Fig.41　第5層出土蛤刃石斧実測図…… 58
Fig.42　第5層出土石包丁実測図（1）…… 59
Fig.43　第5層出土石包丁実測図（2）…… 60
Fig.44　第5層出土鏃・石戈・石剣実測図…… 61
Fig.45　第5層出土石器及び土製投弾実測図…… 62
Fig.46　第5層出土石製品及び土製品実測図…… 63
Fig.47　川出土土器実測図（1）…… 66
Fig.48　川出土土器実測図（2）…… 67
Fig.49　川出土石器実測図…… 69
Fig.50　川出土石斧及び土製品実測図…… 70
Fig.51　川出土木器実測図…… 71

表　目　次

Tab. 1　E 5.6地区第7層出土石器・石製品一覧表…… 43
Tab. 2　E-5.6地区第5層出土石器・石製品・土製品一覧表…… 64
Tab. 3　E-5.6地区川出土石器・石製品・土製品一覧表…… 72
Tab. 4　出土土器一覧表…… 74
Tab. 5　出土土製品一覧表…… 74
Tab. 6　出土石器一覧表…… 75

第1章　序　説

1．はじめに

1979年，板付北台地東縁辺に経済局の航空対策による板付北校区の集会所（板付会館）建設が予定され，文化課に埋蔵文化財調査の依頼があった。さらに板付会館建設予定地の南隣に荻林弘氏によって宅地造成をしたいので埋蔵文化財調査依頼が文化課にあった。文化課板付遺跡調査事務所で試掘調査を行なった結果，弥生時代後期の良好な包含層を確認し台地が東にのびているため遺構の存在も予想された。板付会館建設と宅地造成のやむをえない状況の中で，記録保存の発掘調査を実施した。

板付遺跡は，南北両台地を中心に西側の沖積地での発掘調査を主に実施してきたため，板付台地東縁辺の各時代の様相を知るてがかりがなかった。このため試掘結果より台地が東へ延びており，板付北台地の台地際確認及び東縁辺の各時代の様相をつかむ目的で発掘調査を1979年7月9日から11月4日まで約4ケ月間発掘調査を実施した。

発掘調査に当っては，経済局，土地開発公社造成課，荻林弘氏をはじめ地元各氏より多大なる協力をたまわった。記して感謝の意を表したい。

調査関係者

調査指導員

鏡山　猛（九州歴史資料館館長）　　岡崎　敬（九州大学教授）

横山浩一（九州大学教授）　　森　貞次郎（九州産業大学教授）

三島　格（前福岡市歴史料館館長）　　島倉巳三郎

藤井　巧（県文化課課長）　　下条信行（平安博物館講師）

後藤　直（福岡市立歴史資料館）

福岡市教育委員会

教育長　西津茂美

文化部長　志鶴幸弘

文化課長　井上剛紀

文化課埋蔵文化財第一係長　三宅安吉　　文化課埋蔵文化財第二係長　柳田純孝

庶務　会計　古藤国生

発掘調査　山口譲治　松村道博　沢　皇臣（試掘）

調査補助員

原　俊一　浜石正子　土山健史（関西学院大学）　本多俊郎（國學院大学）

調査協力者

春成秀爾　山本輝雄　浜田昌治

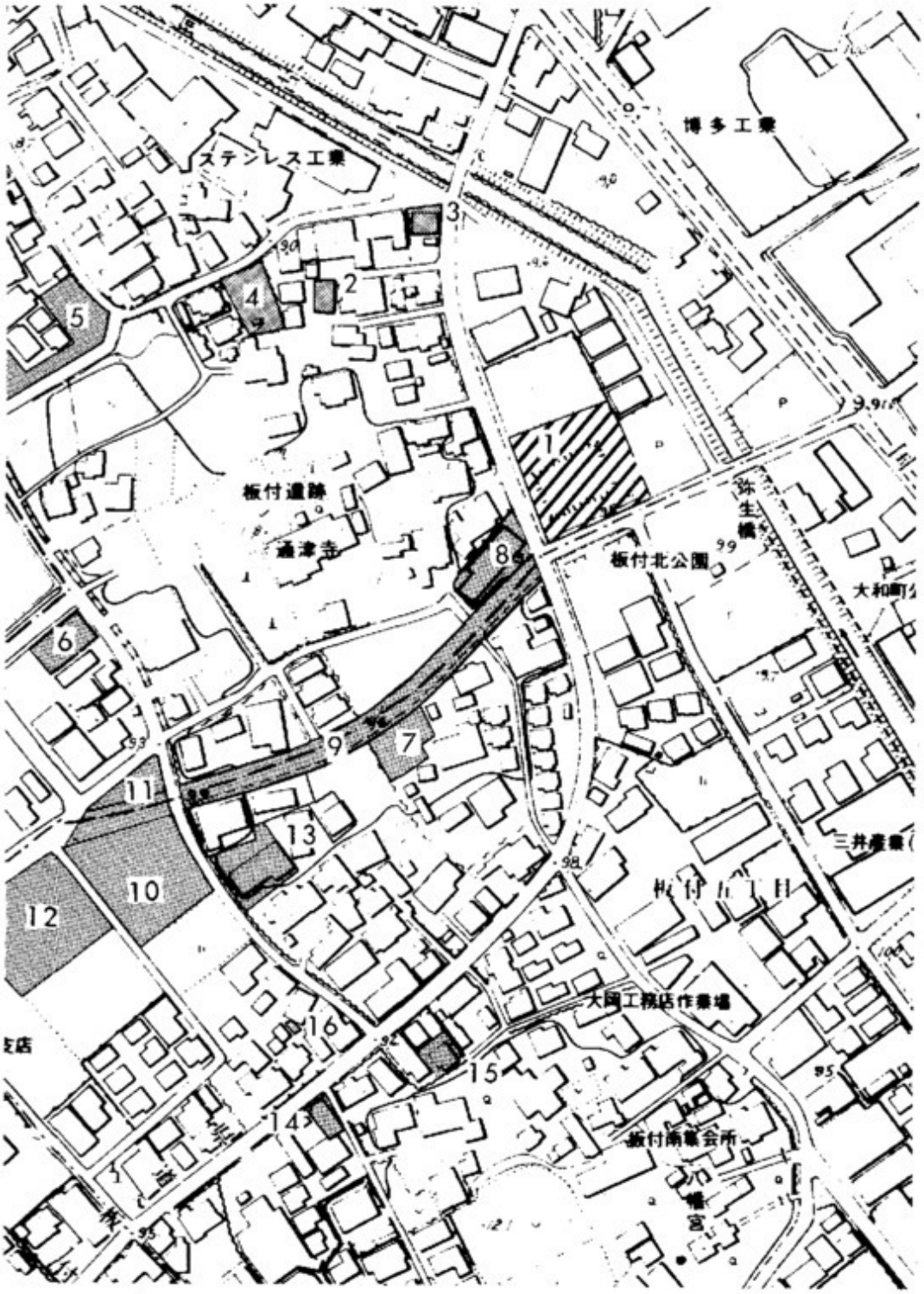


Fig.1 板付遺跡の地形と各調査区

1.E−5・6 2.F−5a 3.F−5b 4.F−5c 5.G−5a 6.G−6a 7.F−6a
8.F−6b 9.県道調査区 10.G−7a 11.G−7b 12.G−7c 13.F−7a〜7d
14.F−8a 15.F−8b 16.F−8c

Ⅱ　調査区の位置

板付遺跡は，標高12ｍの南北の高まりをもつ板付南北台地を中心に，北側は御笠川まで西側は諸岡川まで，南側は麦野台地際まで広がっており，東側の台地上には，今までの発掘調査によって各時代の遺構が確認されている。今回の調査地点は，板付北台地東縁辺部，県道 505 号線の北側で，地籍は板付２丁目13－13である。

今回の調査まで，日本考古学協会・福岡県教育委員会による板付北台地上の発掘調査によって弥生時代前期の環濠が確認され，1966年から福岡市教育委員会によって，板付団地，板付北小学校，県道 505 号線新設改良に伴う発掘調査をはじめ，板付周辺遺跡として板付南北台地の各地区の調査が実施され，各時代の様相が分ってきている。今回調査区隣接地の調査区と調査概要は以下のとおりである。

県道 505号線内　弥生時代前期の貯蔵穴15基，弥生時代中期初頭の円形竪穴住居址１軒，弥生時代中期後半の井戸１基，中世の地下式横穴１基，井戸１基等が確認されている。本線内の今回調査区よりは，弥生時代前期末の貯蔵穴１基が確認されただけで甕棺墓が存在したといわれる板付田端遺跡推定地は削平されていた。

Ｆ－６ａ地区　弥生時代前期の貯蔵穴13基，弥生時代中期初頭の円形竪穴住居址１軒，弥生時代中期の竪穴２基，中世の土壙１基，地下式横穴１基，近世の井戸１基が確認されている。本調査区の遺構上端の標高は11.2m で板付台地上では，比較的残存状態が良い地点である。

Ｆ－６ｂ地区　県道505号線の北側，今回調査区の西側で削平は進んでいたが，弥生時代中期後半から後期の井戸１基が確認されている。井戸上端の標高は8.80m で地山は鳥栖ロームである。

Ｆ－５ａ地点　弥生時代前期前半の竪穴３基，弥生時代後期後半の井戸１基等が確認されている。削平は進んでいるが，地山は鳥栖ロームである。

Ｆ－５ｂ地点　削平が進んでいるが，鳥栖ロームを地山として，地山は東へと傾斜をもっている。遺構としては時期不詳の竪穴・溝状遺構等と中世の井戸１基が確認されている。層序は第１層埋土，第２層旧水田耕作土・床土・第３層黒色有機質の遺物包含層，第４層地山となっている。第３層は，中世以前の客土か、

以上，今回調査区，接地の調査について概要を略記した。今回調査区は従って板付北台地の東縁辺の様相を知る上でＦ－５ｂ調査区と同様重要な地点といえる。

板付遺跡の調査は，100 ｍ × 100ｍの方眼をかぶせて，調査区を分けてきている。今回調査区は，Ｅ－ 5･6 地区となる。前年度概報では，Ｅ－ 5･6 地区として報告した。(以下本報告本文中では，E－5･6 地区と記す。)

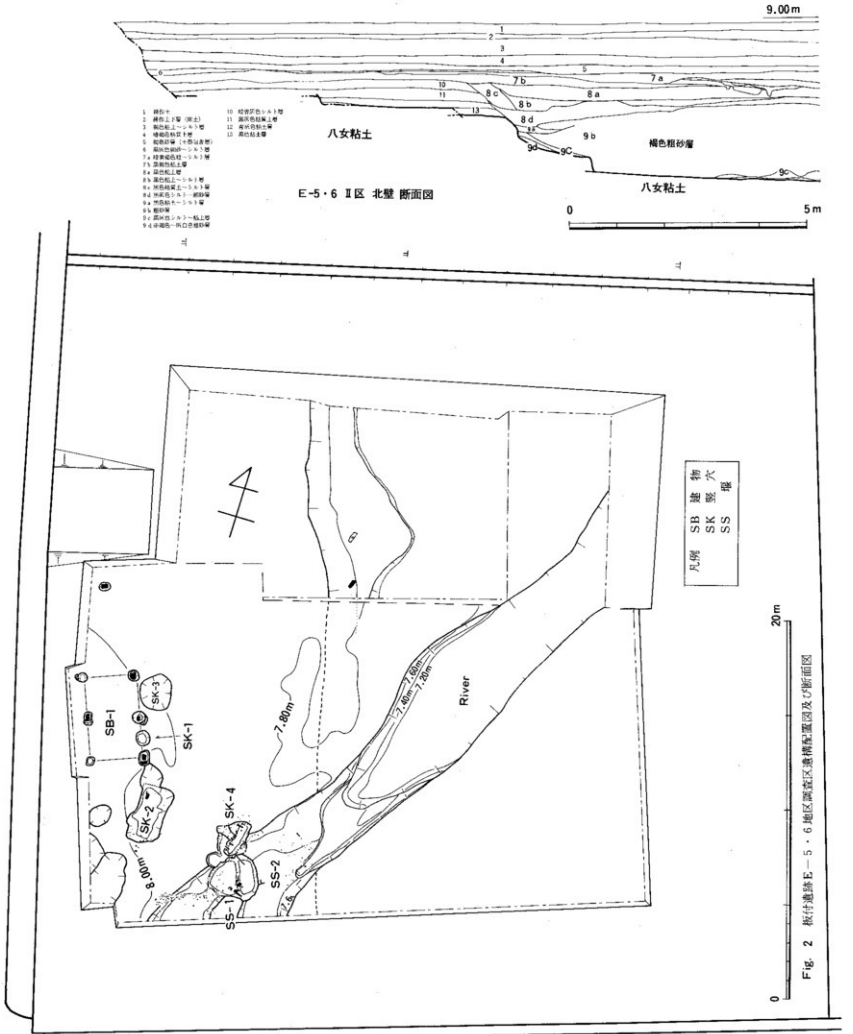


Fig. 2 板付遺跡E－5・6地区調査区遺構配置図及び断面図

第2章　調査の記録

Ⅰ　調査概要

調査は，荻林氏宅造地をⅠ区とし，板付会館建設地をⅡ区とし，Ⅰ区から実施した。調査対象面積は1640㎡であるが，東側は土盛による駐車場があり，北側は水田耕作中であり，西側・南側は水路があるため調査が実施できたのは910㎡である。

Ⅰ区は，昨年報告[註1]したように標高8m 90cmで，水田耕土下は，床土・褐色粘土～シルト層・黒灰色細砂～シルト層・褐色砂層が鳥栖ローム上に堆積しており，鳥栖ロームは東に向って傾斜し，道路から10m東で無くなり，黒褐色粘土層が八女粘土層の上に堆積している。また八女粘土も東に向って傾斜し川となっている。遺構としては，鳥栖ローム層中に掘り込まれた中世の建物（SB－1），弥生時代終末期の竪穴（SK－1），弥生時代後期の竪穴3基（SK　2～4）南西から北東に流路をとる川には杭を打ち込んだ環状遺構・護岸と思われる柵が確認された。層順は，水田耕土を第1層とし，下に第2～5層とした。第4層中からは，瓦器等の細片が出土し，4面は，水平層となっている所から，水田面とも考えられるが，畦畔は確認できなかった。第5層は，砂層というよりは混砂土器層といった方が当を得ている状態で多量の遺物が出土した。第5層では，土師器・高台付須恵器が上面のみで出土しており，奈良時代に整地が行なわれた可能性がある。川からも，土器・石器・木器等が出土しており上層からは，弥生時代後期までの遺物が出土し，川底では弥生時代中期前半の土器を主として出土している所から，弥生時代中期から後期の台地際に沿った自然流路と考えられる。

Ⅱ区では，鳥栖ローム層の堆積はなく，以下の層順は，北東部へ傾斜している。5層下に遺構はなく層序堆積は，第6層黒灰色細砂～シルト層，第7層暗黄褐色粗砂～黒褐色粘土層・第8層黒色粘土～シルト層・黒灰色シルト～細砂の互層，第9層粗砂層，第10層青灰色シルト層・第11層黒灰色粘土層，第12層青灰色粘土層，第13層黒色粘土層，第14層八女粘土層となっている。第7層は，板付Ⅰ式土器期の包含層で，壺形土器（以下壺とする），甕形土器（以下甕とする），鉢形土器（以下鉢とする）等の板付Ⅰ式土器，夜臼式土器，石鏃，扁平片刃石斧等の石器，鍬等の木器が出土した。第8層は，道路端から東に約14mの所から始まり，東へ傾斜し壺・甕・鉢等の夜臼式土器，蛤刃石斧，諸手鍬・エブリの木製農耕具の半製品が出土した。遺物は特に第8層中でも，台地（第10層下を地山とする）際から出土した。第9層は，第8層下に堆積し，東に向って厚くなり，壺・甕・鉢等の夜臼式土器・石鏃・石錐等の石器が八女粘土層にはりついた形で出土した。第8層中に縄文時代後期と考えられる滑石混入の土器の細片が出土しており第10層下に縄文時代後期の包含層の存在が予想されたが，第10層下に人工遺物は確認できなかった。第10・第12層は八女粘土の再堆積層と思われる。

以上本調査区の調査は，板付遺跡の東側を知る上で，重要であった。板付台地西側は，夜臼

式土器期から水田耕作が行なわれており[註2]東側沖積地も水田址の存在が予想され，第4層は水田耕土の可能性が高いが，弥生時代の水田址は確認されなかった。以下遺構・出土遺物について記していく。　　（山口）

註1 横山邦継・柳沢一男編(1980)板付周辺遺跡調査報告書(6)福岡市埋蔵文化財調査報告書 第57集

註2 山崎純男編(1979)福岡市板付遺跡調査概報 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第49集
後藤直・沢皇臣編(1976)板付市営住宅建設にともなう発掘調査報告書(1971~1974)福岡市埋蔵文化財調査報告書 第35集

Ⅱ　遺構と出土遺物

1．第1号竪穴（SK－1　Fig. 3）

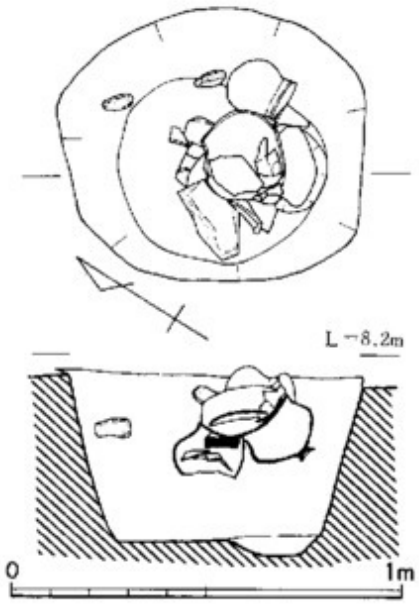


Fig. 3　第1号竪穴実測図

調査区の西側，第1号建物のP－2・P－3間に位置し，長軸約75cm，短軸約70cmの変形隅丸長方形を呈す。深さは約40cmを計り，底は平坦面をなす。

出土遺物（Fig.4・5）遺物は壺など完形品2点を含め，中位より上面にかけてまとまって出土した。

1は台，もしくは脚付の壺で，壺の部分は完形である。中位よりやや上に最大径を計る胴部に，直立気味に立ち上がり端部にかけて外傾する口縁部が付く。口縁上半は横ナデで，下半は刷毛目の上から小石状のもので磨研状の調整を行なう。色調は黄灰色を呈し，胎土は石英粒を含むが精良。焼成は良好である。2は完形の壺で，丸底球形の胴部に直立気味，僅かに外傾した口縁部がつく。胴部最大径は中位よりやや上に位置する。口縁部はナデ，胴部外面は刷毛目の上からヘラ磨研を施すが，ほぼ全面にわたって刷毛目が残る。内面は板状工具によるナデ。淡褐色を呈し，胎土には石英粒砂を含み，焼成は良好。3は壺で僅かに内湾しながら外傾する口縁部に丸い胴部が続き，丸底である。口縁部の両面と胴部内面は刷毛調整。胴部から底部にかけてはヘラ状工具による削り様のなでつけがなされる。暗灰色を呈し，胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。4は丸底の壺と思われるが，小破片のため不明の点が多い。調整は口縁部がナデ，胴部が刷毛目である。

5は器台である。指の押圧による調整を行なう。

6は大形の碗で完形品である。端部付近は刷毛目の上からヨコナデを行なう。外面は刷毛目の上に底部から口縁部に向かって放射状にヘラ磨研。内面も底部から放射状にヘラ磨研がなされる。淡赤褐色を呈し，胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好。

7は高坏の脚で端部から約⅓の位置に3個の穿孔がある。外面は丁寧なヘラ磨研がなされる。

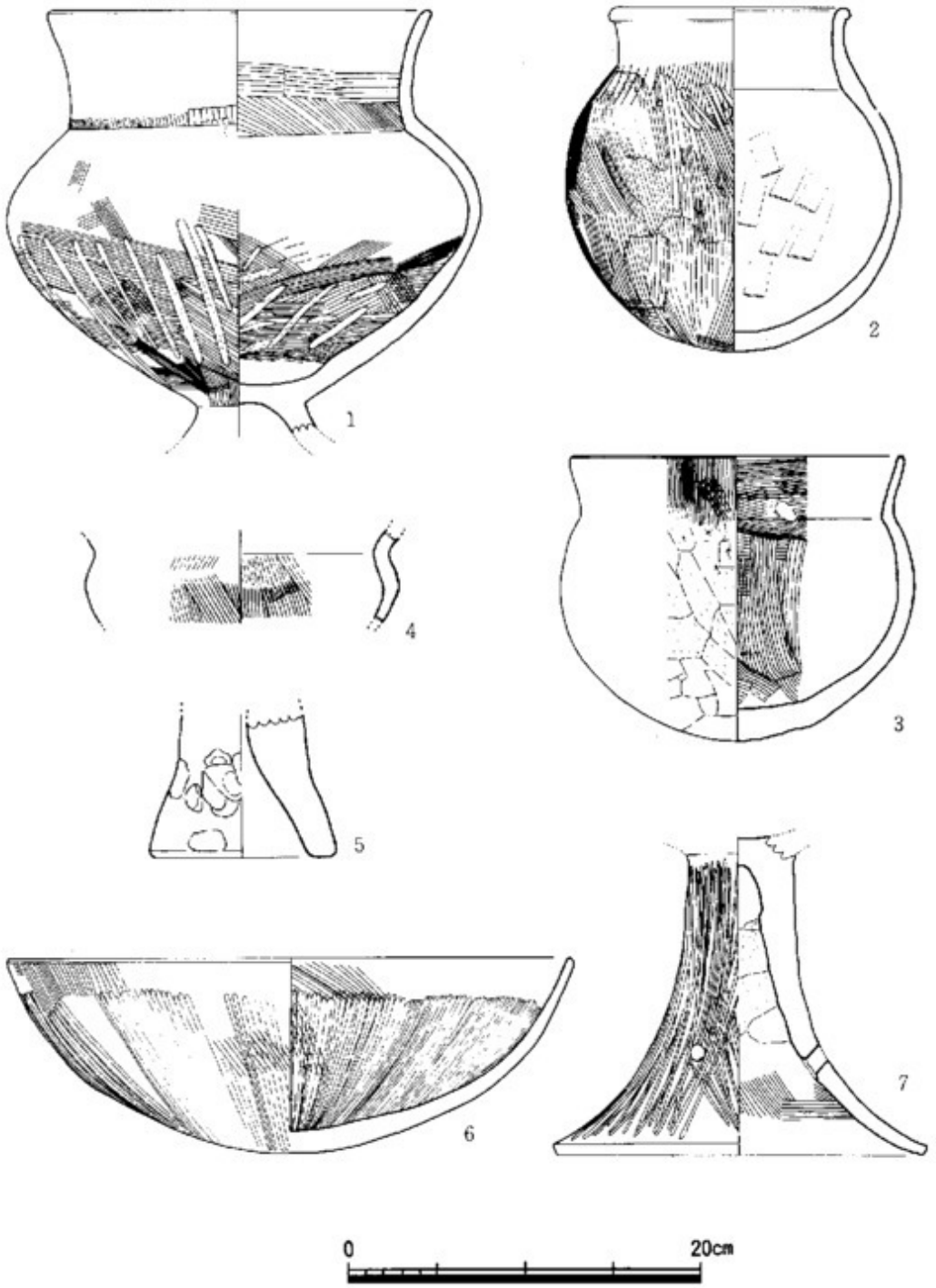


Fig. 4　第1号竪穴出土土器実測図(1)

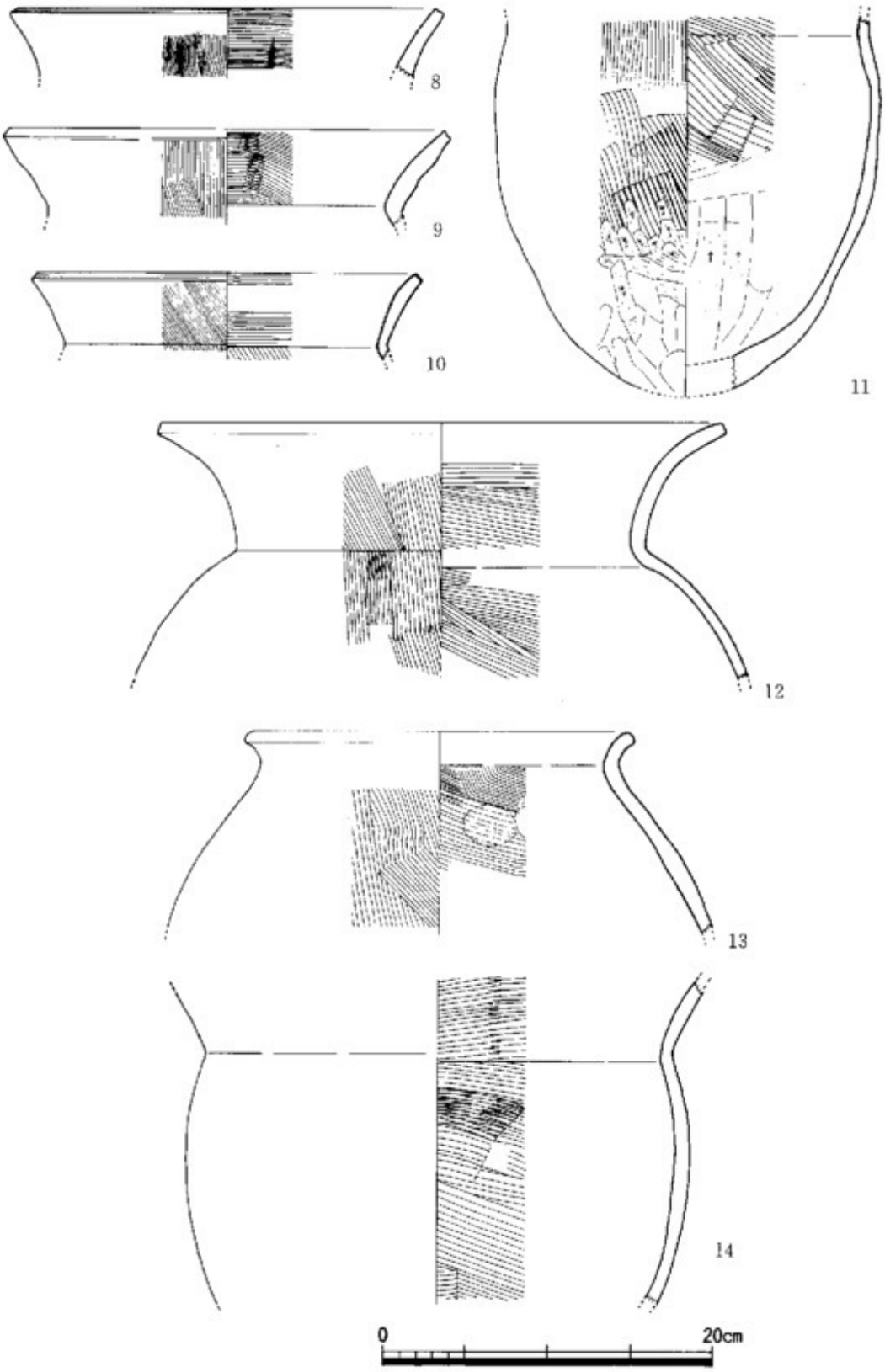


Fig. 5 第1号竪穴出土土器実測図(2)

黄褐色～赤褐色を呈し，胎土には砂粒を含む。焼成はやや不良である。

8～10・12～14は外反する口縁部をもつ甕である。8～10・14はくの字状に外反するが，8～10は内外面ともに刷毛目調整を行ない，端部は中央が凹む。14の口縁端部は欠損する。14の内面には明瞭な刷毛目が残る。12の口縁部は外湾しながら大きく開く。内外面ともに刷毛目調整がなされる。暗茶褐色を呈し，胎土には砂粒を含み焼成は良好である。13は短かく外反し，端部は丸くおさめる。内外面ともに口縁部はヨコナデ，胴部は刷毛目調整である。淡赤褐色を呈し，胎土には砂粒を含む。焼成は良好。11は甕の胴部である。口縁部および底部は欠損するが，口縁部の立ち上がりは直立気味で，底部は丸底になると思われる。内外面とも上半は刷毛目調整，下半はヘラ削り様のなでつけがなされる。灰褐色を呈し，胎土には砂粒を含む。焼成は良好。　以上の出土遺物からこの竪穴は弥生時代終末期と思われ，遺物出土状態から祭祀的意味をもつ竪穴と考えられる。（浜石）

2．第2号竪穴（Fig．6）

本調査区の南西部に位置し，第5層下面から鳥栖ローム・八女粘土に掘り込まれた不正長方形の竪穴で，第1号建物に切られている。法量は長さ約3mで，巾約1.5mで，深さ約0.4mである。底面は，ほぼ平坦であるが，壁は，八女粘土まで掘り込まれており，水位が高いため軟弱である。壁の崩落をふせぐためと思われる杭が，東壁から南壁にかけて打たれている。杭材としては，ムクノキ（W12・14・17・19），ユズリハ？（W13），アワブキ（W16），カシ（W18），クヌギ（W20），タブノキ（W21）等の径3cm前後の丸木が選ばれている。

出土遺物　15は外面に目の粗い刷毛調整を，口縁～内縁には横ナデ調整が施こされた甕で，淡黄赤色～黒色を呈し，胎土には石英，砂粒を含み，焼成も良い。他に弥生時代前期末，中期前半，中期後半，後期前半期の土器が出土している。

S1は，シルト岩を素材とし，剥離整形後裏面は丁寧に他の面は粗く研磨を加えているが刃部は欠損している。S2は，安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製の石包丁で，敲打整形後刃部に研磨を加えている。刃部は両刃で，穿孔は表裏から行なわれている。他に石製品として，石包丁1点，片刃石斧未製品1点等が出土している。D26（Fig.46）は，土器片の周縁部を打ち欠き研磨によってほぼ円形に整形した土製円盤で，重さ31.1gである。

W1は，カシ製の三又鍬で中央・右刃を欠損している。表面は平坦で使用によるものと思われるが削り痕は不明瞭である。裏面はもり上がり削り痕も明瞭で巾約2.5cmの手斧で削られたと思われる。柄孔は最大巾3.6×5.2cmで約13°の角度をもっている。

以上出土遺物から弥生時代後期前半期の竪穴であるが性格は不明である。

3．第3号竪穴（SK－3・Fig 7）

1号建物の東横に位置し，平面形が円形の竪穴で，7層から八女粘土下の砂層まで掘り込まれている。平面径1.8m，深さ1.6mで，八女粘土まで掘り込んでいるため下半部は崩落している。

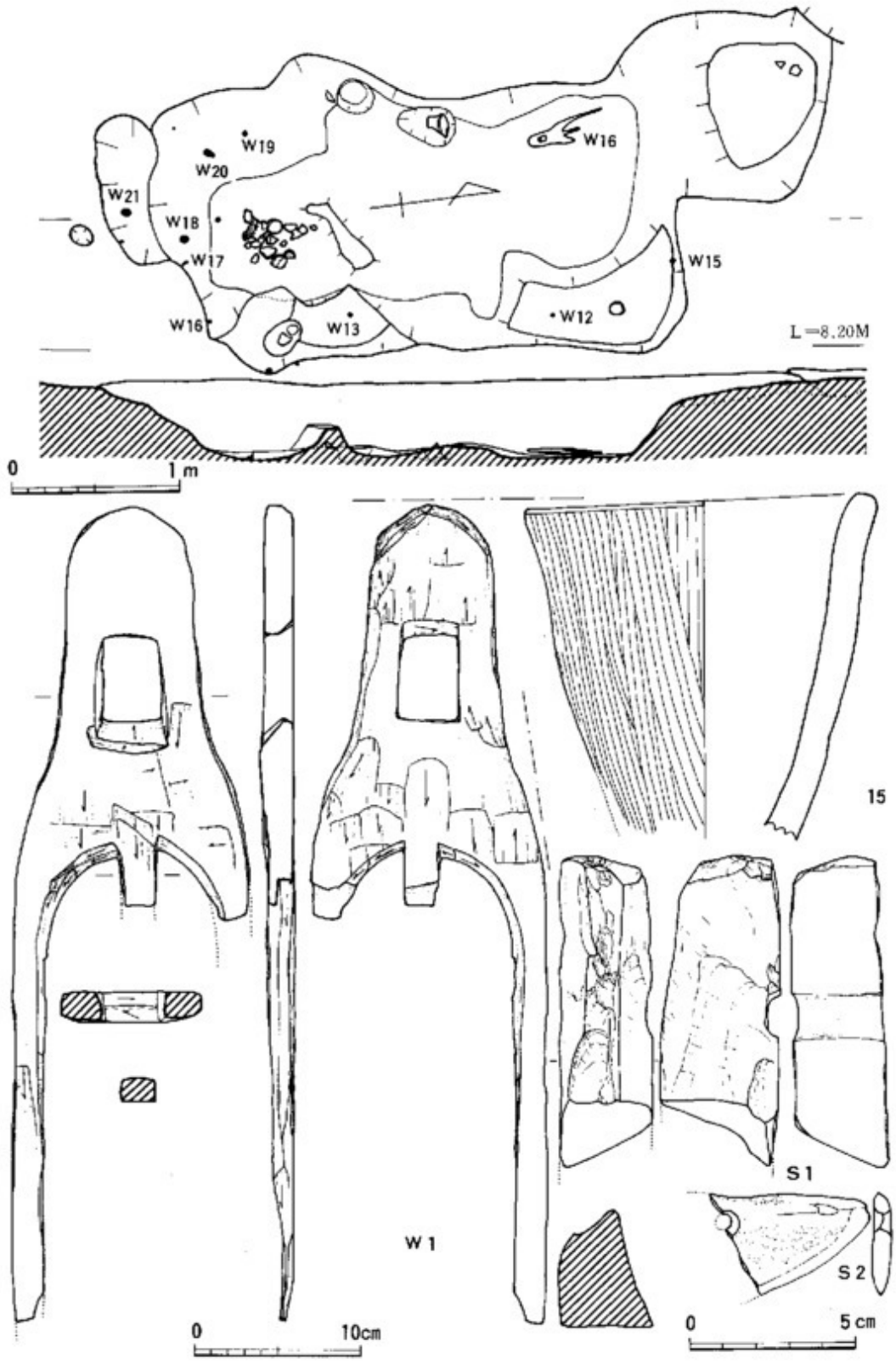


Fig. 6 第2号竪穴及び出土遺物実測図

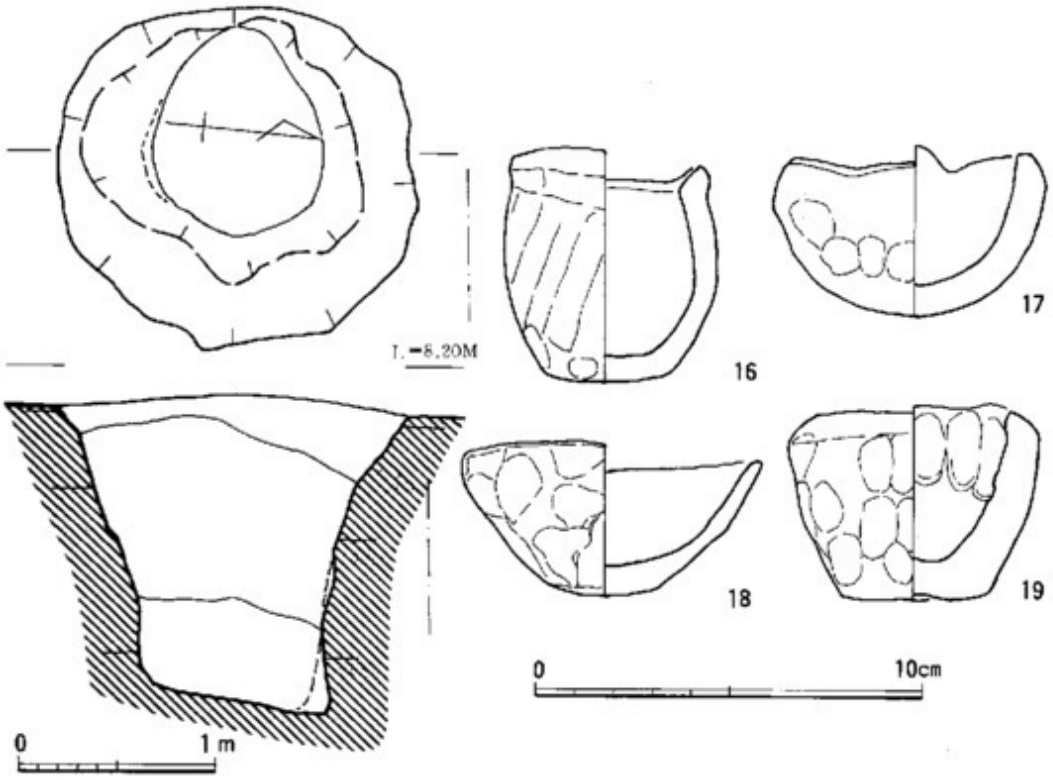


Fig. 7　第３号竪穴及び出土遺物実測図

出土遺物　16は，灰色を呈し，胎土に砂粒を含み堅緻で焼成も良好である。外面は指で整形した後，内面とともにヘラ調整で整形している。17は暗赤褐色～黒色を呈し，胎土には砂粒を含み，焼成も良好で，指で整形しており，内面はナデ調整を施している。18は，黄褐色を呈し砂粒を含み，焼成も良好で，外面には指による調整痕が残っている。19は，外面淡褐色～灰色，底部黒色，内面暗灰色を呈し，胎土に砂粒を含み，焼成も良で，内外面とも指調整痕がみられる。16～19はミニチュア土器である。

以上，竪穴の形状から，井戸的な性格をもつ遺構と思われるが，祭祀的な意味をもつ，袋状口縁の壺等の遺物の出土はなく，16～19のミニチュア土器が出土したのみである。

４．第４号竪穴（ＳＫ－４・Fig. ８）

調査区中央部で，川の横に位置し，第７層から八女粘土層まで掘り込まれている。長軸1.9m巾約1.5m，深さ約0.5mの変形隅丸長方形の竪穴で，中央部にW24・W32・W45～W47とシイノキを用いた丸杭の杭列があり，東西の壁には崩落を防ぐためと思われる，丸杭が多数打たれている。ただし，W52～W59は川の柵と考えられる。北側は川と接しており，本竪穴と接する川の西側・東側には堰状遺構があり，水を川から入れる遺構で築的用途をもつ遺構とも考えられる。

出土遺物　20は，口縁部はほぼ平坦であるが外側に少し下っており，胴中央部に一条の三角凸

帯が巡り，底部は少し上げ底の釜形の鉢である。器面調整は，全体的に横なで調整で，内面には，指痕が残っている。色調は，外面淡褐色，内面黄赤色を呈し，胎土に砂粒を含み，焼成も良好である。川からは，弥生時代後期前半までの土器が，多数出土している。S3は，白色硬砂岩製で，敲打整形後人念に研磨を加えている。器形から抉入片刃石斧の頭部片と考えられるが刃部欠損後砥石として再利用されたと思われる。S4は安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製の石包丁の刃部である。

以上から，本竪穴は，川に付設された遺構で，弥生時代後期前半と考えられる。

5．第1号建物（SB－1・Fig. 9）

本遺構は，I区の北側に位置し，柱穴は第4層下面から鳥栖ローム層まで掘り込まれており，P－3は第2号竪穴を切っている。桁行は約4.3mで梁行2.6mで，P－1・P－2の礎盤中心間は2.1m，P－3・P－4の中心間2.8m，P－4・P－5礎盤中心間は2.36m，P－5礎盤，P－6中心間は2.1m，P－6・P－1礎盤中心間は2.7mである。柱穴はいずれも

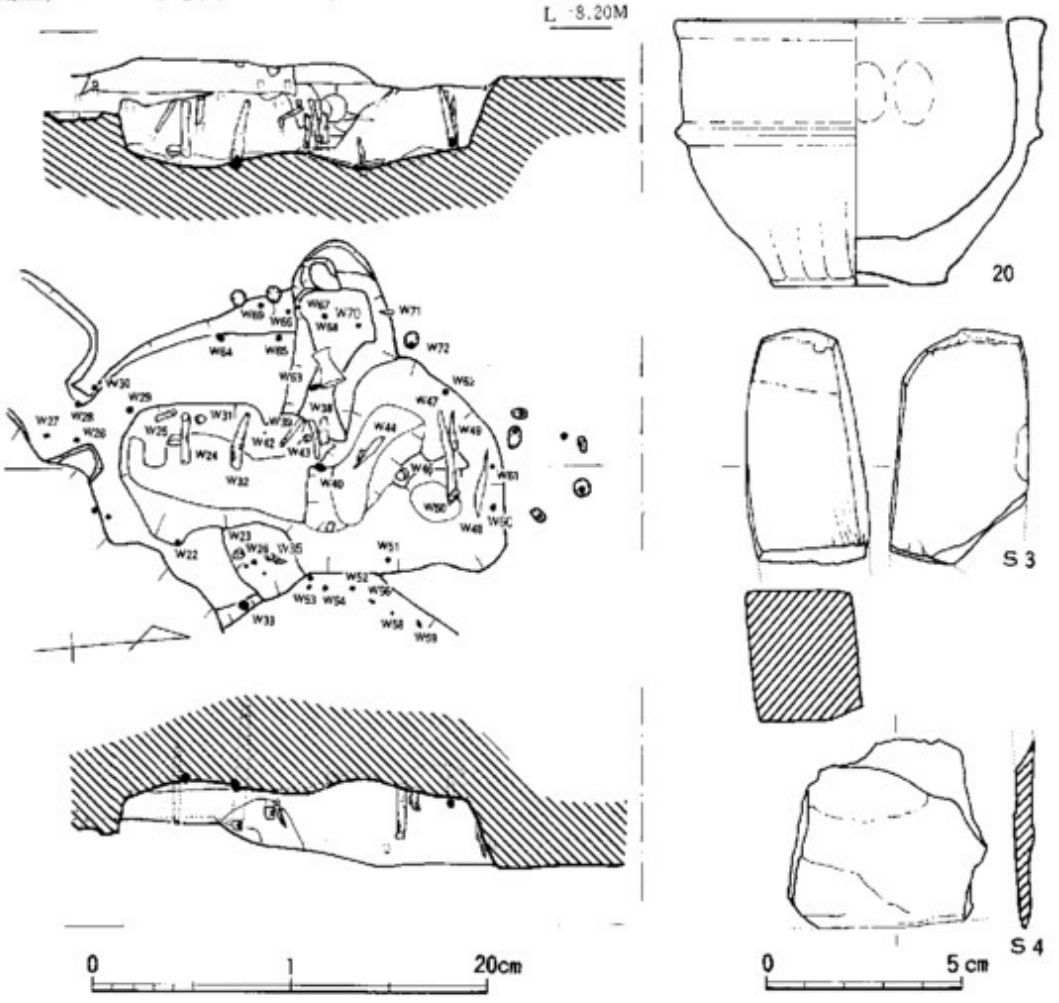
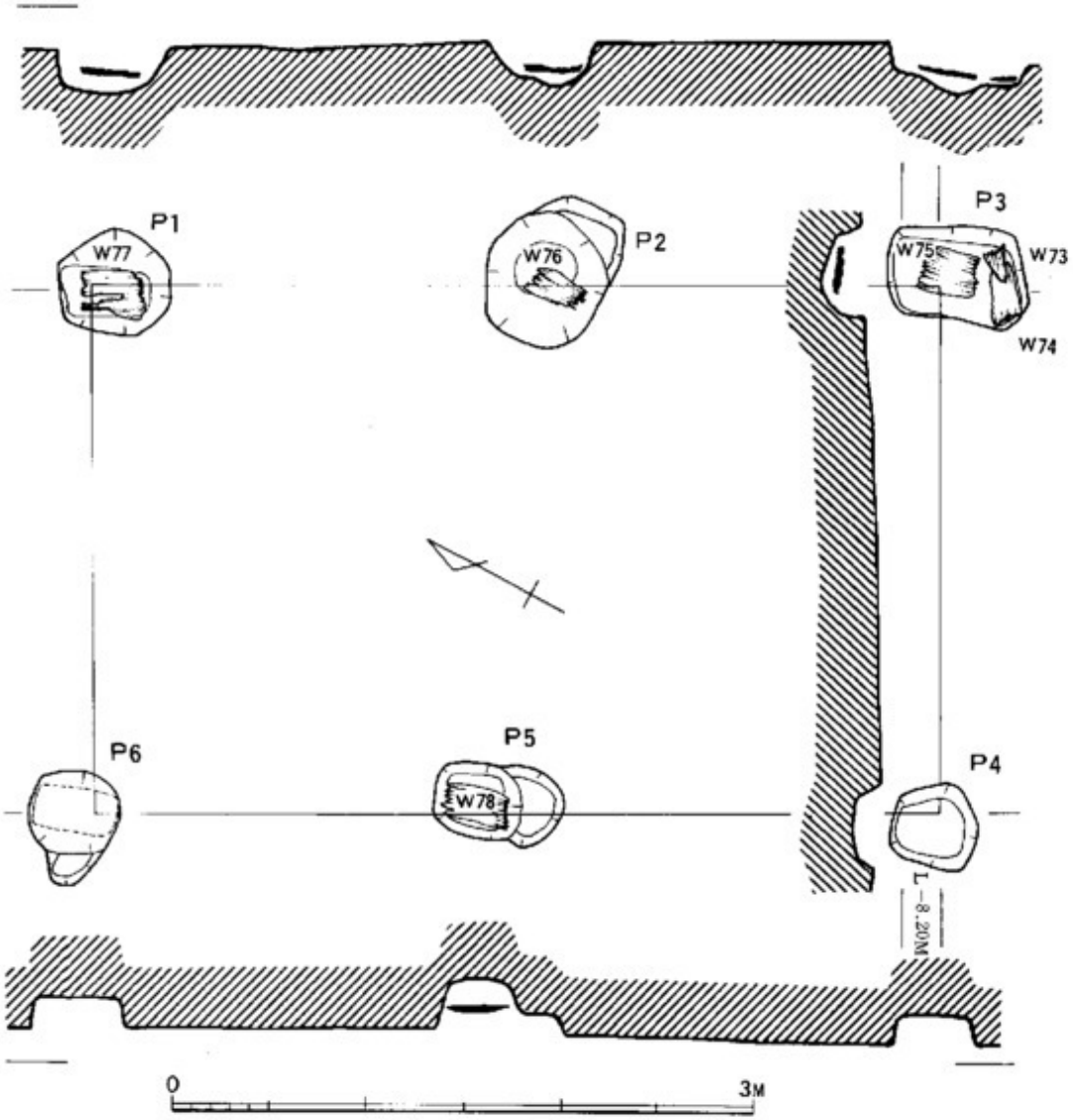


Fig. 8　第4号竪穴及び出土遺物実測図

ほぼ隅丸方形で，底までの深さは，約20cmの差をもっているが，P－1～3の礎盤は7.86m＋3cmで，P－4～6の礎盤の標高は7.94mとなって深さをあわせている。柱は残っていないが，柱穴の掘り方は，P－1が平面60×50cm，P－2が径60cm，P－3が90×50cm，P－4が50×45cm，P－5が45×40cm，P－6が50×40cmである。礎盤材としては，W74・75・77・78がヤマグワでW73がクリを，用いている。

6．川付設遺構（Fig．2）

第1堰状遺構（SS－1）　南西から北東に流路を取る川に直交する形でもうけられた施設で調査区Ⅰ区の南壁近く，第4号竪穴の西北部に位置している。W79～85・88～90・92～94・96・98～101・103・の21本の杭が打ち込まれており，W80～85・89・90・93・96・98の12本がカシ材



Fig．9　第1号建物実測図

の丸杭・板杭・¼丸杭等をもちい，他にアワブキ，タブノキ，サカキ，ヤマグワ材の丸杭をもちいている。

第２堰状遺構（ＳＳ－２）　第１堰状遺構の下流で，第４号竪穴の南東部に位置し，川に直交する形でもうけられている施設で，径３cm前後のカシの丸木を素材とした丸杭をもちいているカシ材の他には，シイノキ，ツバキ，サカキ等の材ももちいられている。

柵状遺構　川の西岸土手部に第１堰状遺構附近は密に，第２堰状遺構附近から下流には粗に径３cm前後のカシ材の丸木を素材とした杭を打ち込んで，護岸的意味をもつ施設である。他に杭材としては，サカキ，タブノキ，シイノキ，タイミンタチバナ等の材がもちいられている。丸杭が主であるが，板杭，¼～⅛丸杭等さまざまの平面形をもつ杭がもちいられているが，樹種による差はなく，杭の長さもまちまちである。

以上，川附設遺構は，杭を垂直に近い形で打ち込んだ施設で，いずれも横木，竹，スサ等を挟んだものは無かった。第１堰状遺構の下には2.5m巾，第１堰状遺構との北高差0.7mの溜りができており，第２堰状遺構下は，約１mの段差をもっているところから，川はかなりの水流をもっていたことがうかがいしれる。第１堰状遺構にとどまった形で，ひしゃく（Ｗ６）・鍬（Ｗ８）等，第１堰状遺構下の溜りで，弓（W10），くさび状木製品（Ｗ９）等の木製品が出土し，川からは，弥生時代前期～後期前半の土器，石器等が多量に出土している。傾向としては，川下層では弥生時代中期前半期の遺物が主体をしめ，上層にいくに従って弥生時代後期前半期の遺物が多くなってきている。出土遺物については，川出土の遺物の項で詳述する。

以上から，第１・２堰状遺構・柵状遺構は弥生時代中期前半～後期前半の自然流路に，もうけられた付設遺構で，こわれる度に補強されたものと考えられる。　（山口）

Ⅲ　包含層及び川出土遺物

第4層～第9層が遺物包含層であるが，第7層は板付Ⅰ式土器・夜臼式土器共伴期で，第8・9層は夜臼式土器期の単純時期遺物包含層である。第7～第9層は，一昨年度概要報告したG－7 a・7 b調査区確認の水田址に対応する時期であるため可能な限り図示した。第5層は多量の弥生時代各時期の遺物が出土したが，可能な限り各時期別に選別し図示した。第5層上面の須恵器・土師器，第4層出土の瓦器・磁器類は細片のため，出土したということだけを報告して図示・説明を加えないことにする。

1．第9層出土遺物

土器（Fig. 10～16）

壺（Fig.10　21～29，Fig.11　38～41）

壺は図示できる破片が13点出土している。21は内傾する頸部と外反する口縁部が，それに続く張りの強い胴部につき，頸部と胴部との境は明瞭である。調整は外面口縁部から頸部にかけてが横位のヘラ磨研。肩部は若干右下がりの，胴部下半は右下がり斜方向のヘラ磨研がなされ，外面の全面にわたって丹塗りが施される。内面は口縁部から頸部にかけて横位ヘラ磨研がなされ，上半には丹塗りが施される。胴部は切板による横位の削りに近いなでつけである。胴部内面は淡褐色を呈し，胎土には砂粒を含む。焼成は良好。22～26も口縁部である。22は口縁部の外反が少なく直立気味，24は端部が平坦面をなし，25は口縁部の接合が明瞭で肥厚する。調整は全てヘラ磨研で，22・24には丹塗りが施される。27～29・38・39は頸部から胴部にかけての破片で、いずれも頸部の内傾と肩部の張りが強く，29以外は頸部と胴部との境が明瞭である。調整は28・29・38がヘラ磨研，27は内外面ともナデ。39は外面がナデ，内面が横位のヘラ削りである。また28の外面，内面頸部上半と38の外面には丹塗りが施される。40・41は底部で，40は胴部との境に稜を持たない。41は底部から短かく立ち上がり，丸い胴部が続く。調整は内外面ともヘラ磨研がなされる。

鉢（Fig.11　30～36）

鉢は図示できる破片が8点出土している。30は中位で立ち上がる口縁部が，逆「く」の字状に強く反転して直線的に開く胴部につく。口縁部は内外面ともヘラ磨研の上から横ナデがなされ，外面と内面上半に丹塗りが施される。屈折部から下の胴部は，内外面いずれも横位のヘラ磨研である。胎土は微砂粒を含むが精良で，焼成は良好である。黒褐色を呈す。31は胴部上位で稜をもち，内傾して垂直気味に立ち上がり，口縁端部は強く外反し，外面にかぶさる。胴部上位の屈折部分から口縁端部までは30などと比較して長い。内外面ともに横位ヘラ磨研がなされるが，外面下半は磨研の前にヘラ削りを行なっていると思われる。また屈折部分には一部丹塗り痕が残存する。黒色を呈し，胎土には石英粒を多く含む。焼成は良好である。33～36も浅鉢片で，いずれも胴部上位で屈折し，口縁部を作る。33は屈折が鋭く，他は直立気味に立ち上

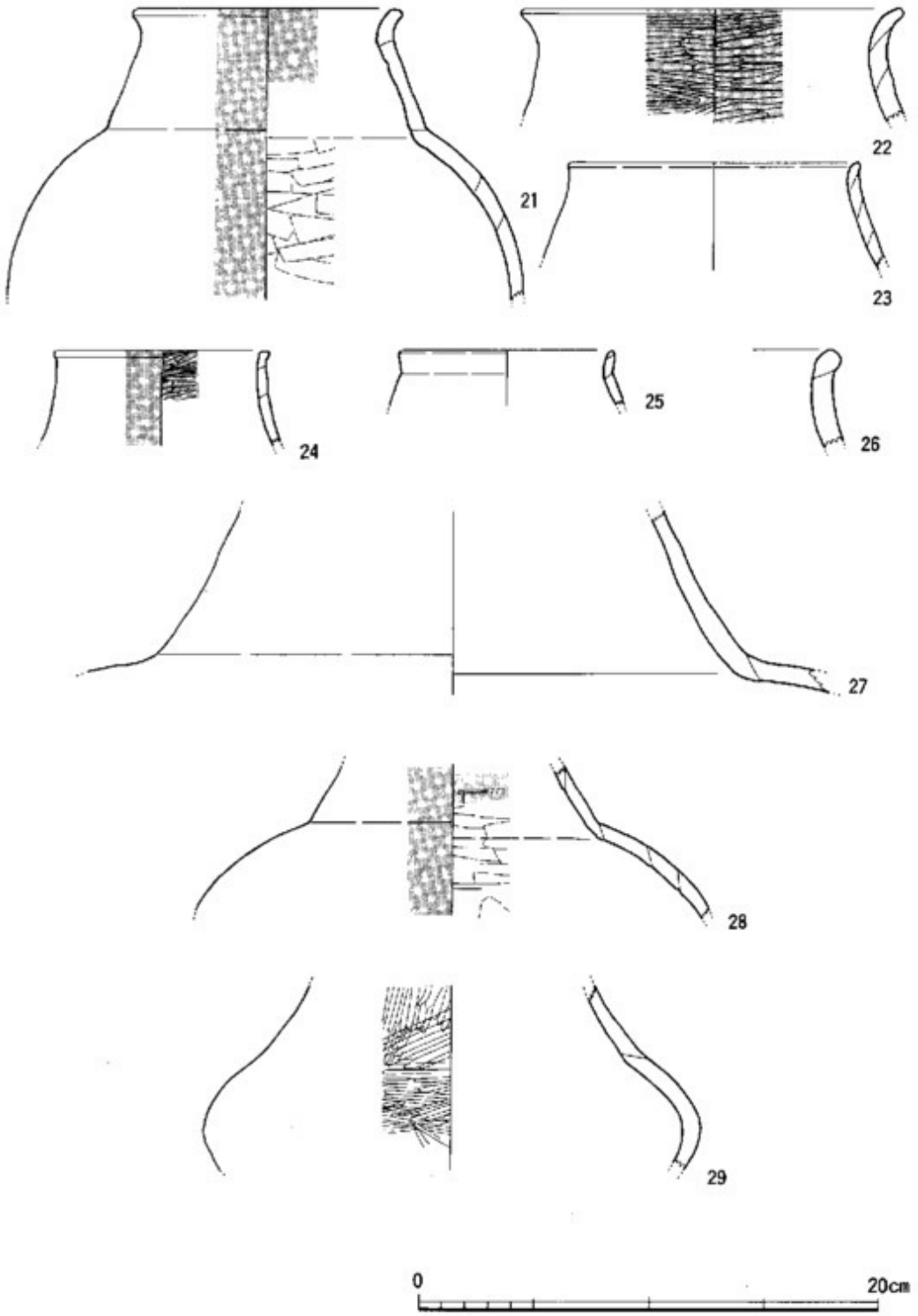


Fig. 10 第9層出土土器実測図(1)

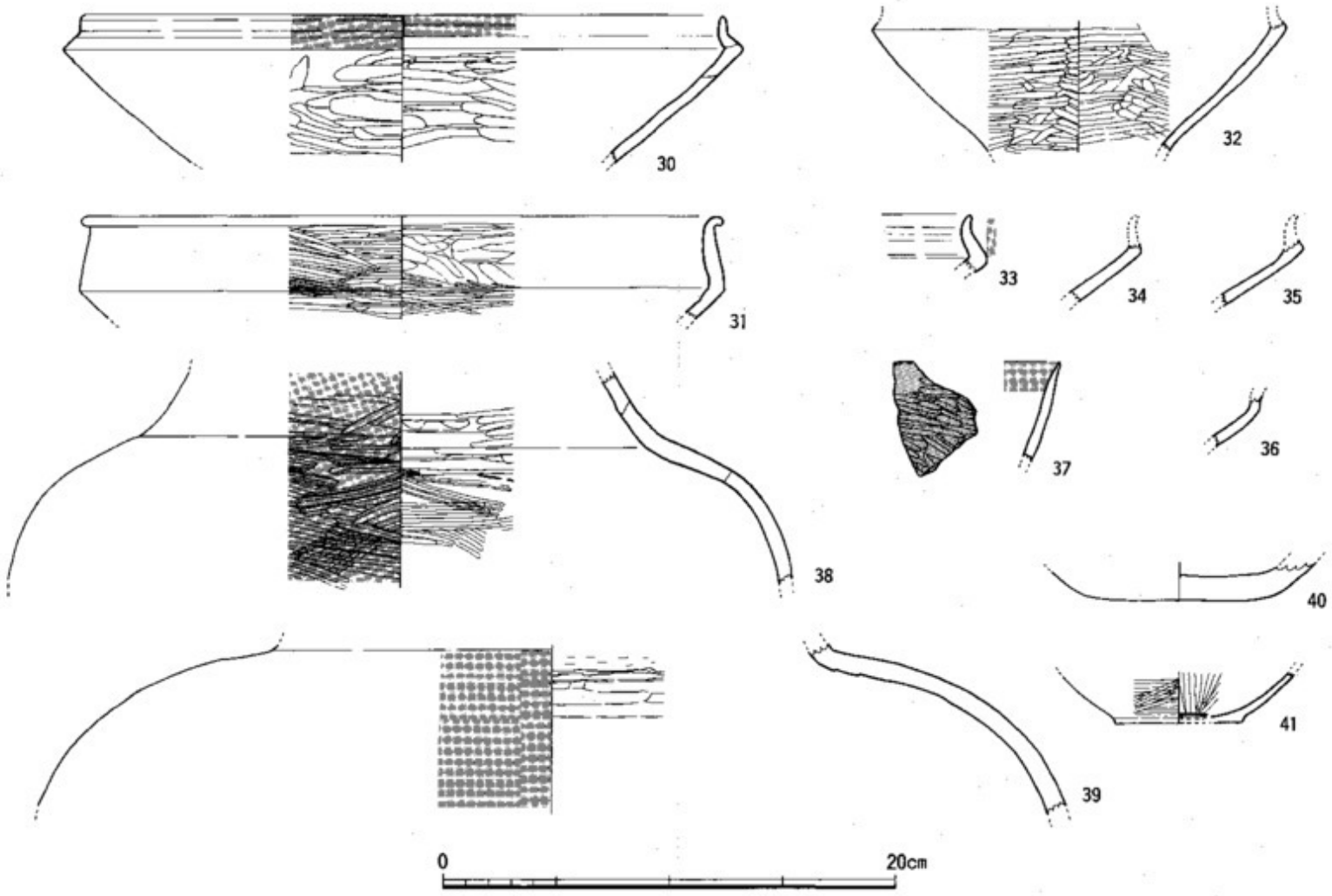


Fig. 11 第9層出土土器実測図(2)

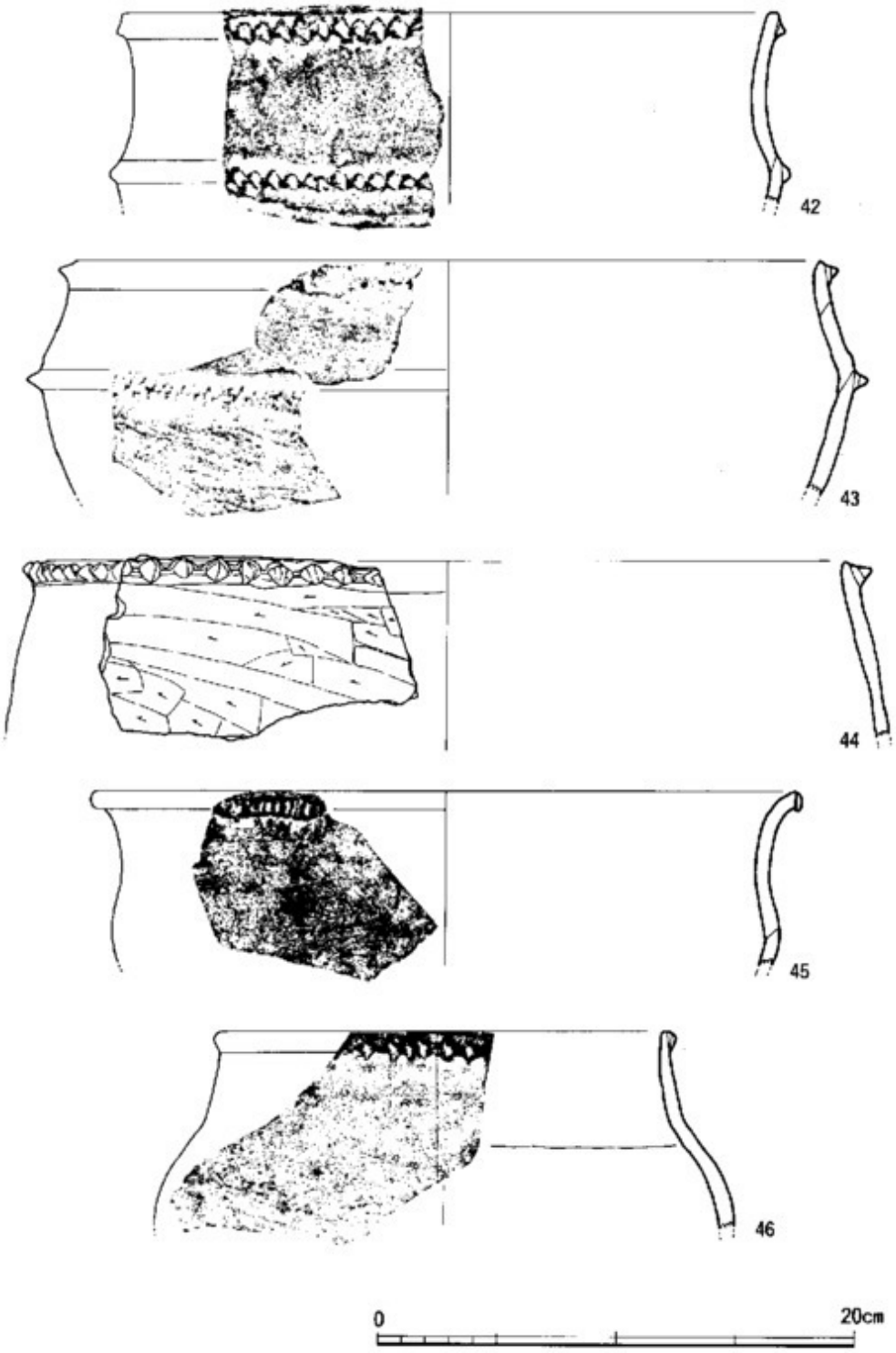


Fig. 12 第9層出土土器実測(1/3)

がる口縁部をもつものであろう。32は脚付きの浅鉢と思われるが，脚部と口縁部は欠損する。最大径は18.3cmを計りやや小形で，胴部は比較的深い。内外面ともほぼ横位のヘラ磨研がなされ，内面は磨研の上からなでている。微砂粒を含む精良な胎土で，焼成は良好。黒色を呈す。37は単純に開き，端部付近でさらに若干外傾する口縁部をもつ鉢である。破片が小さく口径の測定は不能。内外面ともにヘラ磨研がなされ，口縁部外面は横ナデ，さらに外面と内面上部に丹塗りが施される。丹塗り面以外は淡褐色を呈し，胎土に砂粒を多く含む。焼成は良好。

甕（Fig. 12~16）

(1) 刻目凸帯を有する甕（Fig. 12　42~46，Fig. 13　47~63）

a．口縁部と胴部上位に刻目凸帯を有し，胴部上位の凸帯部で屈折，内傾する。(43・44・50・51・56~62)

43・51は口縁部の凸帯および胴部の凸帯が断面三角形を呈し，刻目は細いヘラ状工具によって施される。口縁部の凸帯は43が端部より下に位置し，51は口縁外端に位置する。43は外面が横位条痕の上からナデ調整，内面は板ナデがなされている。51は内外面ともにナデ調整である。

53は口縁部凸帯の断面が台形で，平坦面をなす端部より下に位置する。胴部の凸帯は丸味のある断面をもち，刻目も口縁部と胴部ではつけ方に相違がある。内外面ともに横位条痕の上からナデ調整がなされる。40・50・56~62は，44・50が口縁部，他が胴部の破片である。44・50とも断面三角形の凸帯は口縁部より下に位置する。56~62では凸帯の断面が三角形のもの（56~58・60・61）と台形のもの（59・62）とがあり，刻目の施工具は62が貝殻で，他はヘラまたは棒状の工具を使用している。胴部凸帯からの屈折内傾は57などに比較して56が強い。調整はナデ・条痕・条痕の上からナデなどがあるが，44の内面は横位の擦痕が著しい。また煤の付着は44・56~62に見られる。胎土に砂粒を含むものは43・53・57~62で，石英粒を含むものは50・51・56である。焼成は全て良好である。色調は黒色を呈すものが50・56・57・59・60で，43は暗灰色，51が灰茶褐色，58が灰褐色，62が淡褐色をそれぞれ呈す。

b．aと同様刻目凸帯を口縁部と胴部上位に有し，胴部上位の凸帯部で屈折，内傾するが，口縁部にかけてゆるやかに外反する。(42)

口縁部凸帯は断面三角形を呈し，平坦な端部より僅かに下がった位置に貼り付けられる。刻目は貝殻によって施される。胴部凸帯は断面が台形で，刻目はやはり貝殻によって施される。内外面ともにナデ調整がなされる。胎土に砂粒を含み，焼成は良好。淡灰褐色を呈すが，一部に煤の付着がある。

c．胴部上位で内傾し，端部は外反する。(49)

口縁部のみの小破片であり，胴部に凸帯を有するものかは不明である。口縁部凸帯は断面三角形を呈し，刻目はヘラ状工具によって施される。内外面ともにヘラか板によるナデ調整がなされる。胎土に砂粒を多く含み，焼成は良好。色調は暗灰褐色で，外面には煤が付着する。

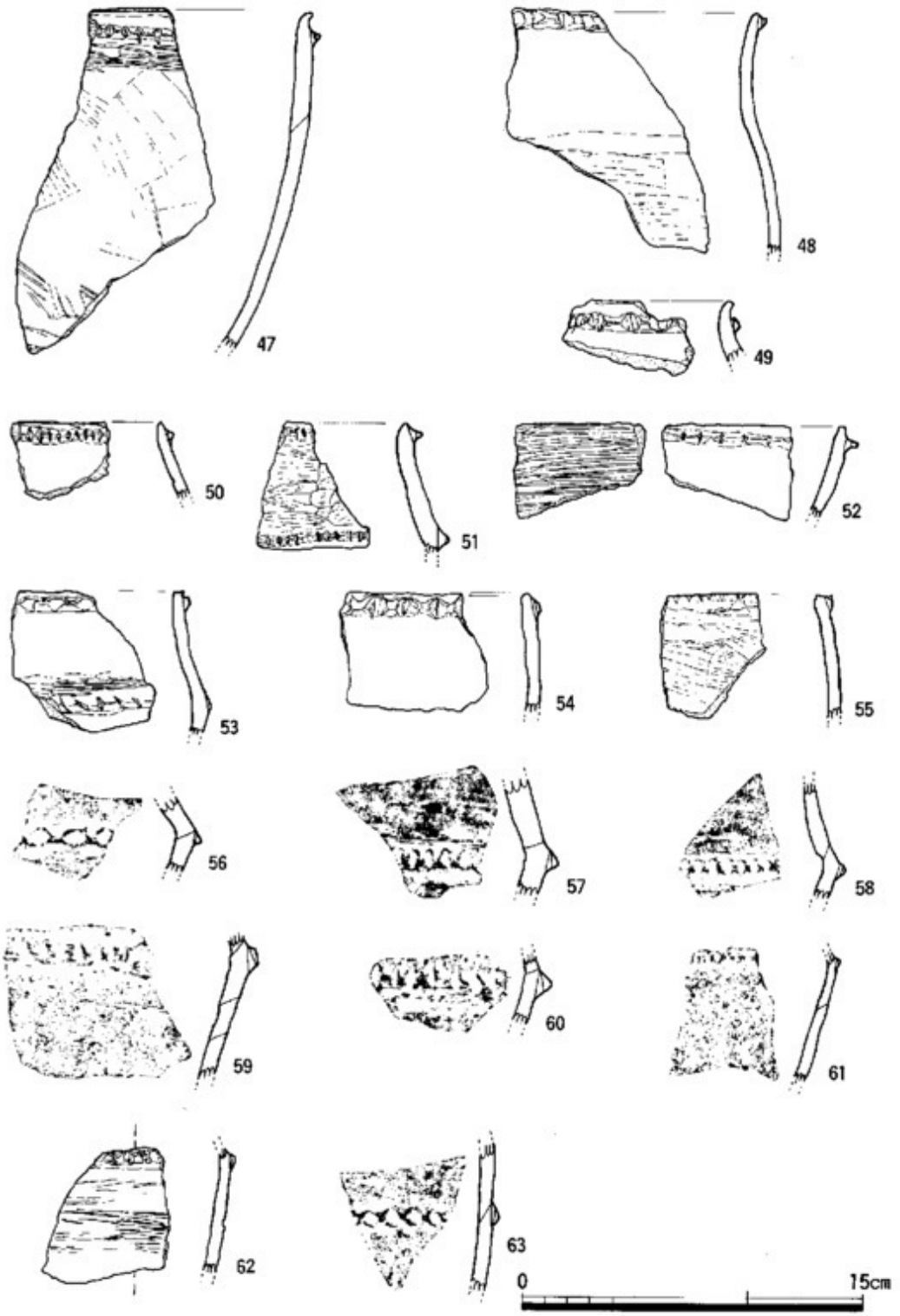


Fig. 13 第9層出土土器実測図(4)

d．胴部がゆるやかに内湾して口縁部をつくり刻目凸帯を有す。(54・55)

54・55ともに口縁部のみの破片で胴部に凸帯を有するものかは不明である。54は断面台形の凸帯が端部より下に位置し，刻み目はヘラ状工具によって施される。55は断面三角形の凸帯が口縁外端に位置し，その先端は上方につまみ上げられる。刻目は細いヘラ状工具によって施される。54・55ともに板またはヘラによるナデ調整。胎土に砂粒を含み，焼成は良好で，煤の付着が見られる。

e．鉢形で，口縁部に刻目凸帯を有す。(52)

外側に引き伸ばされ変形した断面三角形の凸帯は端部より下に位置し，刻目は細いヘラ状工具によって施される。外面は条痕の上からなで調整。内面は明瞭な横条痕が施される。胎土に石英粒を含み，焼成は良好で煤の付着が見られる。

f．胴部上位でゆるやかに反転し，刻目凸帯を有す口縁部へと続く。反転部分に凸帯はもたない。(45・46・48)

45は口縁部の外反が強く最大径は口縁部に位置し，端部に貼り付けられた断面蒲鉾形の刻目凸帯はナデ調整によって下方に押し出される。内外面ともに板ナデがなされ，凸帯の刻目は細いヘラ状工具で施される。胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。煤の付着がみられる。46は内湾する胴部が上位でゆるやかに反転，内傾し，口縁外端に断面三角形の刻目凸帯を付ける。外面は横位条痕の上からナデ調整され，内面上半は横位条痕の上から板ナデ，下半は横位条痕である。凸帯の刻目はヘラ状工具によって施される。

胎土には砂粒を含み，焼成は良好で，外面には煤が付着する。48は46に比較し，胴部の張りが少なく，口縁部はやや外反する。口縁外端に断面三角形の凸帯が貼り付けられ，刻目はヘラ状工具によって施される。内外面ともに横位条痕の上から板ナデがなされる。胎土には砂粒を含み，焼成は良好で，外面に煤の付着が見られる。

g．ゆるやかに開く胴部と外反して如意形をなす口縁部をもち，口縁端部下に刻み目凸帯を有す。(47)

内外面ともに板なでによる調整がなされ，凸帯の刻み目は細いヘラ状工具によって施される。胎土に砂粒を含み焼成は良好で，外面に煤の付着が見られる。

(2) 刻目凸帯をもたない甕（鉢） (Fig.14・15 64～74)

a．鉢型土器 (64)

欠損するが丸底と思われる底部からゆるやかに開く。口縁部はやや肥厚し，端部は丸くおさめる。調整は外面が一見ヘラナデに見えるが単位が認められるので目の粗い条痕と思われ，底部付近には指頭圧痕が各所に見られる。内面は指の押圧調整の上から部分的に条痕，底部付近は不定方向のヘラナデ，最後にナデ調整がなされる。外面に煤，内面に炭化物が多量に付着す

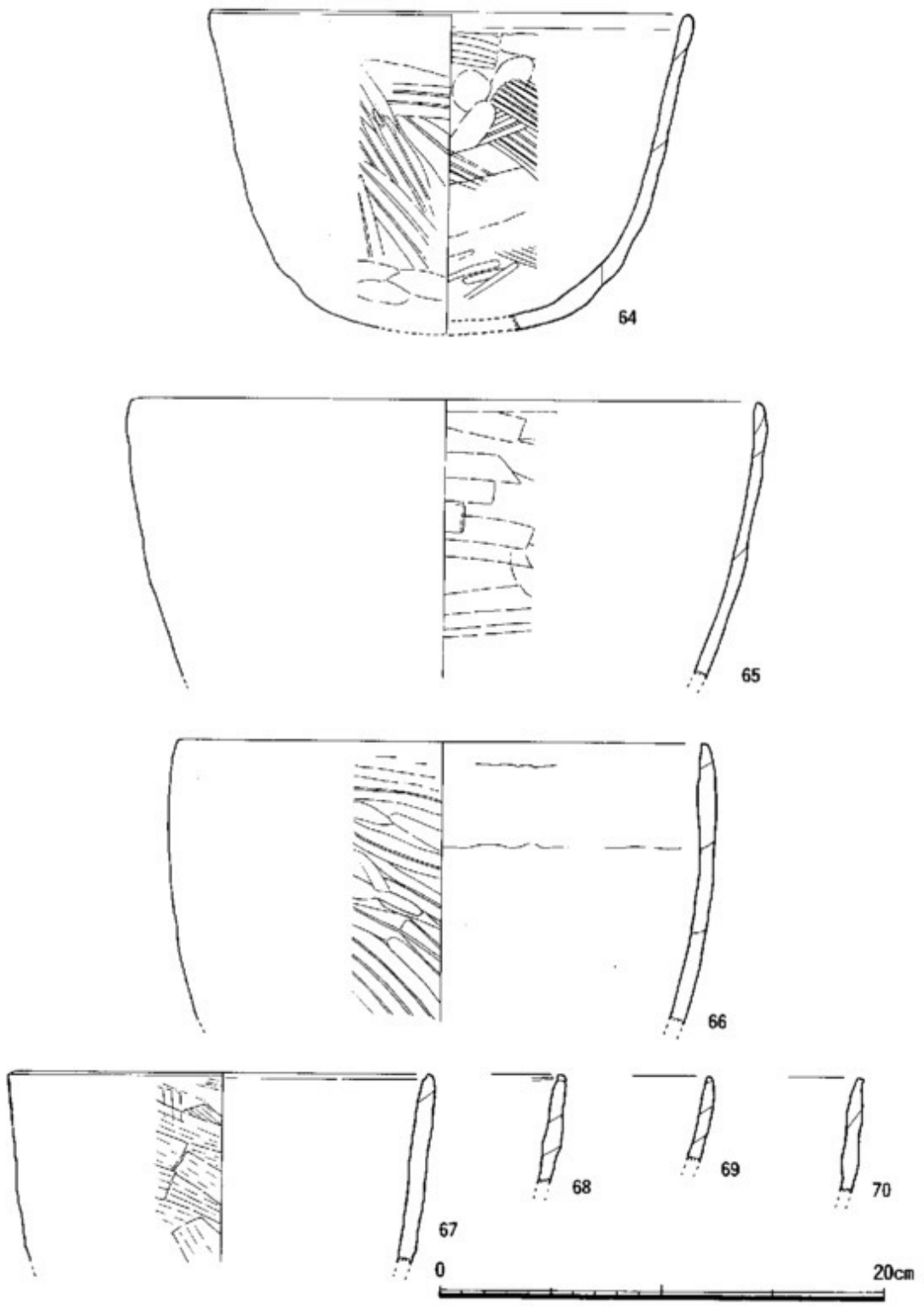


Fig. 14 第9層出土土器実測図(5)

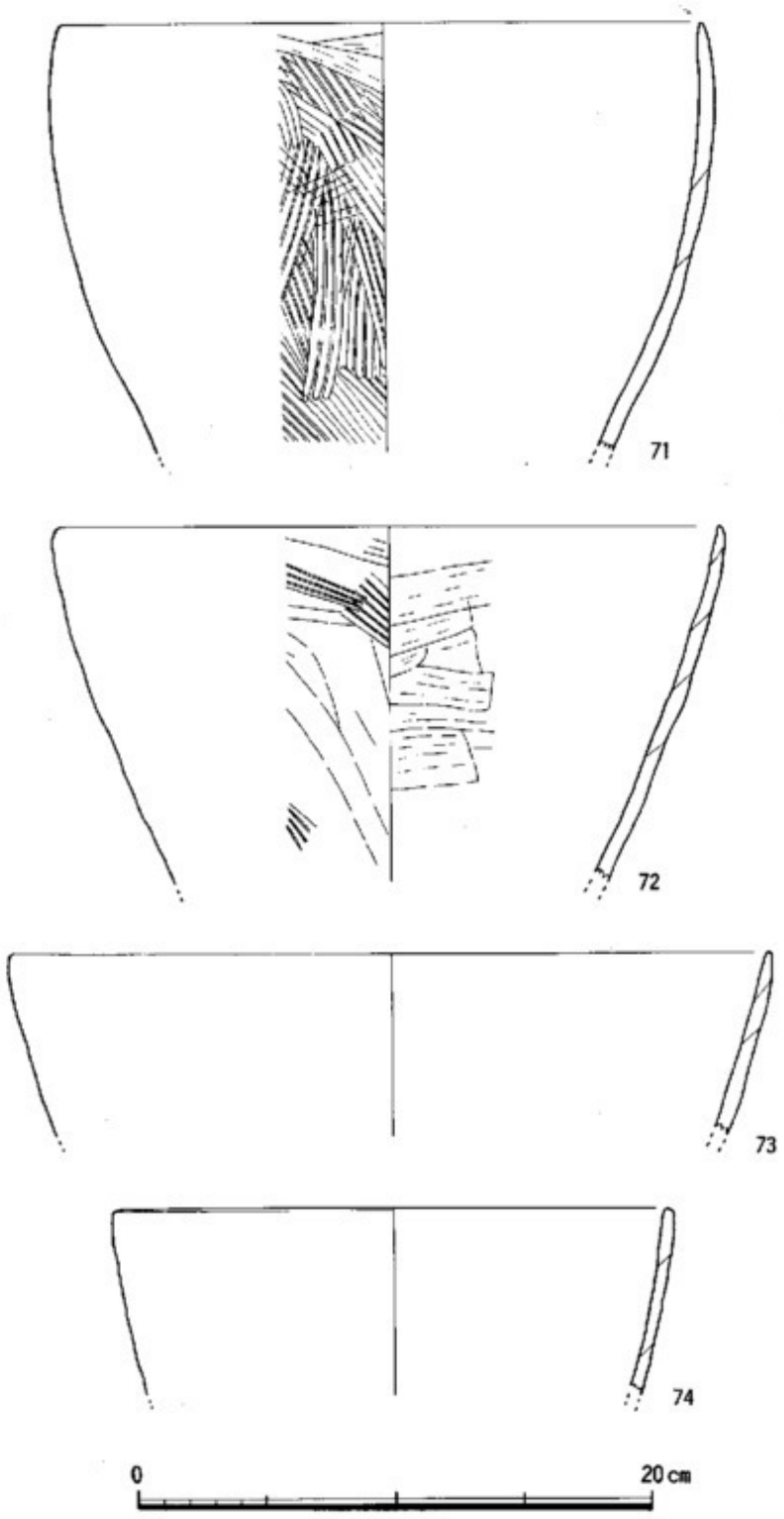


Fig. 15　第9層出土土器実測図(6)

る。胎土に砂粒を含み，焼成は良好である。

b．口縁部が内弯し，最大径が胴部上位に位置する。(65・66・71)

65・66は口縁端部が平坦面をなし，71の端部は薄く，丸味をもつ。調整は65が内外面ともに板状工具による横方向のナデで，内面は特に明瞭である。66・71は外面が条痕，内面がナデ調整で，66の内面は粘土接合痕が完全に消されていない。全て胎土に砂粒を含み，焼成は良好で，煤の付着が見られる。

c．口縁部が単純に開く。(67～70・72～74)

69・72・73は端部付近で若干内弯気味になるが，これは端部のナデ調整の際のものであろうと思われ，器形としては単純に開くグループに分類できよう。67は口径19.1cmを計りやや小形で，口縁部まで厚さはほぼ変わらない。68は口縁端部が小さく内側に曲げられる。また70は口縁端部がやや外反する，69・72・73は前述のように単純に開いた胴部が口縁部でわずかに内弯気味，薄くなり端部は丸味をもつ。74は口径19cmでやや小形であり，端部は丸くおさめる。調整は72の外面に条痕が見られる他は全て板状工具を使用したナデである。また全部に煤の付着が見られる。胎土には砂粒か石英粒を含み，焼成良好。

(3) 底部 (Fig.16　75～86)

75～80・86は胴部との境から張り出す。全てナデ調整である。胎土に砂粒か石英粒を含み焼成は良好で，色調は淡黄赤色(75)，灰褐色(76～78・86)，暗褐色 (79・80) である。81～83は端部の張り出しが少なく，底面にナデによる凹みがみられる。82は内面ヘラ調整，83が内面ナデ調整で他は不明。砂粒を含み，焼成は良好。84・85は端部がやや張り出し，断面が高台風を呈し，上げ底である。85は内外面ともナデ調整と思われる。砂粒を含み焼成は良好。

以上のように第9層出土の甕を分類した。口縁部・胴部は実測可能の破片が33点出土しているが，うち22点は刻目凸帯を有し，残りは刻目凸帯を持たない。これらは同層内での出土であり，個々の時期差は無いものとして差しつかえない。刻目凸帯を有するものとそうでないもの，また刻目凸帯を有するもののうちに見られる各種の器形の差異は同時期内でのバラエティーとして把えてよいであろう。第9層の甕の特徴としてあげられるのは，刻目凸帯をもたない甕の占める割合が第8層，第7層と比較して著しく大きいということである。前述のようにその割合は1：2である。また両者において刻目凸帯をもたないものの方が指頭による押圧調整痕や粘土接合痕などが各所に残り，全体に仕上げが雑であるという印象を与える。これに何らかの意味付けを行なうとすれば用途の違い，製作者の違いなどがあげられるが，いずれも想像の域を出ない。包含層からの出土でもあり，ここでは事実報告にとどめる。(浜石)

石器 (Fig. 17　S 5～S 7)

S5は漆黒の黒曜石の剥片の表裏とも入念な剥離加工を加えて，断面凸レンズ状に整形しているが，右脚部は欠損している。重さは0.7g±α。S6も漆黒の黒曜石製石鏃で，剥片の打面を剥離

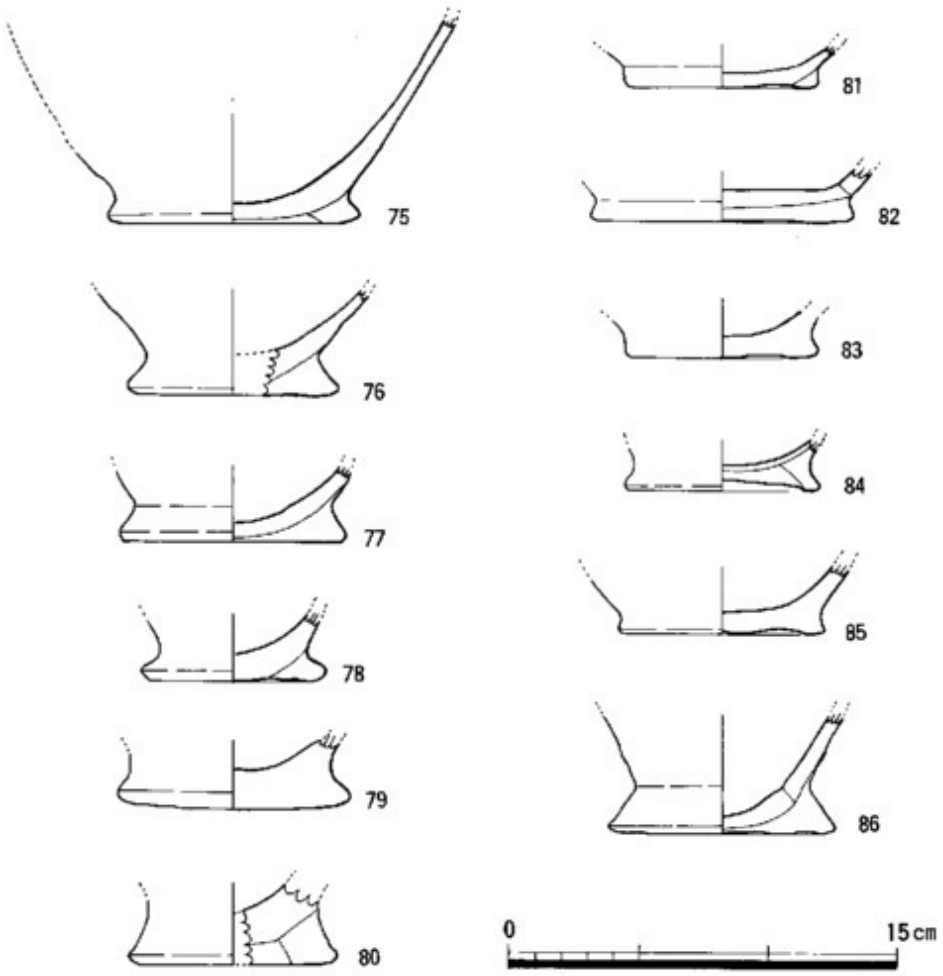


Fig. 16　第9層出土土器実測図(7)

加工によって尖らせ，基部にも表裏とも粗く剥離加工を加えて抉りを入れている。重さは0.3g。S7は，黒曜石の剥片を素材として打面を剥離加工によって尖らせ刃部を作り出している石錐（オール）で，刃部は磨滅している。本層中からは，他に黒曜石製の使用痕のある剥片石器・砂岩製の砥石・剥片・削片・石核等が出土している。(山口)

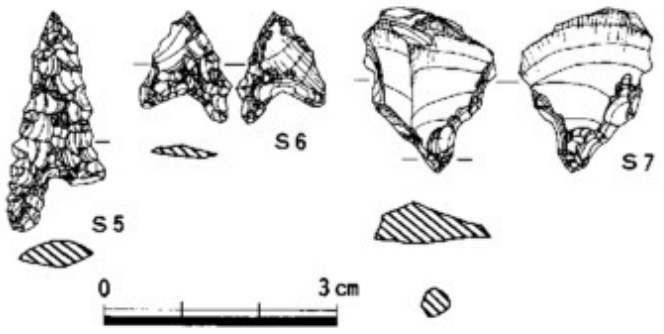


Fig. 17　第9層出土石器実測図

2．第8層出土遺物

土器（Fig. 18～20）

壺（Fig.18　87～90・92・99・100）

87は，口径6.1cm,胴最大径10.6cm，器高11.3cmの完形品である。底部は丸底に近い平底で，球状の胴部に直に立ち上がる頸部をもち，口縁は少し外反している。指整形後器表にはヘラ磨研が加えられているが，凹凸が激しく，剝落もしており，指押痕もそのまま残っている。器内面はナデ調整が施されている。底部は黒色，胴部から口縁部は淡褐色を呈し，胎土には石英・砂粒を含みあまり良くなく，焼成は良い。88・89・99・100は内傾する頸部で口唇部が少し外反する口縁部をもつもので，88・99の頸部は89・100よりも内傾している。口径は，88が 6.5cm，89が14.1cm，99が8.1cm,100が13.8cmで，いずれも黒色～灰褐色を呈し，胎土には，石英・砂粒を含み，器面調整はていねいな横方向のヘラ磨研で，器表面には，砂・石英粒はでていない。90は丸底に近い底部で，底部中央部がわずかに凹まっている。現存高は11.1cmで，胴部最大径は21.5cmである。器表面は横方向のヘラ磨研で，内面は板状工具による横ナデか。粘土帯は内傾し，胎土には石英・砂粒を含み堅緻で，焼成も良い。92は口縁部であるが細片であるため，器形・口径は不明である。

高坏（Fig.18　91）

鉢に脚部をつけた形状で，口縁部は欠損しているが，完形に復元できる。屈曲部上部には一条の浅い沈線が巡り，復元口径は22cm，屈曲部が最大径となり23.1cm，復元器高10.8cm，脚部高2.6cm,脚部径11.8cmを計る。黒色を呈し，粘土帯のつなぎめは内傾し，胎土には微砂粒を含み，焼成も良い。器表面は横方向のヘラ磨研が施されているが，屈曲部付近は磨滅，剝落している。器内面は，上半部横方向のヘラ磨研で，底部付近は放射状の磨研の上にナデ調整を加えている。

鉢（Fig.18　93～98）

93～95は口唇部が外反する口縁部で，97・98は屈曲部下の胴部片である。いずれも黒色を呈し，胎土には微砂粒を含み堅緻で，焼成は良い。器面は表裏ともヘラ磨研である。96は4ヶ所に突起をもつものと思われるが，1ヶ所の突起片が出土したのみで，浅鉢になると思われるが高坏状になるかもしれない。黒色を呈し胎土には微砂粒を含み堅緻で焼成も良い。器面は入念なヘラ磨研が加えられている。

甕

(1)　刻目貼り付け凸帯を有する甕（Fig.19　101～118，120～123）

101～ 108，111・120～ 125は，胴上半部に屈折部をもつ甕で，口縁部の刻目は凸帯部一杯に入れている。115は底部からゆるく内傾しながら口縁部にいたる甕で，口縁端に三角凸帯を巡らし，浅く刻目を入れている。屈折部をもつ甕は，口縁部の凸帯は口唇から少し下に位置

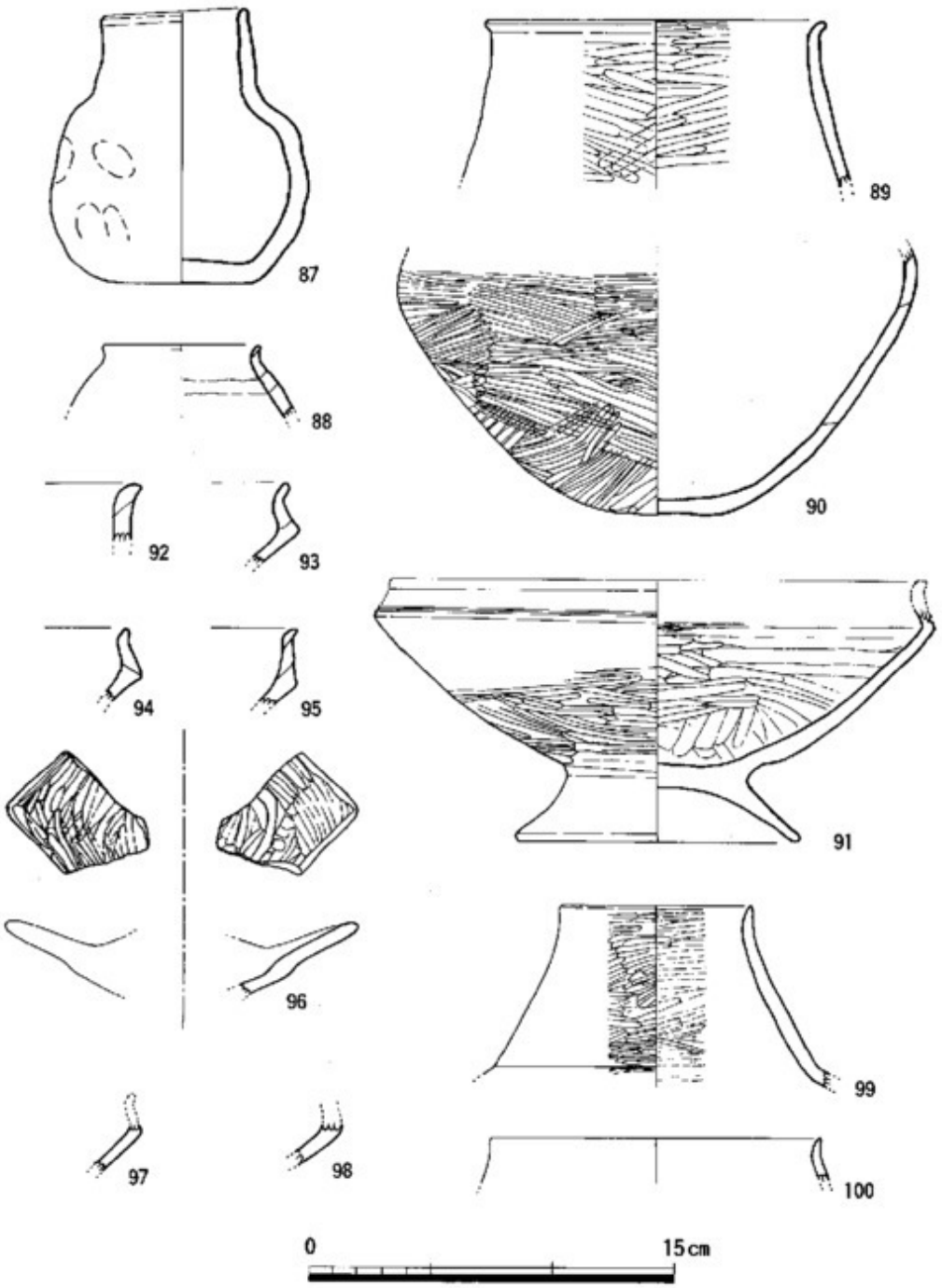


Fig. 18　第8層出土土器実測図(1)

Fig. 19　第 8 層出土土器実測図(2)

しており，115等は口縁端部に刻目凸帯が位置している。いずれも淡褐色から黒褐色を呈し煤が付着しているものが多い。胎土には石英・砂粒を含み，焼成も良い。器表面は，101 ・ 102 ・ 108・ 110・ 111・ 116～ 118・ 121～ 123がナデ調整，103・ 104・ 106・ 112～ 114・ 120・ 125は口縁部が横ナデで，胴部は条痕が施されている。

(2) 外反する口縁端に刻目を有する甕（Fig.19 119）

復元口径14.4cmで黒色を呈し，器表面には煤が付着しており，胎土には微砂粒を含み焼成も良い。器面はナデ調整が施されている。

(3) 刻目凸帯を有しない甕（Fig.20 126～132）

126～ 128は底部から開きながら口縁部にいたる甕で，126の復元口径は16.3cmである。126・127は茶褐色，128は灰色を呈し，器表面には煤が付着しており，内面には炭化物が付着している。胎土には石英・砂粒を含み堅緻で焼成良好。器表面はナデ調整で器内面は横方向の条痕施文の上からナデ調整が加えられている。

129～ 132は底部からゆるく内傾しながら口縁にいたる甕である。129～131が暗灰色，132が茶褐色を呈し，器表面には煤が，器内面には炭化物が付着している。胎土には石英・砂粒を含み堅緻で焼成も良い。器表面は，条痕施文の上にヘラナデ？が加えられ，器内面はナデ調整が加えられている。

(4) 底部（Fig.20 133～139）

133～137は底部が張り出しているもので，133は2.1cmと厚い底部をもち，139は高い上げ底でいずれも甕の底部である。底部径は，133が9.6cm，134が9.4（復元）cm，135が7.7cm，136が8.5cm，137が10.3cm，138が7.8cm，139が8.0cmである。133～135の張り出し部は粘土帯を貼り付けたもので，137・138は底部充填と考えられる。139は器表面はナデ調整で，上げ底部はヘラ調整が加えられている。

石器（Fig.21 S 8）

黒色堆積岩を素材とした蛤刃石斧の刃部片で，敲打整形後入念な研磨が加えられている。刃部は両刃で刃こぼれがみられ，約65°の角度をもっている。刃部のみのため，体部・頭部の形状はわからないが楕円形の横断面をもつと考えられる。

木製品（Fig.21 W 2，Fig.22 W 3）

W 2はクヌギの板目で割った材を素材として，枝根に当たる部位を柄孔と想定して作られた諸手鍬の半製品である。枝根部は円錐状に削りを入れ，柄孔隆起側は板目に沿って上下に少し下るように削りを入れ，反対側は板目に沿ってほぼ平坦になるように削りを入れて整形しており，柄孔を意識してか凹まりがあり縦断面はそっている。長さ54.2cm，上端巾27.7cm，下端巾18.4cm，柄孔部厚4.5cm上端厚2cm，下端厚1.5cmである。W 3もクヌギの板目で割った材を素材として，柄根に当たる部位を柄孔と想定して製作されているエブリの半製品である。柄孔は，枝を

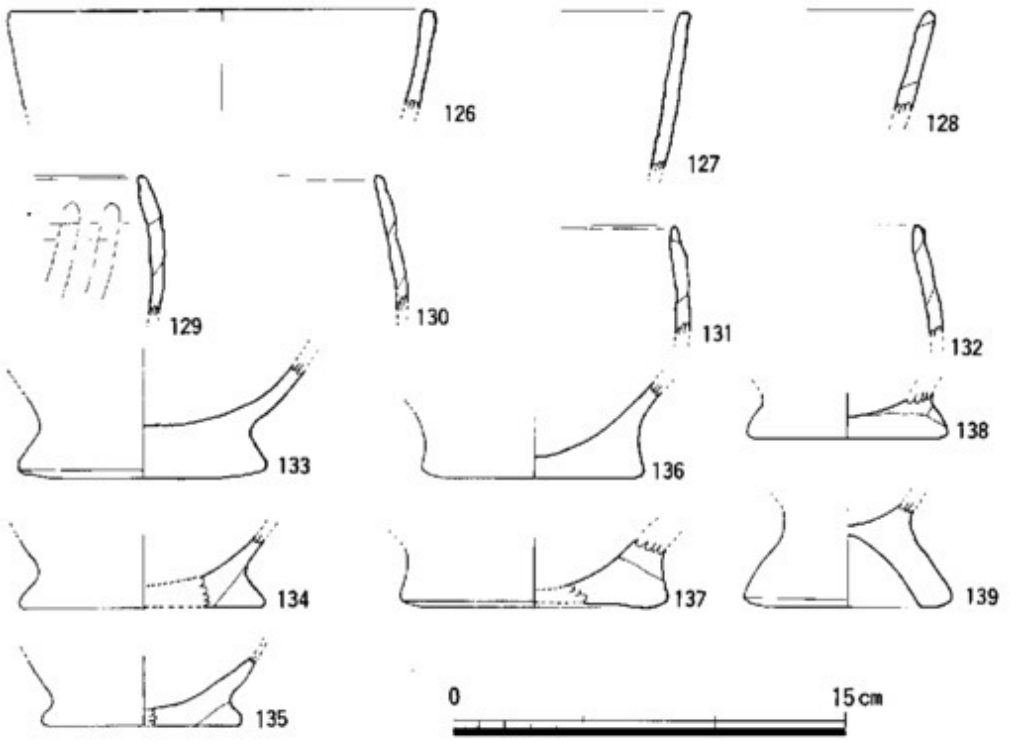


Fig. 20　第８層出土土器実測図(3)

切り落とした後，円錐形状に削りを入れ，柄孔隆起側・反対側とも板目に沿って削りを入れている。長さ54cm，巾14.8cmの長方形で，柄孔部の厚さ７cm，柄孔隆起部を表とすると，右縁辺は2.5cm，左縁辺は0.5cmと薄く仕上げており，刃部を意識したものと思われる。

以上の出土遺物から，第８層は夜臼式土器期の遺物包含層である。板付遺跡G-7a・7b調査区の第12～14層に対比する層で水田址が確認されているが，先述したように，本調査では確認できなかった。しかし，第８層中からは，木製農耕具の半製品(W2・W3)が出土しており，鉢の屈曲部下の胴部片の胎土に籾（PL.Ⅸ）が入っている。これは，米がこの時期にあったことを示し，農耕具出土から本時期に板付遺跡では水稲耕作があったことを，遺物から裏付けたといえよう。（山口）

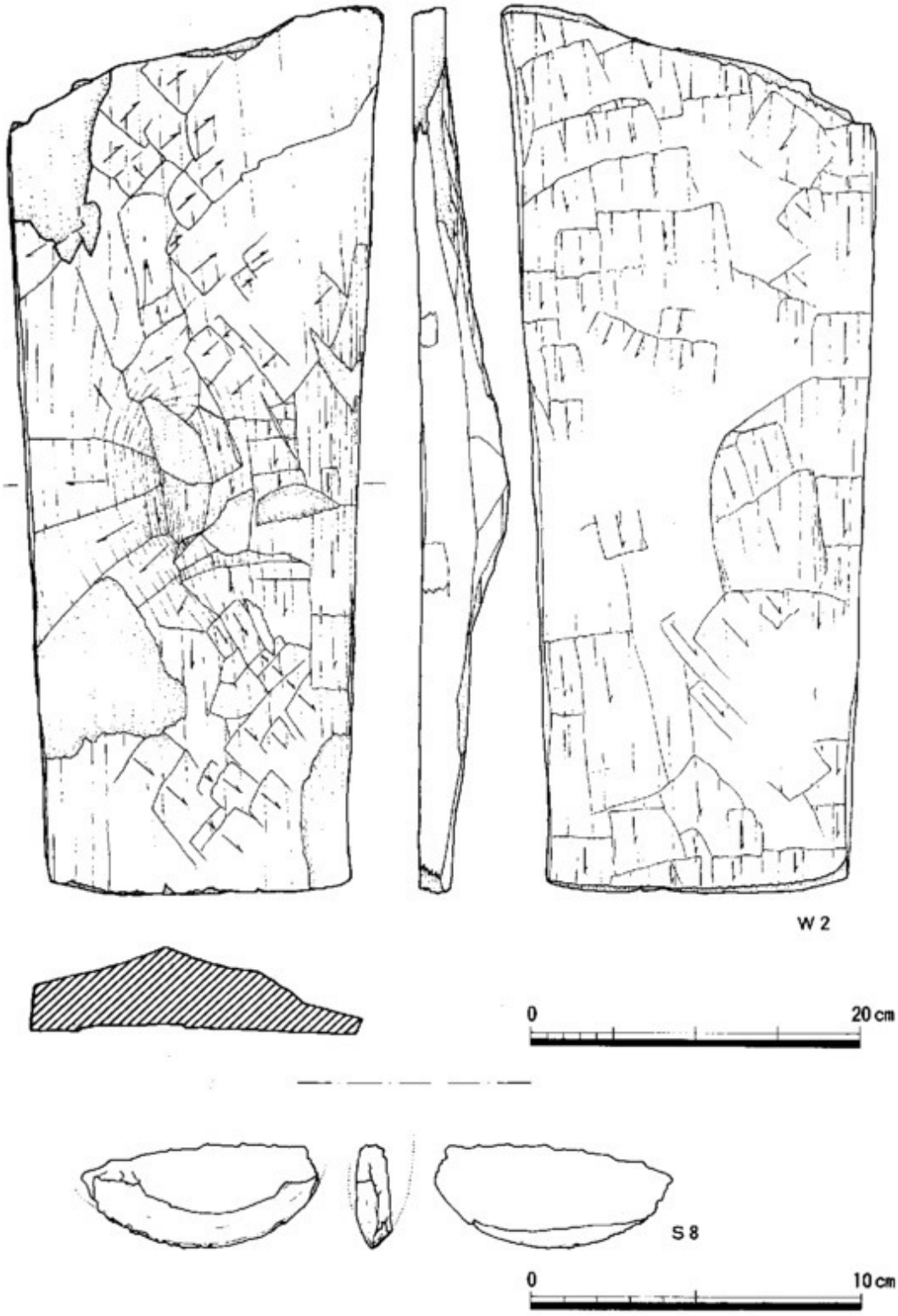


Fig. 21　第８層出土木器及び石器実測図

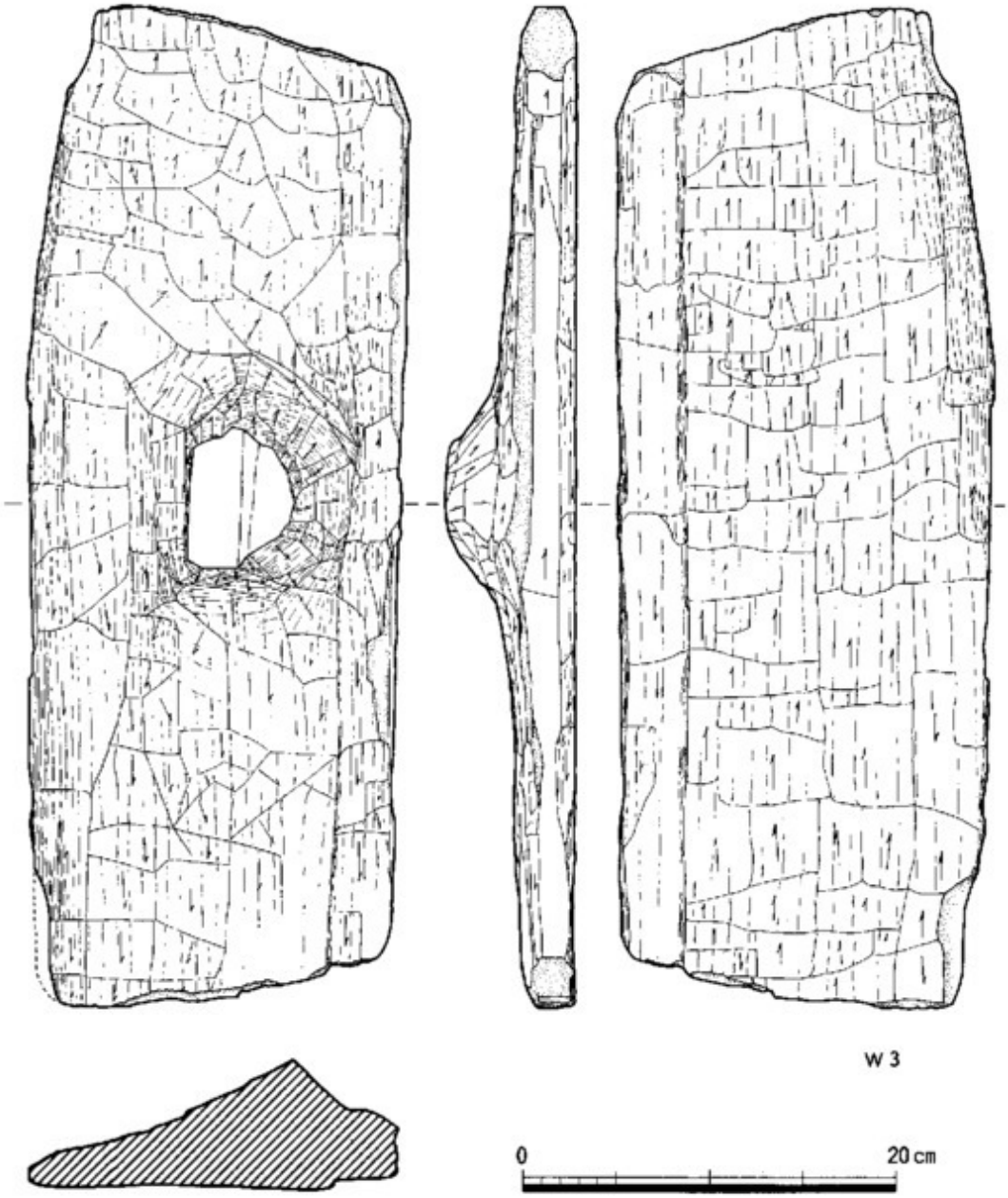


Fig. 22　第8層出土木器実測図

2．第7層出土遺物

土器（Fig.23～28）

夜臼式土器・壺（Fig.23　140～154）

140は強く張る胴部に内傾する頸部がつき，口縁部は「く」の字状に外反する。外面は全面にわたり横・斜位のヘラ磨研がなされる。内面は口縁部から頸部にかけて横位のヘラ磨研，胴部はナデによる横位の擦痕があり，内面全体に粘土の接合痕が明瞭に残る。石英粒を含むが精良な胎土で，焼成も良好である。黒色を呈す。141も同様な器形を呈すと思われる。内外面ともにヘラ磨研を施し，内面の頸部には丹塗り痕が残る。胎土に砂粒を含み，焼成は良好，色調は淡黄赤色～黒色である。142～144も口縁部で，140・141に比較して口縁部の外反が少ない。142の調整はヘラ磨研と思われるが，器面の荒れのため断定できない。外面と内面口縁部にかけて丹塗りが施される。143は外面から内面口縁部にかけてがヘラ磨研，頸部は横位の板ナデがなされ，ヘラ磨研の部分に丹塗りが施される。144は磨滅のために調整は不明である。胎土に砂粒を含むが，142・143は精良で，焼成はすべて良い。145は外弯する口縁部で，外面はヘラ磨研・丹塗り，内面は磨滅のため不明である。砂粒を含み焼成は良好。146～149も口縁部であるが，いずれも小破片で口径の測定は不能である。146は端部付近で小さく外反し，148は内傾する口縁部で端部は平坦面をなす。149はゆるく外反する。146～148は胎土に砂粒を含み，149は石英粒砂を含む。焼成はいずれも良好である。150は胴部で頸部の一部分を含む。外面にはていねいなヘラ磨研がなされ，内面は板による横位のナデである。151は頸部から胴部上位にかけての破片で，外面は非常に目の細かいヘラ磨研，内面は横位の条痕が施されている。胎土に石英粒を含み，焼成は良好，黒色を呈す。152～154は底部で，152は平底，底面に籾圧痕が残る。153は胴部との境が丸味を帯びた平底，154は円盤貼付け状で，板付Ⅰ式の可能性もある。調整は152・153が外面ヘラ磨研，内面ナデ，154は内面がヘラ磨研である。胎土は152・153が砂粒を含み，154が石英粒砂を含む，焼成はいずれも良好である。

夜臼式土器・鉢・高坏（Fig.24　155～161，Fig.27　224）

155～158・161は胴部上位で屈折する。155の屈折は強く，沈線からは垂直に立ち上がる。156は155に比較して屈折が少なく，口縁部にかけて外反する。157はさらに屈折が少なく，屈折部と口縁部の径はほぼ等しい。158は口径14.8cmを計り，小形で胴部は深い。224は丸味を帯びる胴部下位から直線的に開き，端部はやや肥厚する。口径12.2cmを計る小形の鉢である。内外面ともにヘラ磨研がなされる。微砂粒を含み，焼成は良好，灰褐色を呈す。

板付Ⅰ式土器・壺（Fig.24　162～166）

162～164は肩部に彩文のある土器である。162は丹で沈線と交互に平行文を施し，その下に複線山形文を施す。163は一条の沈線に区画され，黒色顔料で沈線より上部にやや変形した

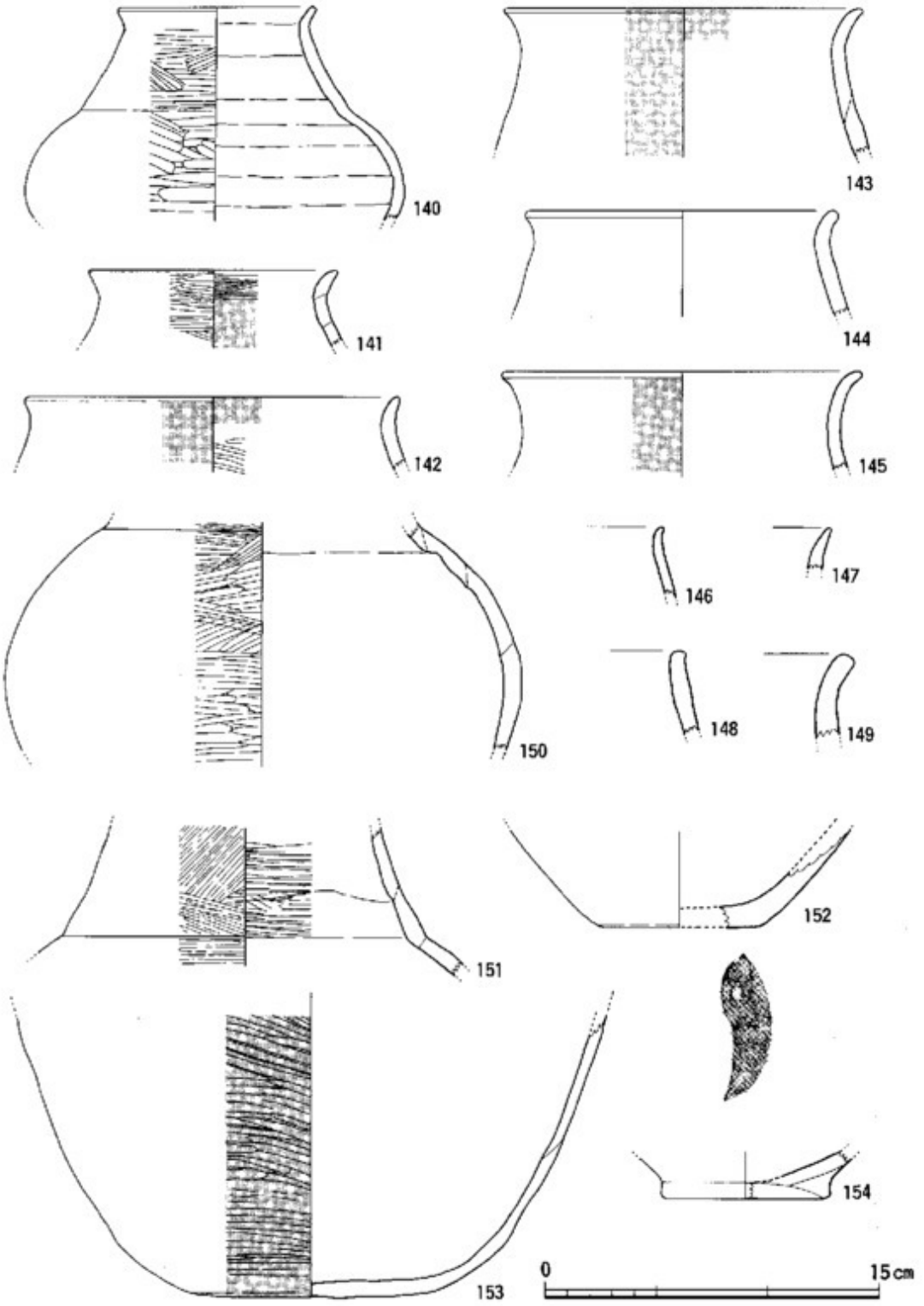


Fig. 23　第7層出土土器実測図(1)

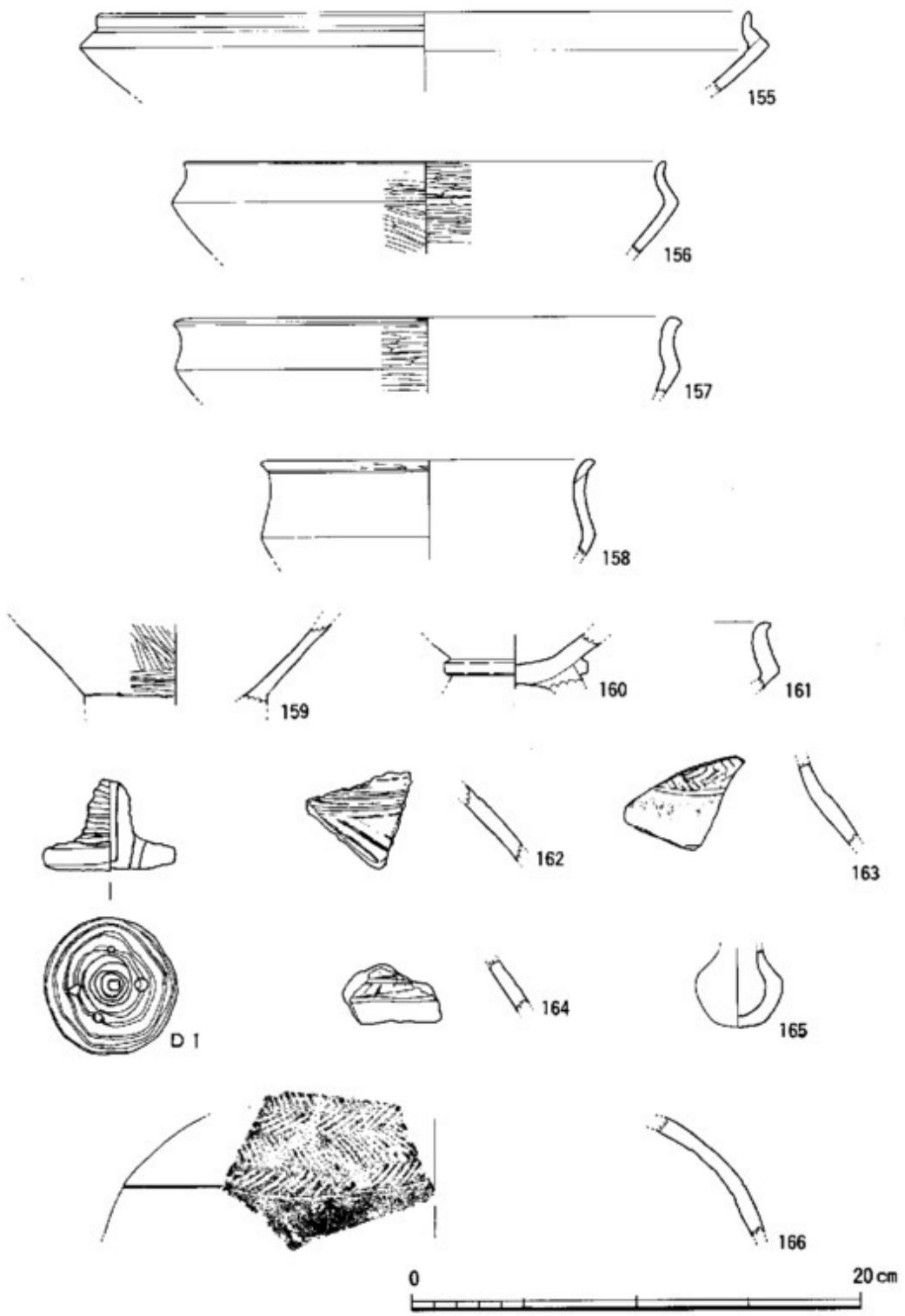


Fig. 24　第 7 層出土土器実測図(2)

無軸羽状文，沈線下には鋸歯文状の彩文がなされるが，ほとんど残っていない。164は丹で沈線を軸とする有軸羽状文が施される。いずれも精良な胎土を用い，焼成も良好である。166も肩部で，一条の沈線が巡り，その上は無軸羽状文である。胎土に石英粒砂を含み，焼成は良好，明褐色を呈す。板付Ⅱ式の可能性もある。

夜臼式土器・甕（Fig.25 167～191，Fig.26 192～213，Fig.27 214）

(1) 口縁部に刻目凸帯を有する甕（167～211，213）

a．外傾する口縁部（167 ～ 169，172・173，178～ 180，192～ 195，198・203・204 ・ 213）

180 までは刻目凸帯が端部より下に位置する。167は器高が低く鉢形を呈すと思われる。断面蒲鉾形の凸帯にヘラ状工具で刻目を施す。168以下は口径の測定不能の小破片で，168・172・173の凸帯は断面が台形，169・179・180は断面が三角形である。刻目はいずれもヘラ状工具によって施される。調整は 167～ 169・ 172・ 179の外面に条痕がなされ，内面はナデである。また 169は条痕の上から凸帯を貼り付けたと思われる。173・ 178は内外面ともにナデ調整である。煤の付着は 167～169，173，178～180にみられる。胎土に砂粒を含むものが 167・169，178～ 180で，石英粒砂を含むものが 168・ 172・ 173である。192～ 195，178・203・204の凸帯は口縁外端に位置する。凸帯の断面はすべて三角形で，刻目は 194・ 205が棒状，他がヘラ状工具によって施される。調整は 192の両面，195の外面が条痕，他はナデである。すべて煤が付着し，胎土には砂または石英粒を含む。焼成は良好である。213は口縁端部に刻目を施し，凸帯も貼り付ける。 183も外傾する口縁部であるが，端部にかけて外反し，如意形をなす特殊な器形である。また端部下にも刻目凸帯を有し，二段の刻目をもつ。胎土に石英粒砂を含み，焼成は良好，外面には煤が付着する。

b．口縁部が内弯する（174 ・ 175・ 197・ 201・ 207・ 210）

174 ・ 175は断面三角形の刻目凸帯が端部より下に位置する。刻目はヘラ状工具で施し，ナデ調整がなされる。胎土に石英粒砂を含み，焼成は良好である。175には煤が付着する。197・ 201・ 207・ 210は断面三角形の刻目凸帯が口縁外端に位置し，刻目は 201が棒状の，197・ 207・ 210はヘラ状工具で施される。197は内外面ともにナデ調整，201・ 210は外面が条痕，内面がナデ調整で，207は内外面ともに条痕がなされる。胎土に砂を含むのは 201・ 207・ 210で，197は石英粒砂を含む。いずれも焼成は良好で煤が付着する。

c．ほぼ傾きのない口縁部（170・171・176・181・188・199・200・202・206・208・209）

170 ・ 176・ 181・ 188の凸帯は断面が三角形，171は断面が台形で，端部より下に位置する。刻目は 170・ 176がヘラ状，171が棒状の工具によって施される。残りは凸帯が口縁外端に位置し，凸帯の断面は 202が台形で他は三角形である。刻目は 188・ 199・ 209がヘラ状の他は棒状工具によって施される。調整は 170・ 199が内外面ともにナデ，181・ 188・ 200・

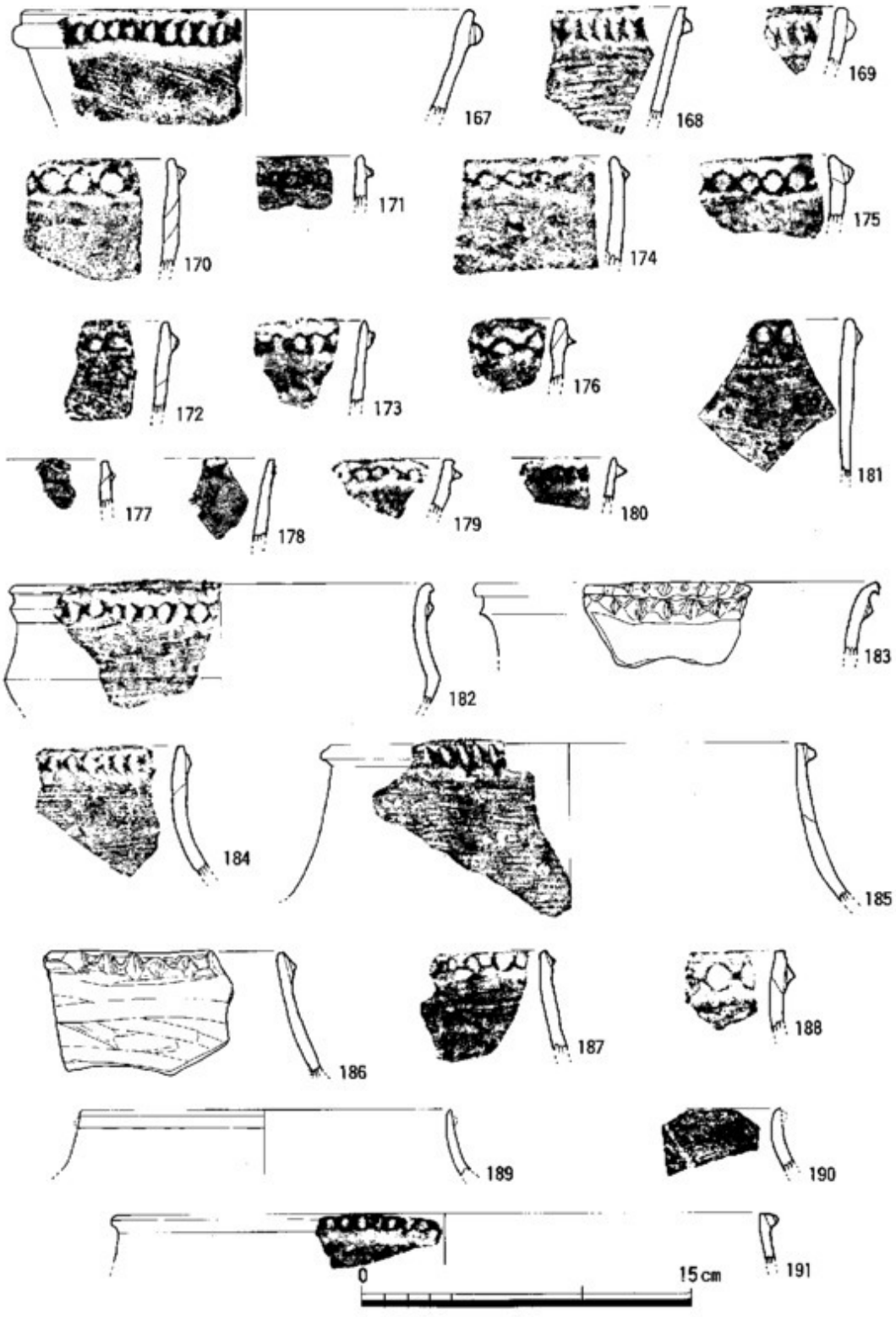


Fig. 25　第7層出土土器実測図(3)

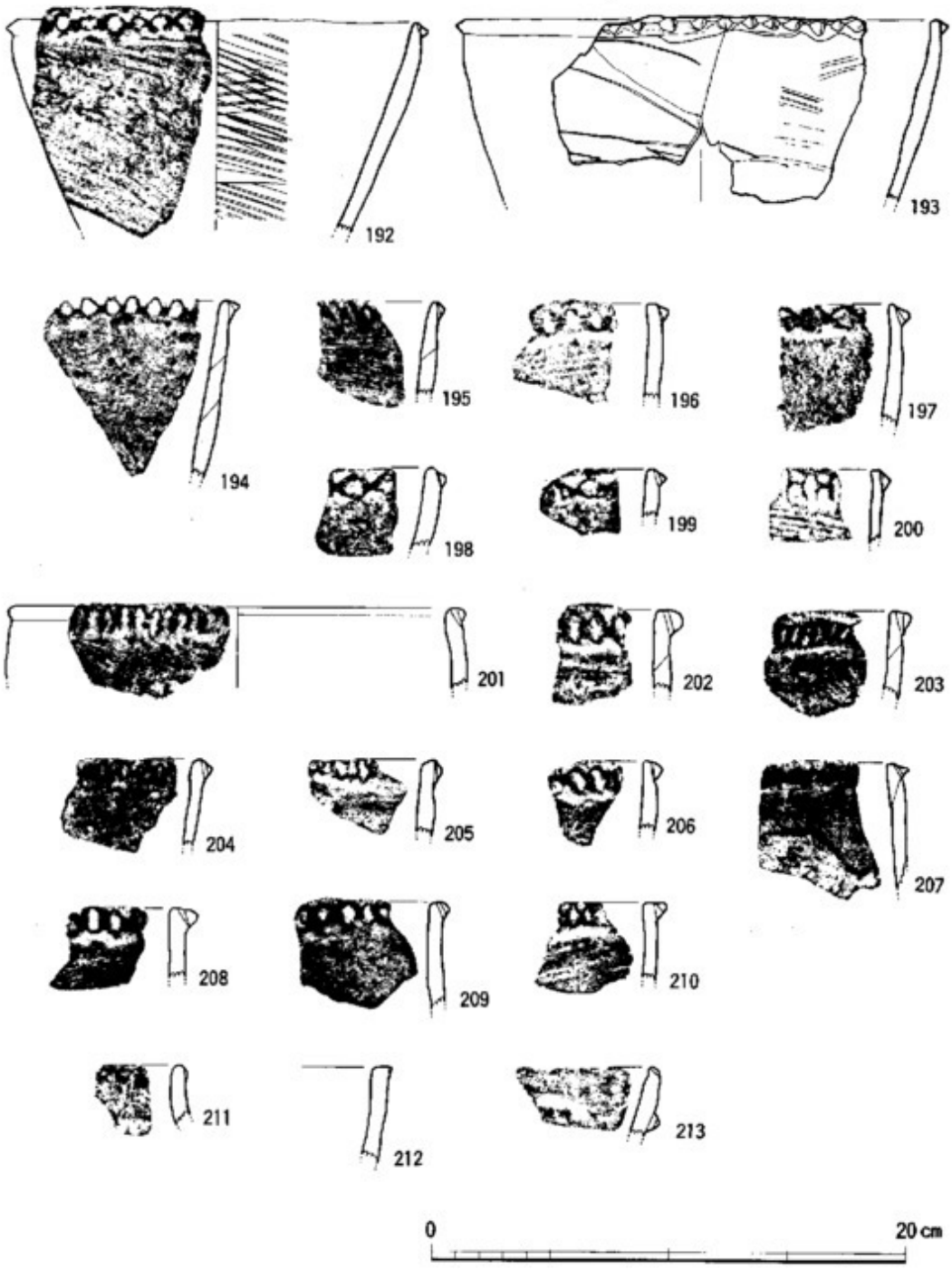


Fig. 26　第7層出土土器実測図(7)

202 ・ 206・ 208・ 209が外面条痕，内面ナデで他は磨滅のため不明である。 188は条痕調整のあとに凸帯を貼り付けている。胎土に砂粒を含むのは 171・ 176・ 181・ 188・ 200・ 202 ・ 206・ 208で， 170・ 199・ 209は石英粒砂を含む。焼成はいずれも良好で， 170・ 176・ 209 以外には煤が付着する。

d．内傾する口縁部（177 ・ 182・ 184～ 191・ 211）

177 ・ 182～ 184・ 188・ 189は凸帯が口縁部より下に位置し，他は口縁外端に位置する。凸帯の断面は 184・ 185が台形で他は三角形， 189・ 190は凸帯が欠損する。刻目はヘラか棒状の工具によって施される。 182は特異な器形で胴部上位で屈折，稜を作り内傾して凸帯の付近で外反する。端部はナデのため外面にかぶさる。 180・ 190は器形としては甕で煤付着もあるが，器壁も薄く，ヘラ磨研がなされる。胎土に石英粒砂を含むのは 177・ 187で残りは砂粒を含む。焼成はいずれも良好で，外面には煤が付着する。 211は内傾する口縁部をもつが，口縁外端は凸帯を貼り付けたものか，肥厚させたものかは不明である。 214～ 220は胴部の屈折部分である。 220は凸帯の断面が台形で，他は三角形を呈す。刻目は 215・ 220がヘラ状，残りは棒状工具によって施される。調整は 214が特異でヘラ磨研がなされ，他は外面が条痕，内面がナデである。

(2) 刻目凸帯をもたない甕（221 ～ 226）

221 は端部付近で内弯する。いずれもナデ調整であるが， 226の内面は条痕か刷毛目調整がなされる。 226は胎土に石英粒砂を含み，他は砂粒を含む。焼成は良好で， 226以外には煤が付着する。

板付Ⅰ式土器・甕（Fig.27 233～ 237）

いずれも如意形をなす口縁部で， 233・ 234・ 237の端部には刻目が施される。調整は 233 ・ 235の両面， 236の外面が刷毛目で，他はナデである。 233・ 236・ 237は胎土に砂粒を含み， 234・ 235は石英粒砂を含む。焼成は良好， 233・ 234・ 236・ 237には煤が付着する。

底部

夜臼式土器（Fig.27 227・ 228・ 230・ 231, Fig.28 238～ 250， 254・ 255）

いずれも甕の底部で，胴部との境から張り出す。 230・ 231は上げ底，他はナデによる凹みはあるがほぼ平底である。ナデまたはヘラ調整がなされる。 250の底面には木葉痕が残る。胎土に砂を含むものが多く，石英粒砂を含むのは 245・ 247である。

板付Ⅰ式土器（Fig.28 251・ 256～ 262）

251 ・ 256・ 257・ 259・ 261・ 262は甕の底部である。 261・ 262には刷毛目調整がなされる。胎土に砂を含むのは 257・ 259～ 261で，他は石英粒砂を含む。 258・ 260は壺の底部で， 258には石英粒砂を， 260には砂粒をそれぞれ含む。

232 ・ 252・ 253は台または脚で， 232の内面は条痕， 252は内面がヘラ磨研，外面がナデ

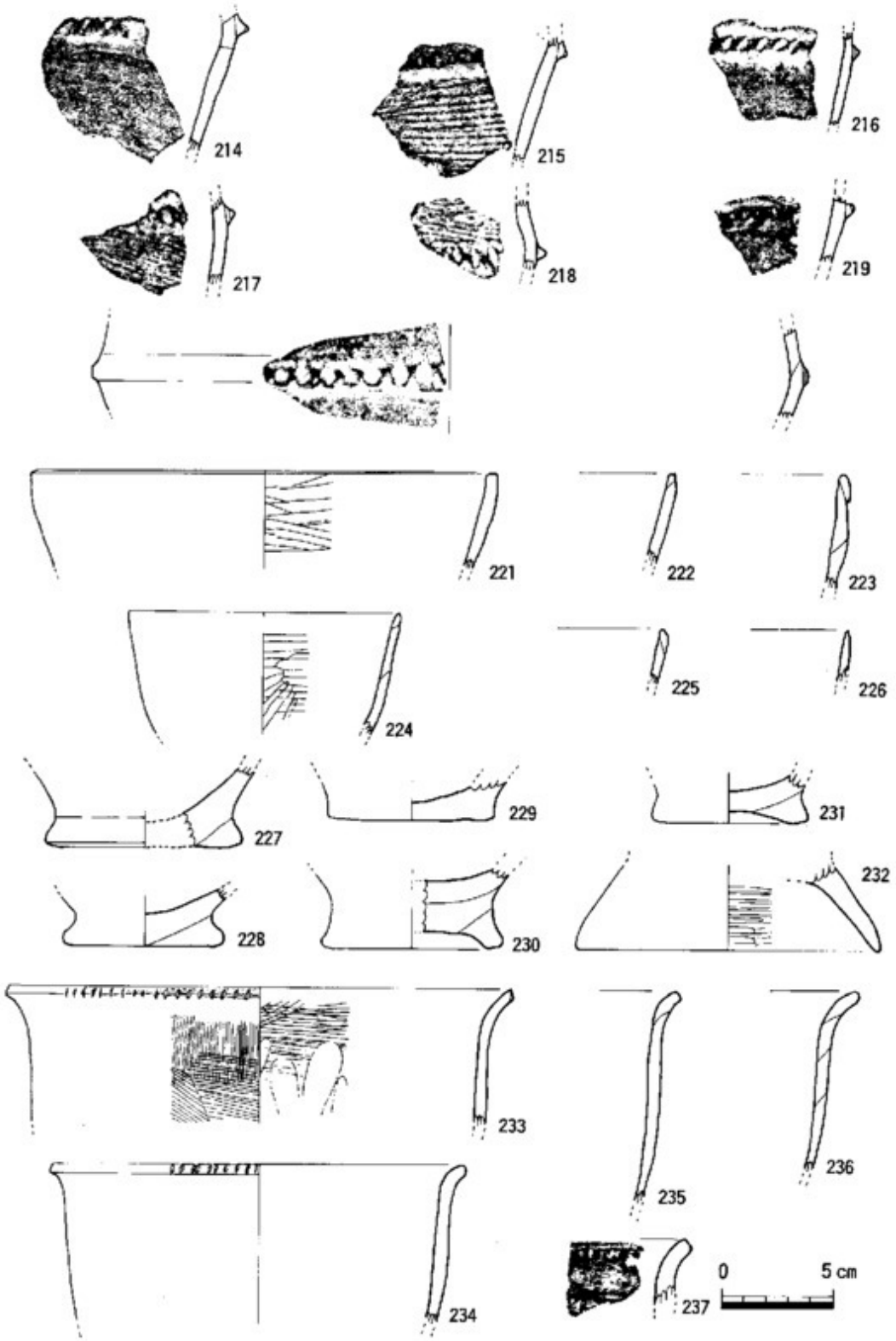


Fig. 27 第7層出土土器実測図(5)

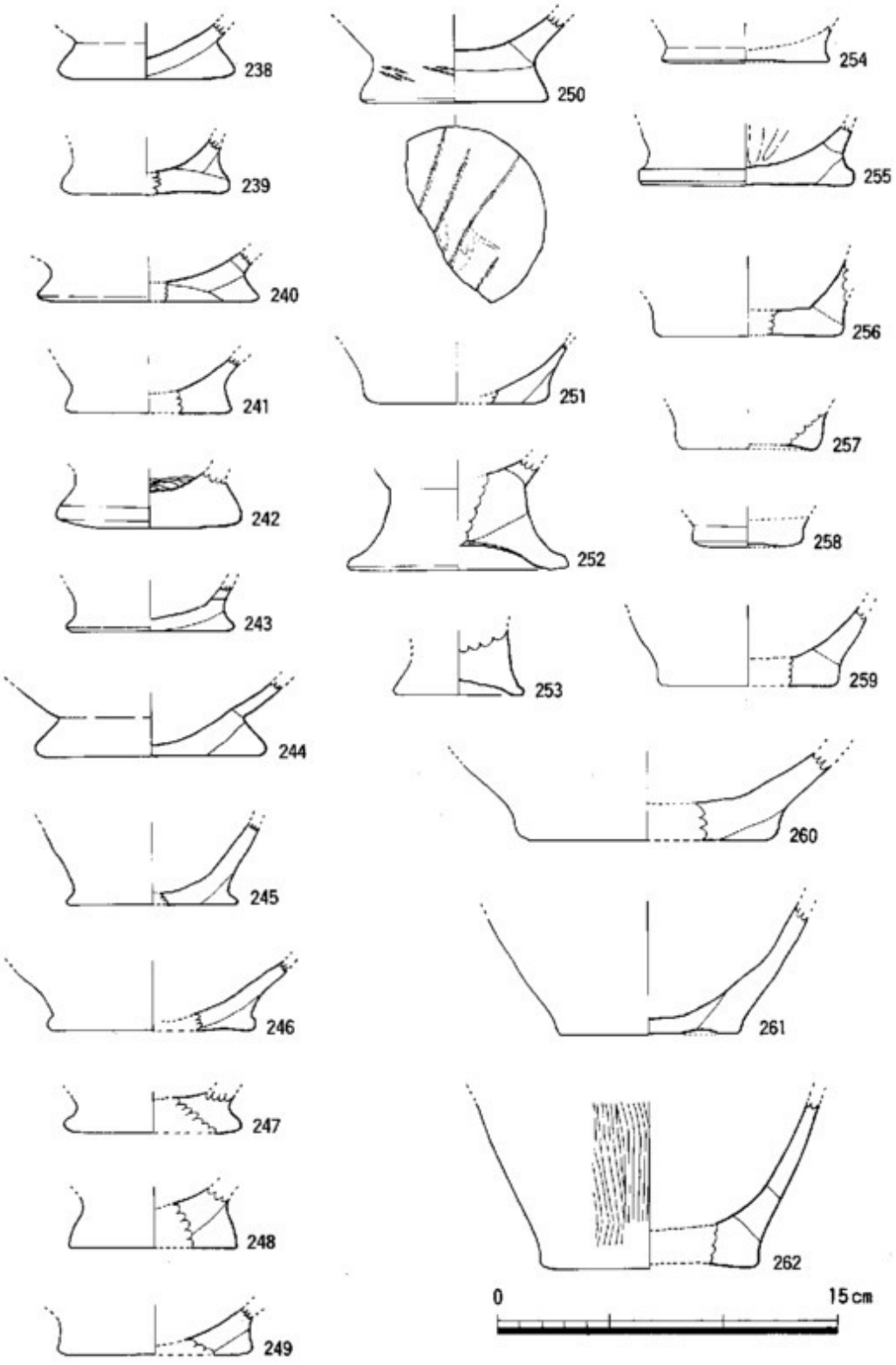


Fig. 28　第7層出土土器実測図(6)

調整で，253は内外面ともにナデ調整である。胎土は232が石英粒砂，252・253が砂粒を含む。

ミニチュア土器（Fig.24 165）

壺形で，胴部最大径は3.9cm，現存器高は3.4cmを計る。ナデ調整がなされ，胎土には砂粒を含み，焼成は良好。暗灰褐色を呈す。夜臼式土器であろう。

土製品（Fig.24 D1）

ボルト形の用途不明土製品である。円盤面に4個の穿孔を配し，中心の孔は貫通していない。円盤部分は不整円形で，調整も若干のナデがなされる程度である。頂部から逆時計回りに，もしくは下から時計回りに螺線状の櫛書き回線が施されている。円盤底面中央付近は器面の磨滅が著しい。胎土に石英粒砂を含み，焼成は良好である。暗灰褐色を呈す。（浜石）

石器（Fig.29，S9～S23）

石斧類（S22・S23）

S22は，硅質シルト岩製の柱状扁平片刃石斧で，剥離敲打整形後体部・刃部とも入念な研磨が加えられている。刃部の角度は50°である。横断面は長方形で重さは29.8g＋αである。S23は，安山岩（or玄武岩）製の蛤刃石斧の頭部で，敲打整形後研磨を加えている。

収穫具類（S19～S21）

いずれも安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製石包丁の破片で，S20は背部片，S21は刃部片である。

利器類（S9～S18）

S9は硅岩，S10～S12は黒曜石製の石鏃である。S9は表裏に入念な剥離加工を加えて整形しているが，S10は不定形のすづまりの剥片の主要剥離面に剥離加工を加えて尖端を尖らせ，剥片打面に剥離加工を加えることによって基部を作り出している。S11は表裏とも二次加工が加えられているが，尖端部に，S12は左縁辺に自然面が残っている。重さはS9が3.3g，S10が4.2g，S11が2g，S12が5.1gである。S16～S18は古銅輝石安山岩製の削器で，S16は横長剥片を，他は縦長剥片の縁辺に二次加工を加えて，鋭い刃部を作り出している。S13・S14は黒曜石製の使用痕がついている剥片石器で，左右両縁辺に使用痕がみられる。

以上の他に，黒曜石製の石核・剥片・削片・砂岩製の砥石等が出土している。

木製品（Fig.29 W4・W5）

W4は，カシの板目材をもちいた鍬の柄孔部と思われるが，柄孔部のみのため，形状は分らない。全体的に磨耗しており，削りは明瞭ではない。残存部の柄孔の高さは3.7cm，柄孔は隅丸方形で，上端は4.4×3.5cm，下端は5.6×4cmである。W5は，クヌギの板目材を用いた板材風のもので，表裏とも板目に沿って削りを入れている。表面は凸レンズ状に整形し，裏面は少し内弯している。鋤の身部と思われる。（山口）

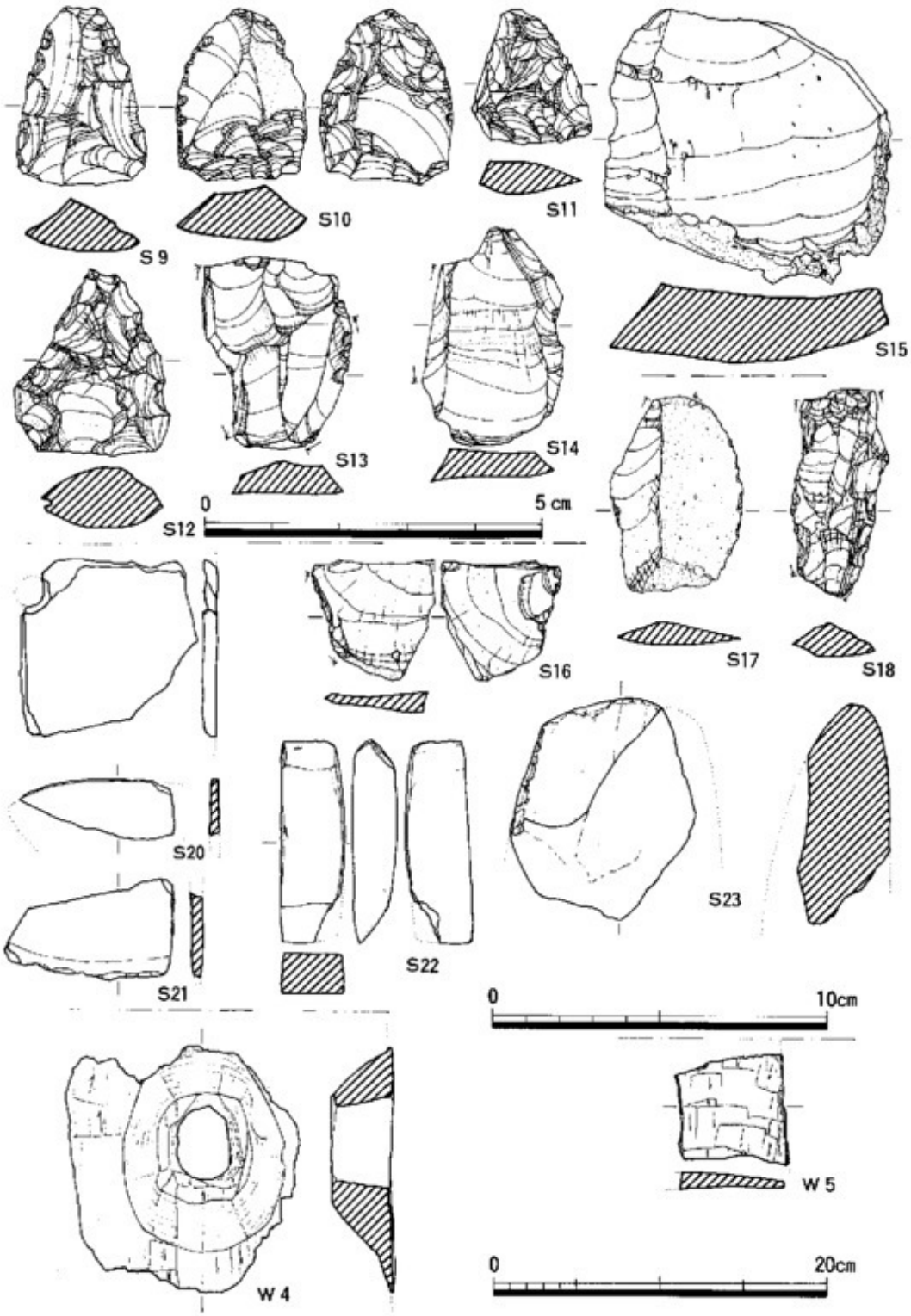


Fig. 29 第7層出土石器及び木器実測図

Tab.1　E-5･6地区第7層　出土石器・石製品一覧表

No.	器種	石材	備考	Fig	PL.
S 9	鏃	硬砂岩	重さ3.3g	29	
S10	〃	黒曜石	重さ4.2g	〃	版
S11	〃	〃	重さ2.0g,未製品?	〃	
S12	〃	〃	重さ5.1g	〃	版
S13	Uフレイク	〃		〃	
S14	Uフレイク	〃		〃	
S15	フレイク	緑泥片岩	重さ23.2g	〃	
S16	削器	古銅輝石安山岩		〃	

No.	器種	石材	備考	Fig	PL
S17	掻器	古銅輝石安山岩	重さ16.8g	29	
S18	削器	古銅輝石安山岩	重さ22.9g	〃	
S19	石包丁	安山岩質凝灰岩ホルンフェルス		〃	
S20	〃	〃		〃	
S21	〃	〃		〃	
S22	柱状片刃石斧	珪質シルト岩	重さ25.3g・α	〃	
S23	蛤刃石斧	安山岩(or玄武岩)		〃	

4　第5層出土遺物

土器（Fig.30～39）

夜臼式土器（263 ～ 290）　263～ 267は胴部上半部で屈曲し，稜をもち口縁部がゆるやかに内傾する鉢である。263・264は口縁端部が肥厚し，丸く収まる。265は胴部で強く逆くの字状となり，口縁部は内傾しながら外反し，端部は鋭い。 266は胴部屈曲部から直線的に口縁部となり，口縁直下で垂直となり，端部は尖る。いずれも胎土に砂粒を含み，焼成は良好，調整は磨滅のため不明。 270～ 282は口縁部，胴部に貼付凸帯をもつ甕である。 270は口縁直下に刻目凸帯をもち，口縁端部は少し角ばる。器表面はナデ調整を行う。 271は胴部から内弯しながら口縁部へと開く。端部は丸くなり，口縁直下に棒状工具で押圧する太い凸帯がめぐる。 272～ 274は口縁部に凸帯をめぐらし口縁部が内傾する。272・273はナデにより器面調整を行い，刻目は 272はヘラ状工具で273は棒状工具により深く施す。274は外面が右下がりの条痕，他はナデ調整を行う。 275は胴部上半の粘土接合部に貼付凸帯をめぐらしゆるやかに屈曲し，直立する口縁部となり，口唇端部に刻目を施す。凸帯部外は内面条痕，内面はナデ調整を行う。276～281 は胴部から直線的に外に開くものである。器面調整は 276・ 280がナデ，他は条痕が残る。 281は凸帯をもたず，角ばる口唇部外側にヘラ状工具による刻目をもつ。胎土に石英粒を含み，焼成良好。 282は胴部破片で，胴部で強く屈曲し，刻目をもつ。灰褐色を呈し，外面に煤が付着し，胎土に砂粒を含み，焼成は良好で調整は磨滅のために不明である。 283・ 284は坏部と脚部の境に刻目凸帯をめぐらす高坏である。器面は荒れ調整不明。焼成は良く，胎土に石英粒砂を含む。 283は内面にしぼり痕をとどめる。 285～ 290は甕・壺の底部である。 285は底部に籾の圧痕が残る。長さ 5.2mm，最大幅 2.7mmを測る。

前期の土器（Fig.32・33）

壺（291 ～ 296）　291は頸部で段をもち，外に開き，端部が角ばる口縁部破片である。内面はヘラ横ナデ，外面もナデ調整を行う。胎土に雲母片・石英粒砂を混ぜる。 292は肩部に三条の浅い平行沈線を施し，内面はナデ調整。 293は肩部に二枚貝の腹縁押圧によって施された二条の沈線をもち，それより口縁部にかけて沈線と同様に貝の腹縁により押圧した無軸羽状文が，乱雑に施されている。 294～ 296も平行沈線下の肩部に羽状文を施す。内面はヘラ磨研・

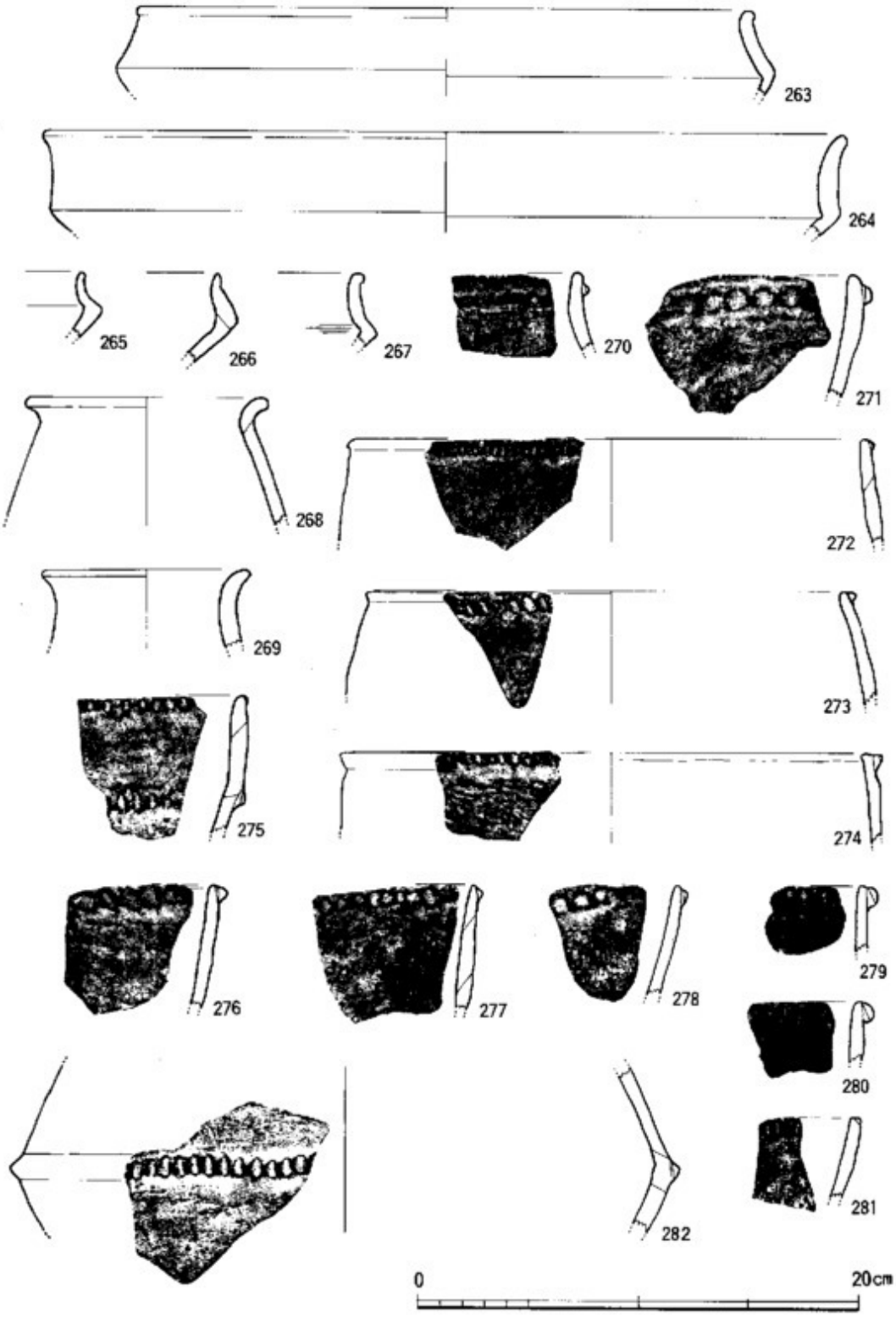


Fig. 30　第5層出土土器実測図(1)

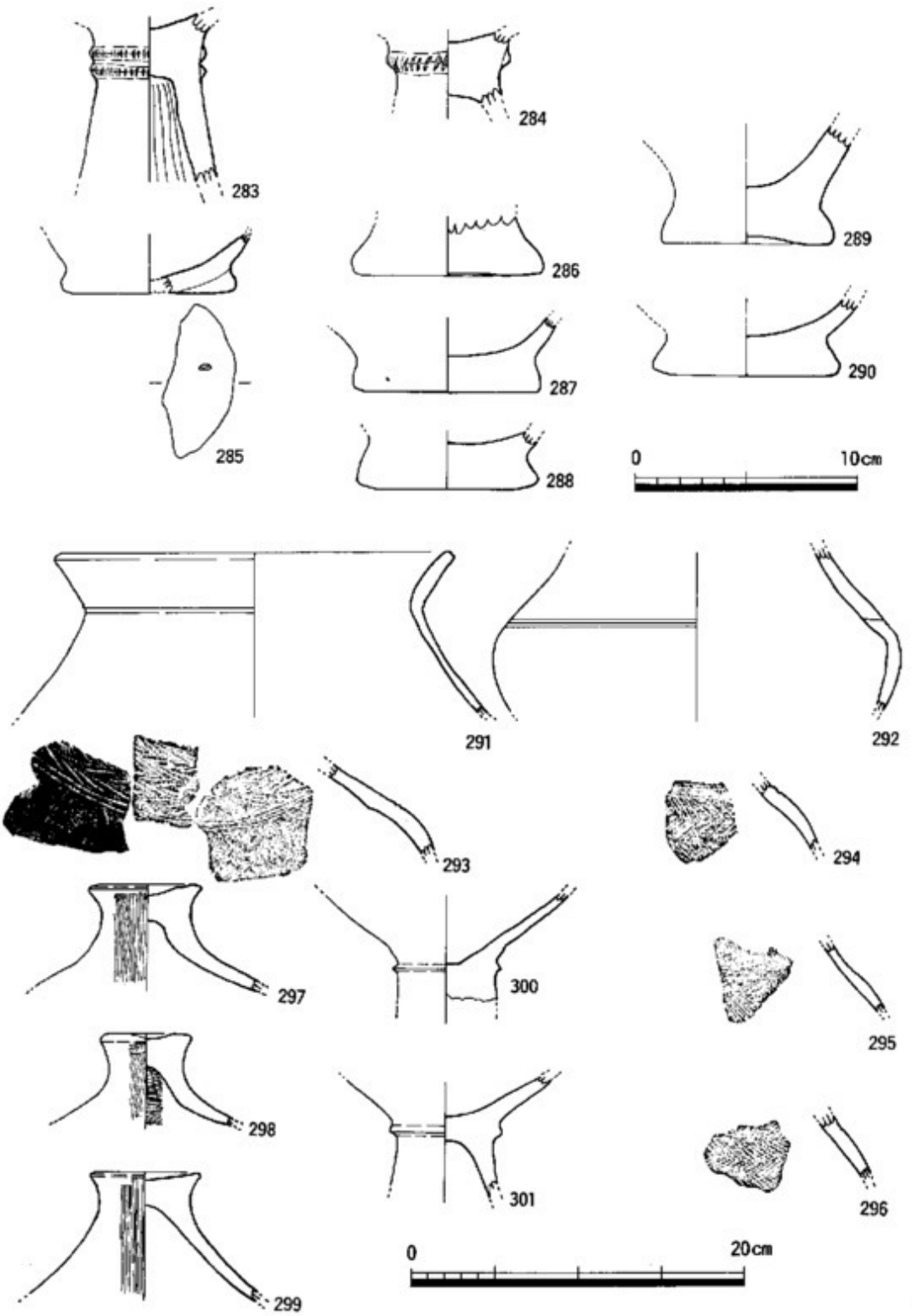


Fig. 31　第5層出土土器実測図(2)

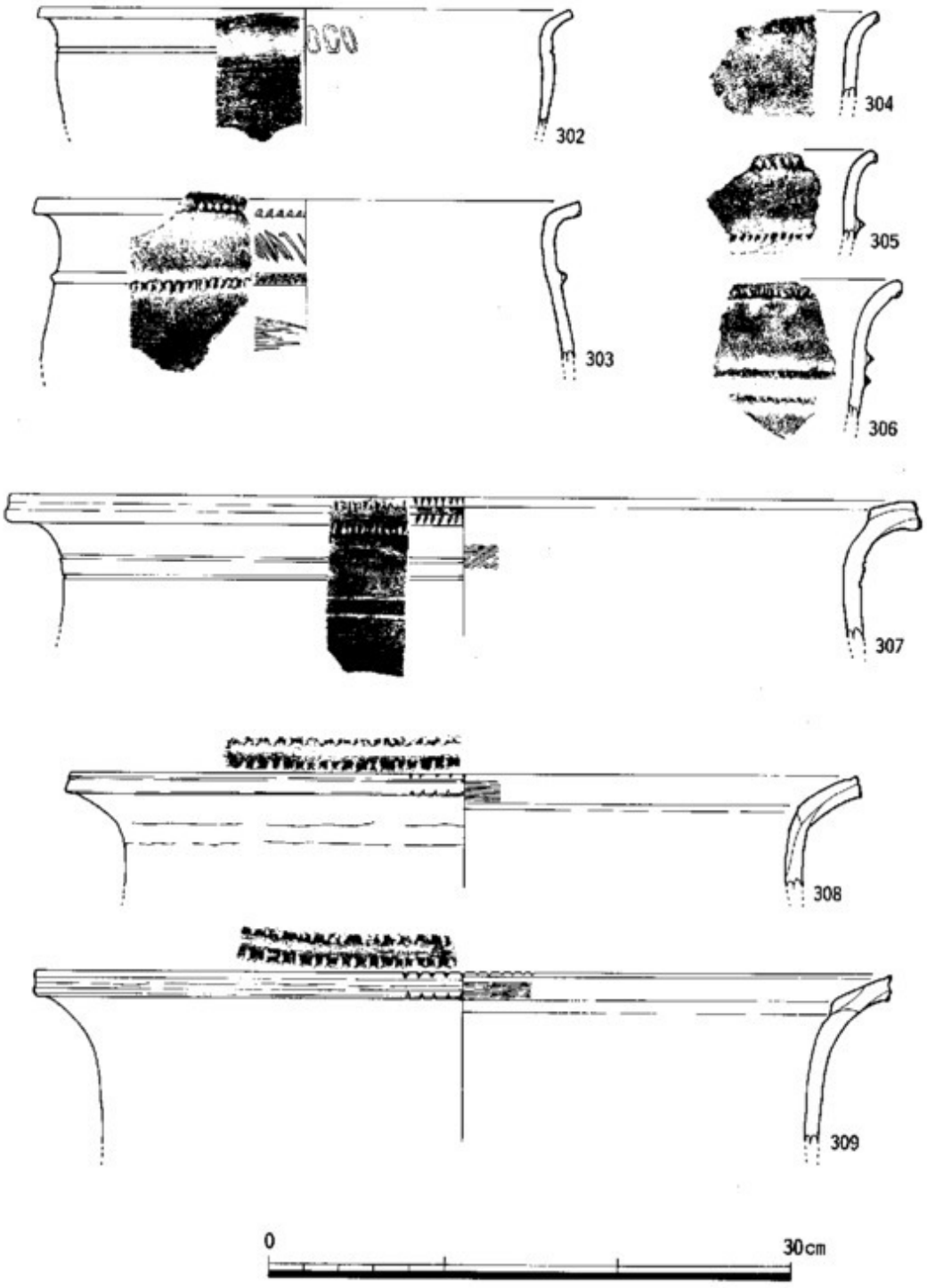


Fig. 32　第5層出土土器実測図(3)

指押圧を施す。

297 ～ 299は蓋である。天井部は中央部が凸み，外面に刷毛調整を施す。 298の内面にもヘラ磨研を行う。 300・ 301は高坏で，脚部と杯部との境に凸帯をもつ。器面が全体に荒れており，調整は不明。 300の内面は指押圧調整， 301はナデ，胴部内面はヘラ状工具で調整している。

甕（302 ～ 309） 302～ 306は甕の口縁部破片，直立する胴部から屈曲し，外反する如意状口縁をなす。色調暗褐色～淡褐色を呈し，胎土に石英粒砂を混じている。焼成は良好である。 302 は胴部に沈線をもち，内面に指の押圧痕が残る。 303・ 305・ 306は胴部に刻目凸帯をもち，口唇部下端にも刻目を有する。 303は外面に斜，横方向にヘラ状工具により調整を施し，胎土に 5 mm× 3 mmの黒曜石チップを混入。 305は外面が縦，内面にも一部横方向の刷毛調整が施される。 306は口縁部に二条の三角凸帯をもち，その周辺は横ナデ，外面は刷毛，内面は一部横ナデを行い，他を指押圧調整を施す。 307～ 309は前期末の大形甕であり，肥厚する口縁部の内側に段をもち，口唇部中央に横線を入れ，端部に刻目をもつ。口縁部内面に横方向の刷毛調整を行う。以上は前期後半の土器である。

中期の土器（Fig.33・34・35）

壺（310 ～ 317・ 319） 301～ 313は鍵状口縁の壺である。色調は暗褐色～黄褐色を呈し，胎土に石英砂粒・雲母小片を含む。焼成は良好である。 310は肩部に削り出し凸帯をもち，外面に荒い刷毛調整後，ナデを行う。口縁部周辺は横ナデ，内面もナデ調整を行う。口縁部の発達は小さい。 311は口縁外端が下り，丸く収まり内側への突出しはみられない。外面に棒状工具で暗文を施しており，口縁部周辺は横ナデ。 313は口縁部外端に凹線をもち，口縁部外面にヘラ状の工具で浅い沈線がつけられている。これらは中葉～後半のものであろう。 314は袋状口縁の壺で外面から口縁部内面にかけて丹塗りを施す。頸部の貼付凸帯から下はヘラ磨研，その上から口縁部周辺は横ナデ調整を行う。頸部内面にはしぼり痕が認められる。315～317は平坦口縁をもつ無頸壺で，焼成前の穿孔が口縁部及び頸部にある。胎土には石英粒砂を含み，赤褐色～暗褐色を呈し，外面から口縁部内側にかけて丹塗りを施す。 318は無頸壺の蓋の完形品である。外面は端部，頂部はナデ，他はヘラ磨研，内面は一部刷毛目が残り，中心部から放射状のナデを施す。穿孔は二個一対になり四個が外面から穿たれる。 319は口縁部の平坦面に円形の貼付文をもち，胴部M字凸帯をもつ。胎土に石英粒を含み，焼成は良好，器面は荒れ調整不明。中期中～後半の土器である。

甕（320 ～ 329） 320～ 323は口縁部に三角凸帯をもつ一群で中期初頭の土器である。 320は口縁部内側への張り出しが認められ，胴部に三角貼付凸帯をもつ。凸帯と口縁部の間は刷毛調整の後，ナデ，口縁部は横ナデ，内面は指で押圧調整を行う。 322は口唇端部が鋭く，ヘラ状工具で細い刻目をもつ。 323は口縁部が平坦となる。胴部は刷毛目，他は横ナデ，ナデ調整

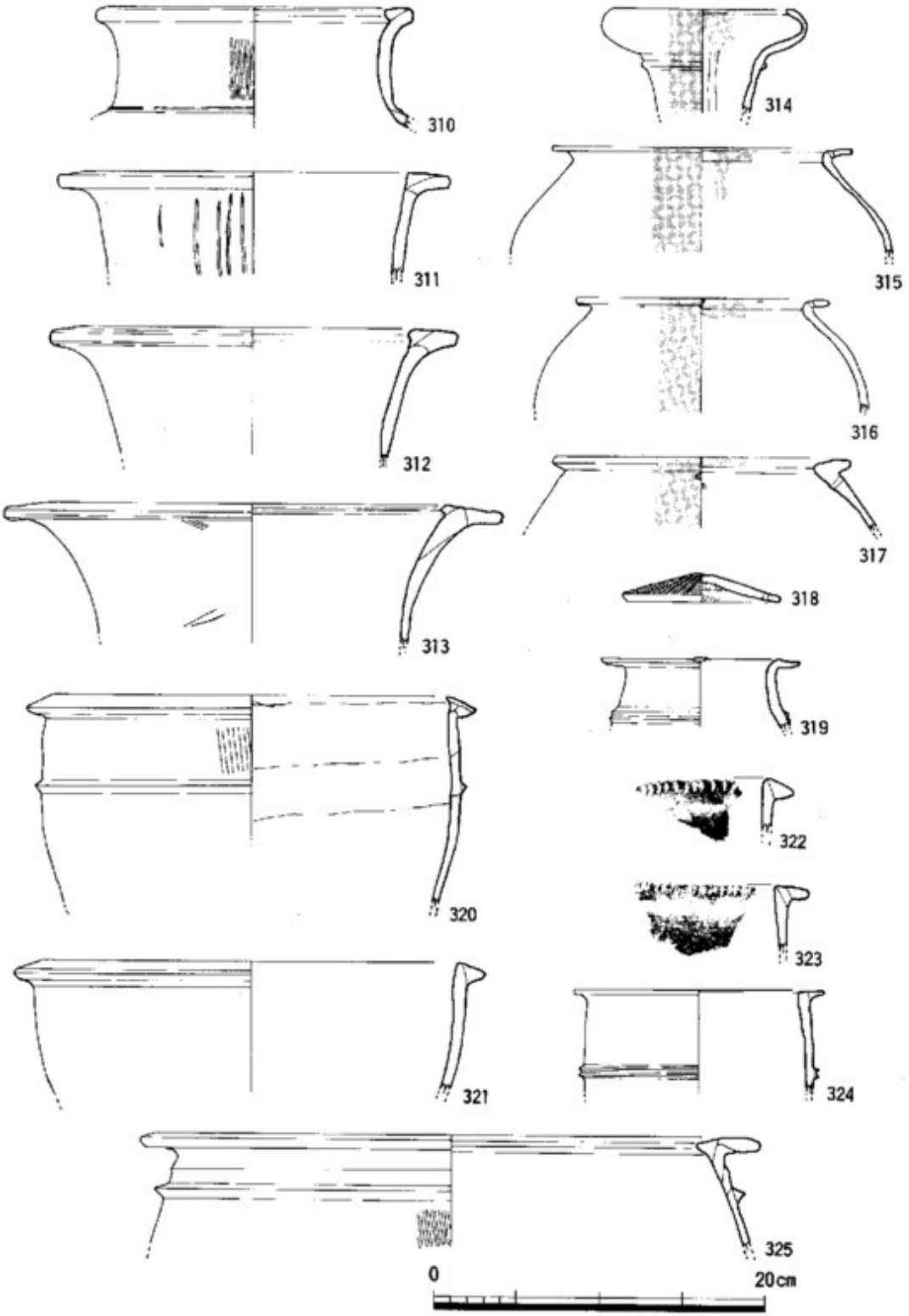


Fig. 33　第5層出土土器実測図(4)

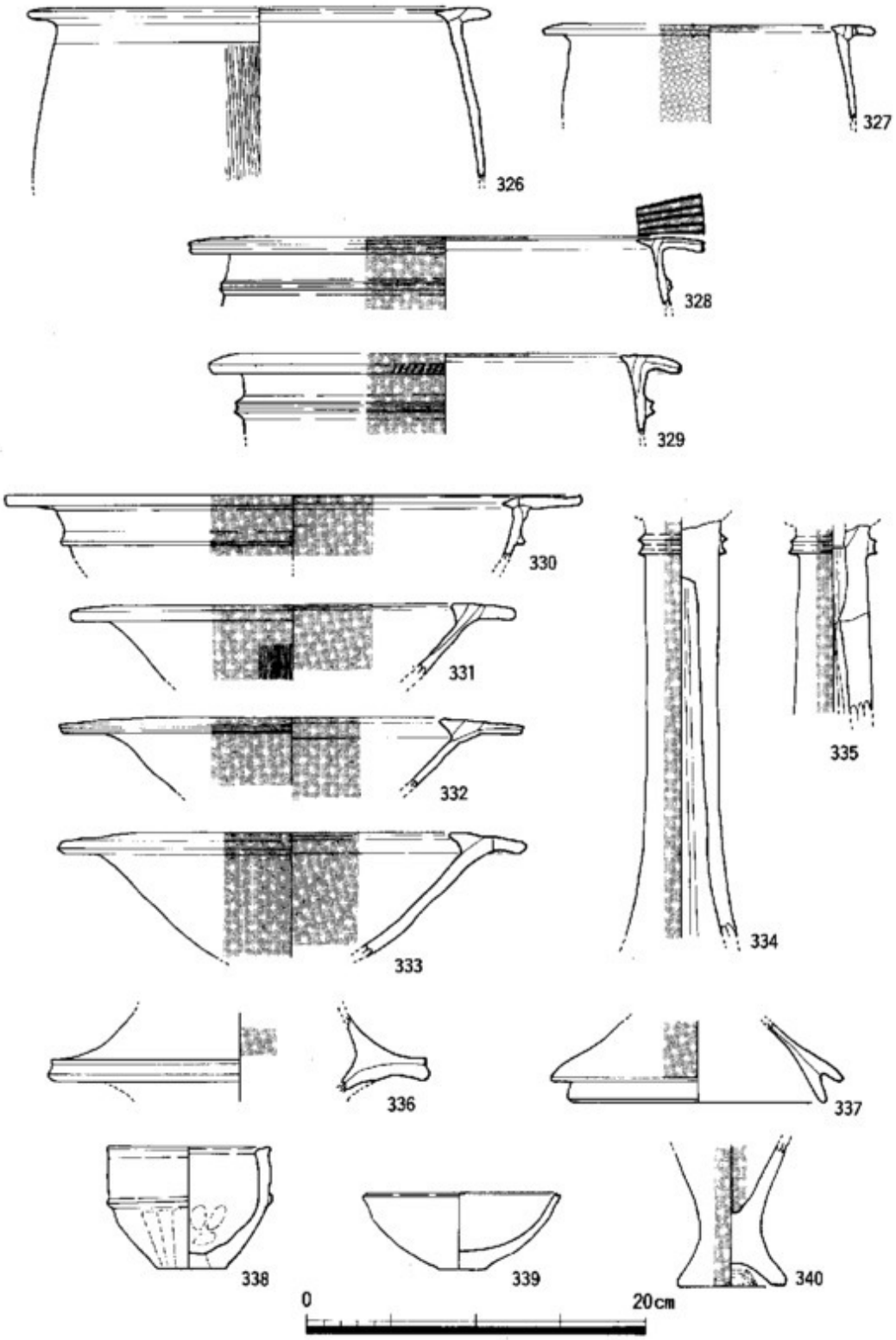


Fig. 34 第5層出土土器実測図(5)

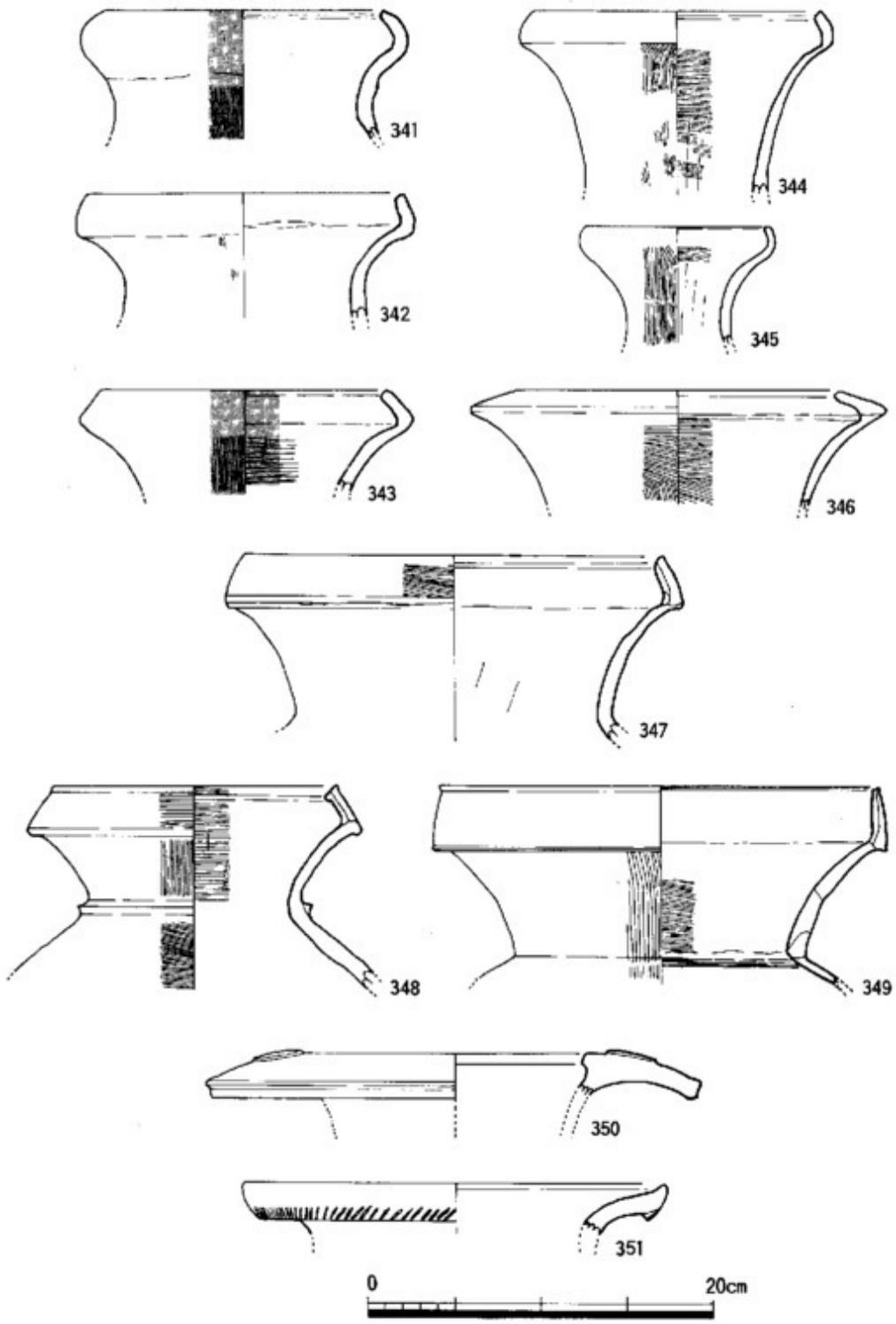


Fig. 35 第5層出土土器実測図(6)

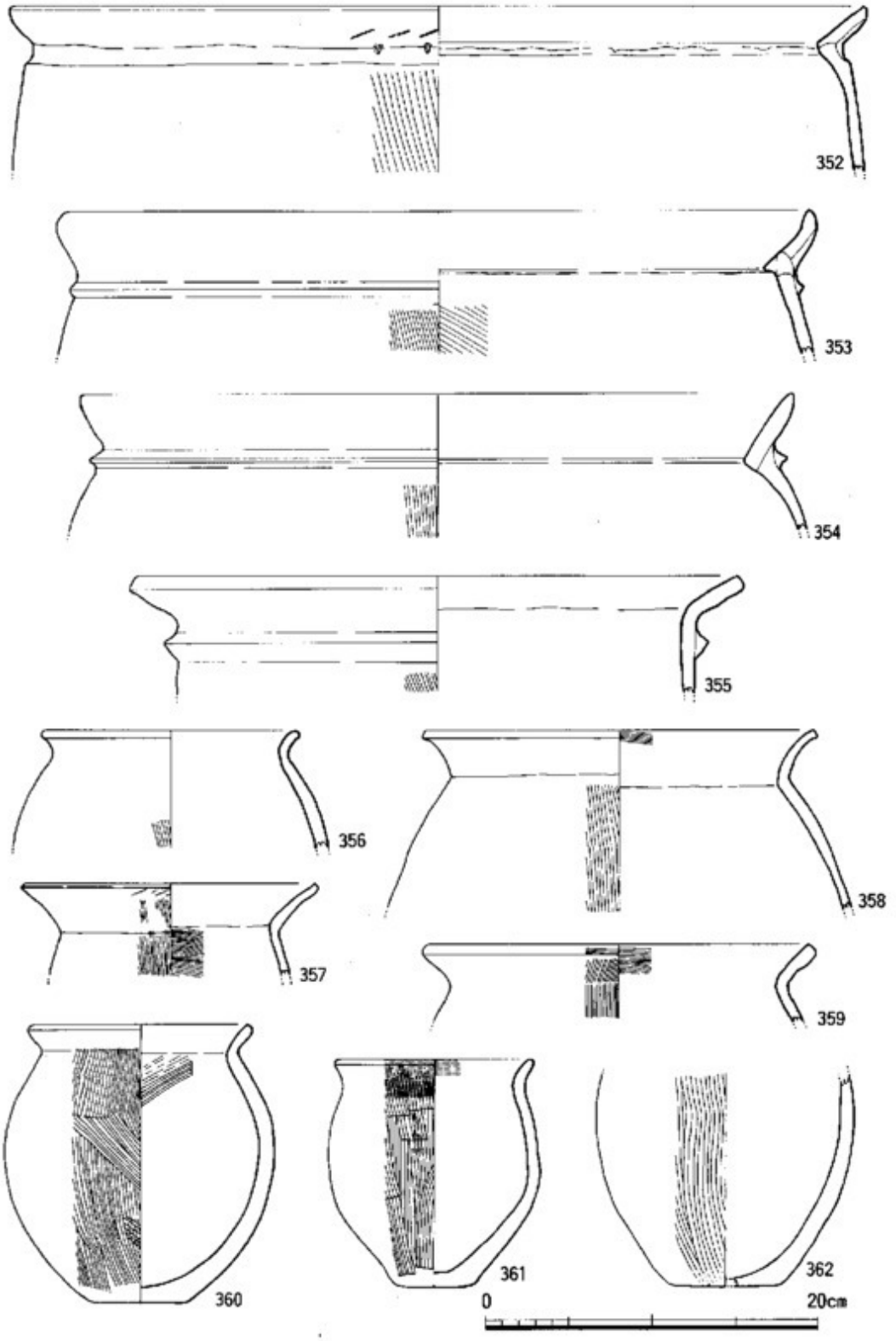


Fig. 36 第5層出土土器実測図7)

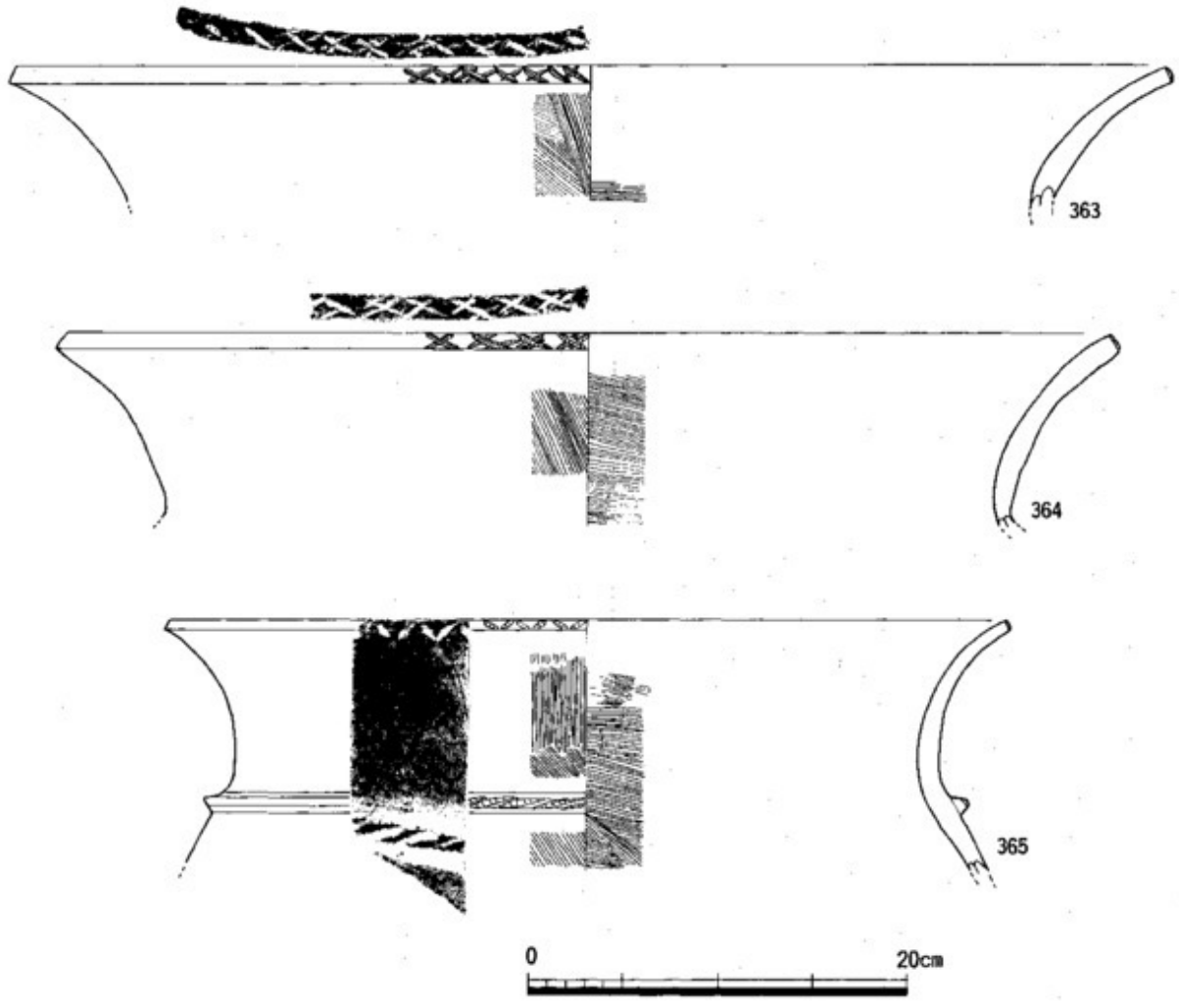


Fig. 37 第5層出土土器実測図(8)

を行う。 324～ 329は逆L字状口縁を有するもので中頃の土器であろう。 325は口縁部の発達が著しく，内側が下る。胴部に三角凸帯をもち刷毛調整を施す。 327～ 329は丹塗りである。328は口縁部外端の中央部が凹み，上・下端に刻目を入れ，平坦面には平行の暗文を施す。口縁直下にM字凸帯をもつ。

高杯（330 ～ 335）杯部は口縁部が幅広く平坦で，内面への発達が著しい。胎土は精選され良好で，石英粒砂を混ぜ，色調赤褐色を呈し，焼成は良い。内外面とも丹塗りで， 331が刷毛調整，他はヘラ磨研を施し，丁寧な仕上げをしている。脚部（374 ～ 375）は上端に凸帯をもち，外面に丹塗磨研を施す。内面はしぼり痕が明瞭に残る。中頃の土器である。

その他（336 ～ 340） 336は筒形器台の胴部破片である。胎土は石英砂粒を含み，焼成良好，色調淡黄赤色を呈する。内面の一部に丹塗りが残存するが，他は全体が磨滅しており不明。337は蓋であると考えられる。須恵器の蓋のような受部がかえりをもつ異形品である。外面には丹塗りを施す。338は鉢で，底部は平底，胴部に三角凸帯をもつ。口縁部は肥厚し平坦となる。外面胴部下半はヘラ削りの後ナデ調整を行う。 329も平底で底部から口縁部にかけ内弯しながら開く。口唇部中央が凹む。340は内外面丹塗りで，外面はヘラ磨研を施す。底部は上げ底で内面をヘラ削り後強くナデ調整を行う。口縁部が明らかでなく，鉢か甕か明らかでない。 336を除き他の土器は特殊な形態を示すものが多く，時期を明確にするのは困難であるが，おそらく中期後半～後期前半のものであろう。 （松村）

石器・石製品・土製品（Fig.40～46）

石斧類（Fig.40・41）

扁平片刃石斧（S24～S26） S24・S25は硅質シルト岩製でS24は敲打整形後，体部・刃部研磨を加えている。重さはS24が59.9g ＋ α，S25が15.4gである。刃部の角度はS24が約55°S25が約30°である。S26は硅質シルト岩に剝離敲打を加えて長方形に整形し，縁辺部に研磨を加えている。S24は頭部のみで刃部欠損しており形状はわからないが，扁平片刃石斧の未製品と考えられる。

抉入片刃石斧（S27） 淡緑色堆積岩製で，敲打整形後研磨を加えているが刃部・体部の大部分を欠損している。

柱状片刃石斧（S28～S30） S28・29は黒灰色粘板岩製で敲打整形後入念に研磨を加えている。横断面は長方形を呈しS28の刃部の角度は55°である。S30は硅質シルト岩製の未製品。

太形蛤刃石斧（S31～S43） S33～S41・S43は今山産出玄武岩製で敲打整形後入念に研磨を加えている。今山産出玄武岩製太形蛤刃石斧はいずれも横断面楕円形であるが，S31は円形の横断面をもっている。刃部片はS32・S41・S42の3点で，S32の刃部の角度は60° で他は70°である。

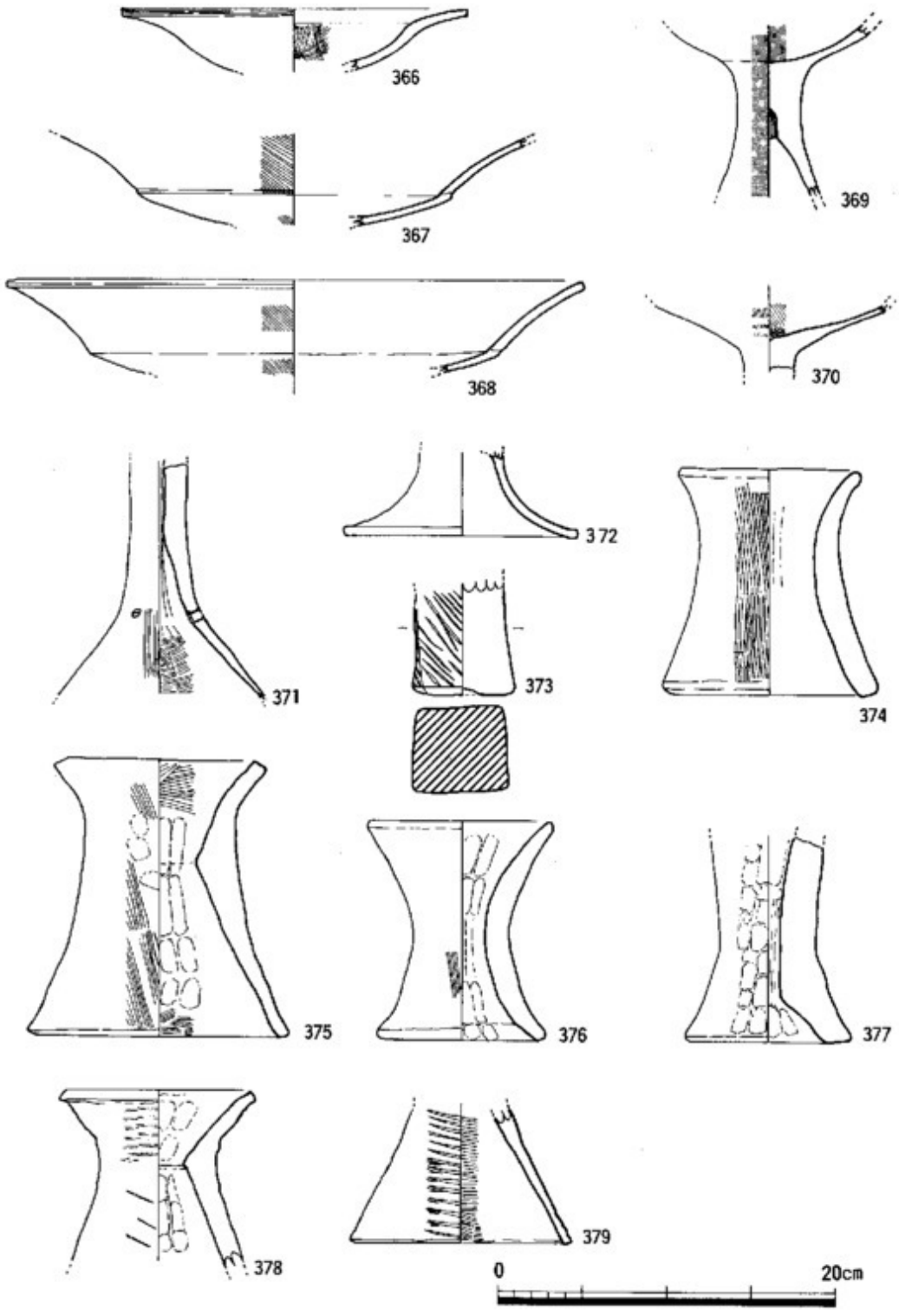


Fig. 38 第5層出土土器実測図(9)

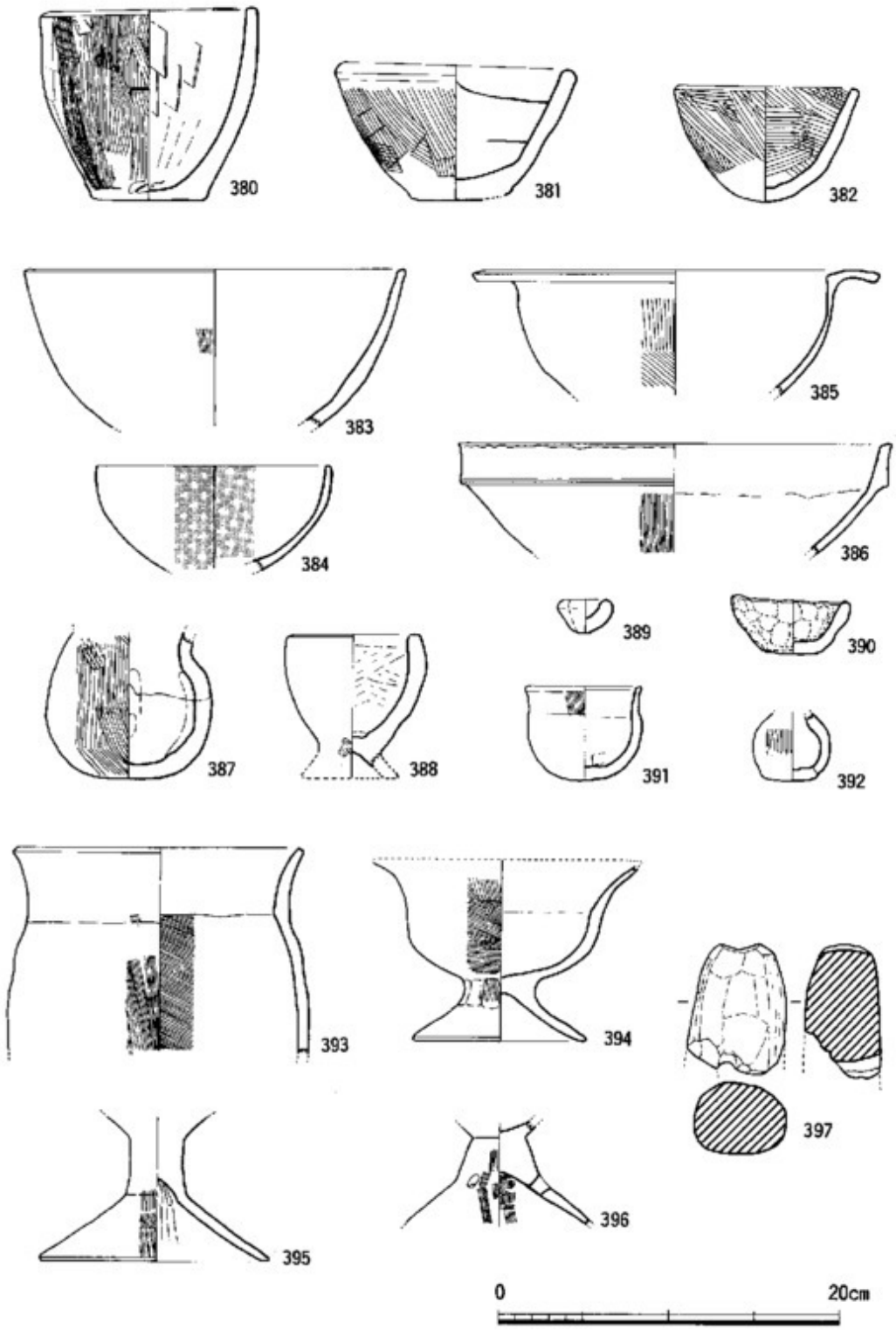


Fig. 39 第5層出土土器実測図10

収穫具・石包丁（Fig.42・43　S44～S84）

完形品はS44のみで他は欠損している。S44は敲打整形後入念に研磨し，両刃で穿孔は表裏から行われている杏仁形石包丁である。穿孔部中心間は 3.5cmである。S44等28点は安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製で，S58等の6点は立岩産出小豆色凝灰岩ホルンフェルス製，S63は砂岩製である。S44・S52・S57・S59～S62は杏仁形，S46～S50・S68～S71の9点は三角形から半月形，S54・S63・S64の3点は長方形に近い形の石包丁である。刃部は全て両刃である。S80・S81は敲打整形後，S80は穿孔を試みた段階，S81は穿孔が行われる段階の未製品である。S84は平面形台形状の整形後研磨を加えているが，刃部はつくり出されていない。

利器（Fig.44・Fig.45）

鏃（Fig.44 K1・S85～S94）　K1は良質でない青銅製の有茎式鏃である。鋒から中茎にかけて稜線が入り，横断面は菱形で重さは28g である。S85～S91・S93・S94は黒曜石製，S92は古銅輝石安山岩製の石鏃である。S85・S86は局部磨製石鏃である。

石戈（Fig.44　S95～S97）　S95は白緑色凝灰岩ホルンフェルス製で，敲打整形後入念に研磨が加えられ，穿孔部は表裏から行なわれているが少しずれている。鋒は欠損しているが推定器長は17cm，最大厚2.25cmで中央部に稜線が入っている。中茎は4× 3.5cmの長方形，断面は隅丸長方形で厚さ1.2cmである。S96は安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製で，鋒を欠損しているが推定器長17.5cm，鋒から中茎まで稜線が入り身部の横断面はレンズ状になっている。

石剣（Fig.44　S98～S105）　いずれも安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製石剣で，S98～S101は敲打整形後入念に研磨が加えられており，中央部に稜線が入っている。S104は方形の中茎がつけられているが，S98は中茎を意識し，身部と分けている。

削器（Fig.45　S108・S109）　S109は古銅輝石安山岩製の石匙で，S108は緑泥片岩製縦長剝片の左縁辺に二次加工を加え鋭い刃部をつくり出している。

土製投弾（Fig.45　D2～D15）　手捏によって礮弾形に整形した投弾である。いずれも黒褐色～灰褐色を呈し，胎土には石英・砂粒を含み焼成も良い。重さはD2の23.2g ～D11の5.2gとまちまちである。

工具（Fig.45　S106, Fig.46）

穿孔具（Fig.45　S106）　砂岩製で横断面円形に整形し，全体的に研磨されている。先端部は錐状になっており，回転痕が残っているが，大部分は欠損している。

紡錘車（Fig.46　S110～S112　D15～D19）　S110～S112は滑石片岩製の石製紡錘車で剝離整形後研磨を加えている。D15～D18は土製紡錘車で，D16・D17は手捏によって整形した後ヘラ調整を加えている。D18は手捏整形の指痕が残っている。D16・D17は裏から棒状工具で穿孔している。胎土には石英・砂粒を含み堅緻で焼成も良い。D19は甕片の再利用で表裏から穿

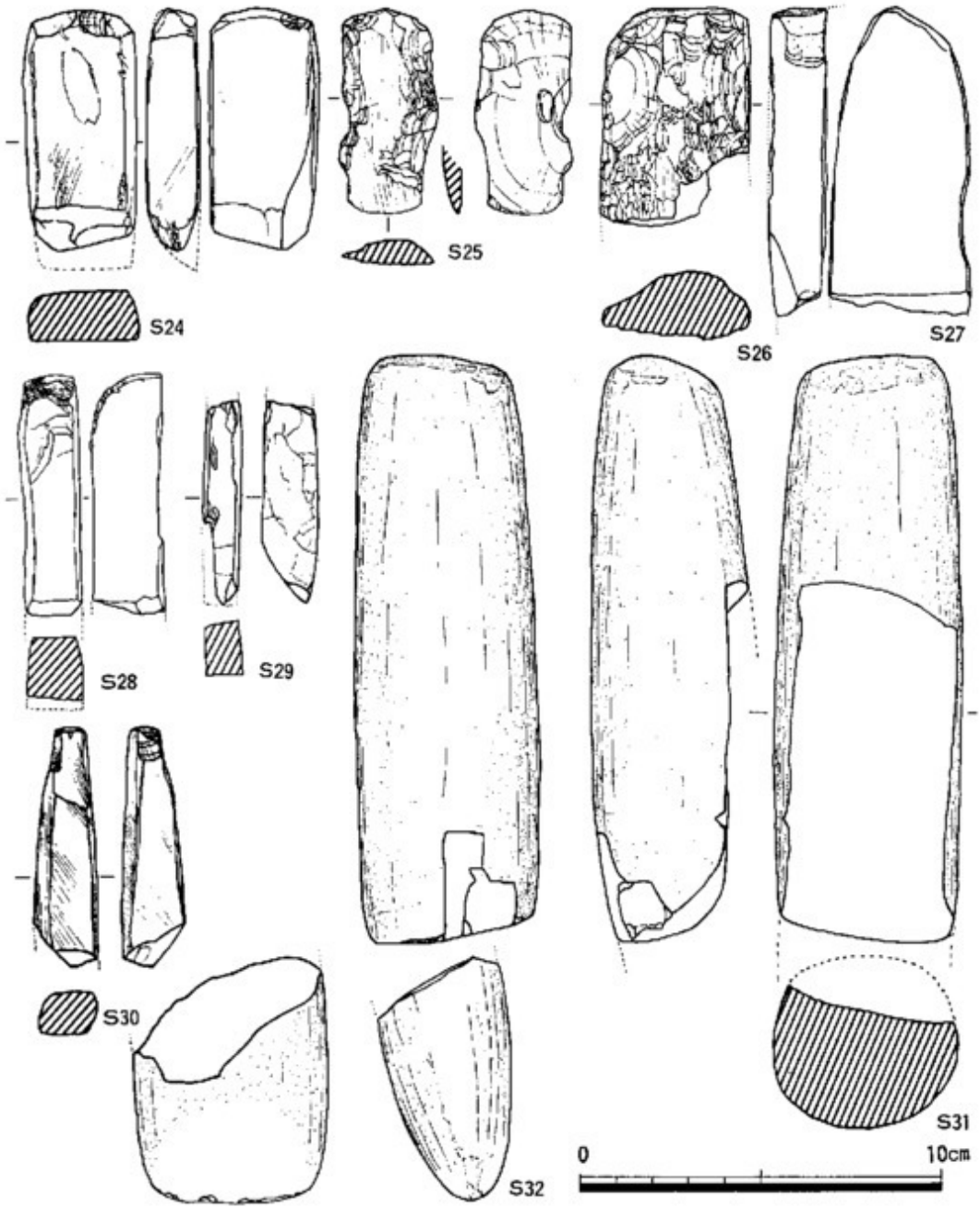


Fig. 40 第5層出土石斧類実測図

孔が試みられている紡錘車の未製品である。

土製円盤（Fig. 46 D20～D28） いずれも土器片再利用品で，縁辺部を打ち欠き円形に仕上げ，周辺部を研磨している。

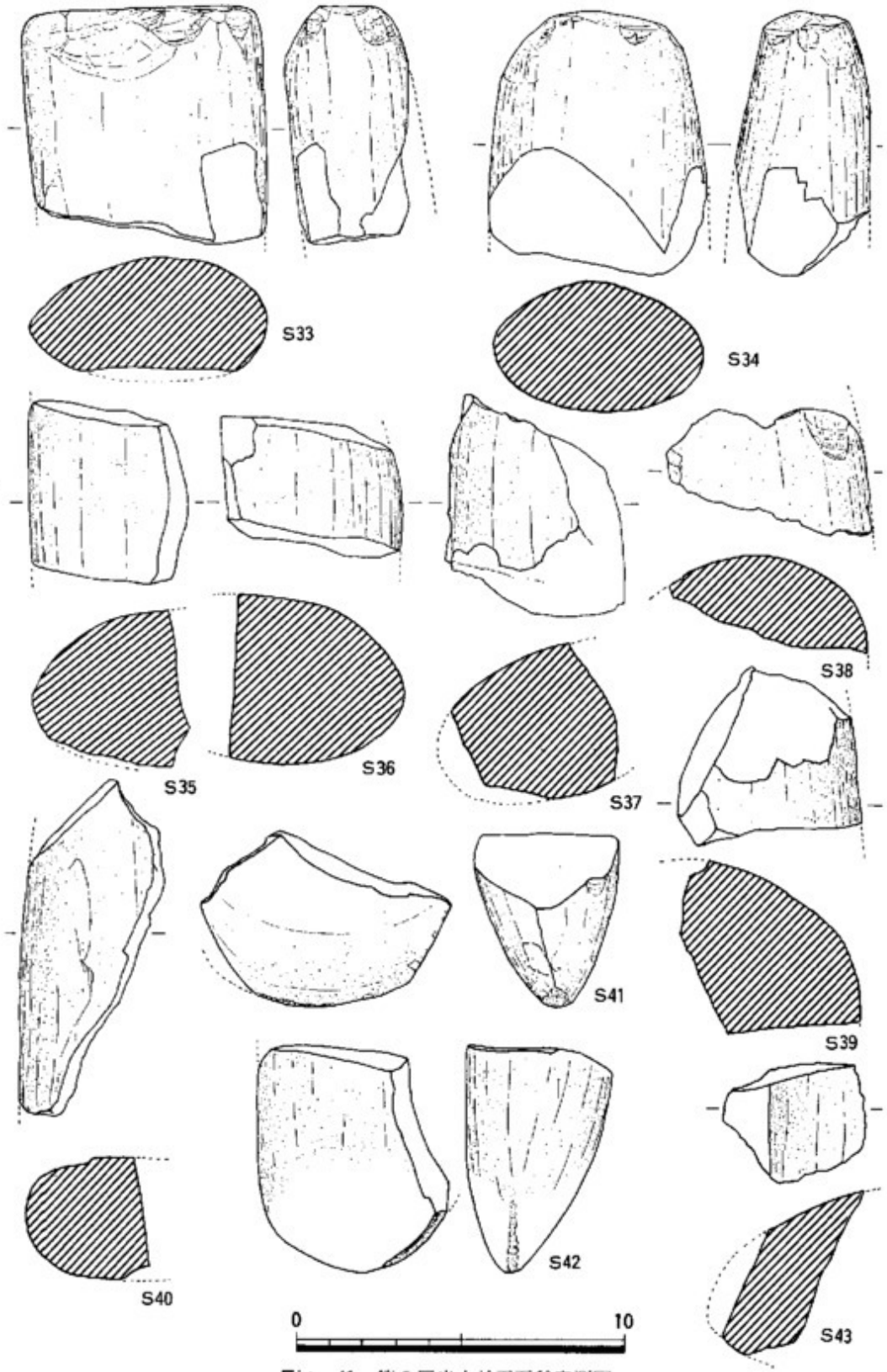


Fig. 41　第5層出土蛤刃石斧実測図

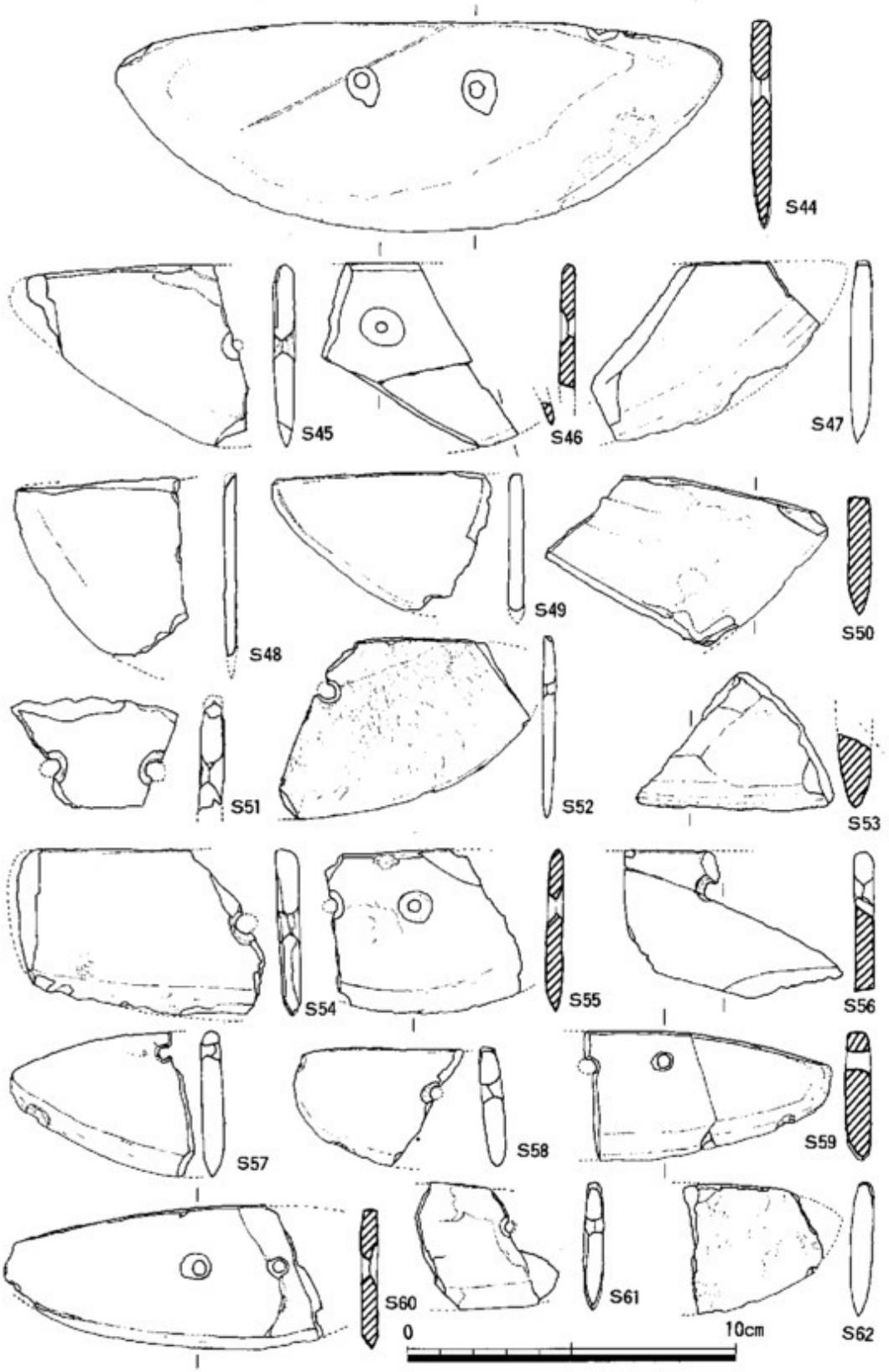


Fig. 42 第5層出土石包丁実測図(1)

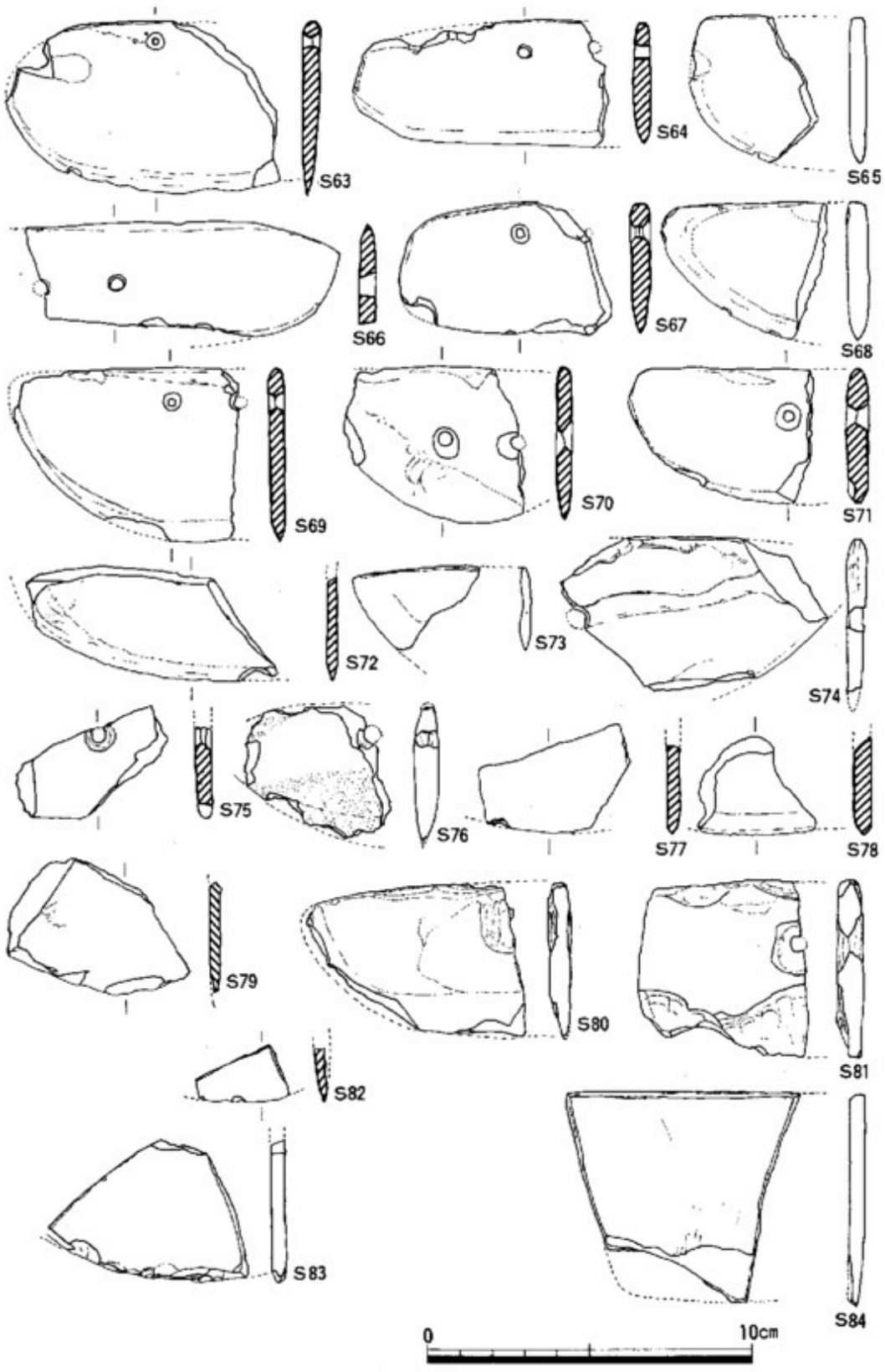


Fig. 43 第5層出土石包丁実測図(2)

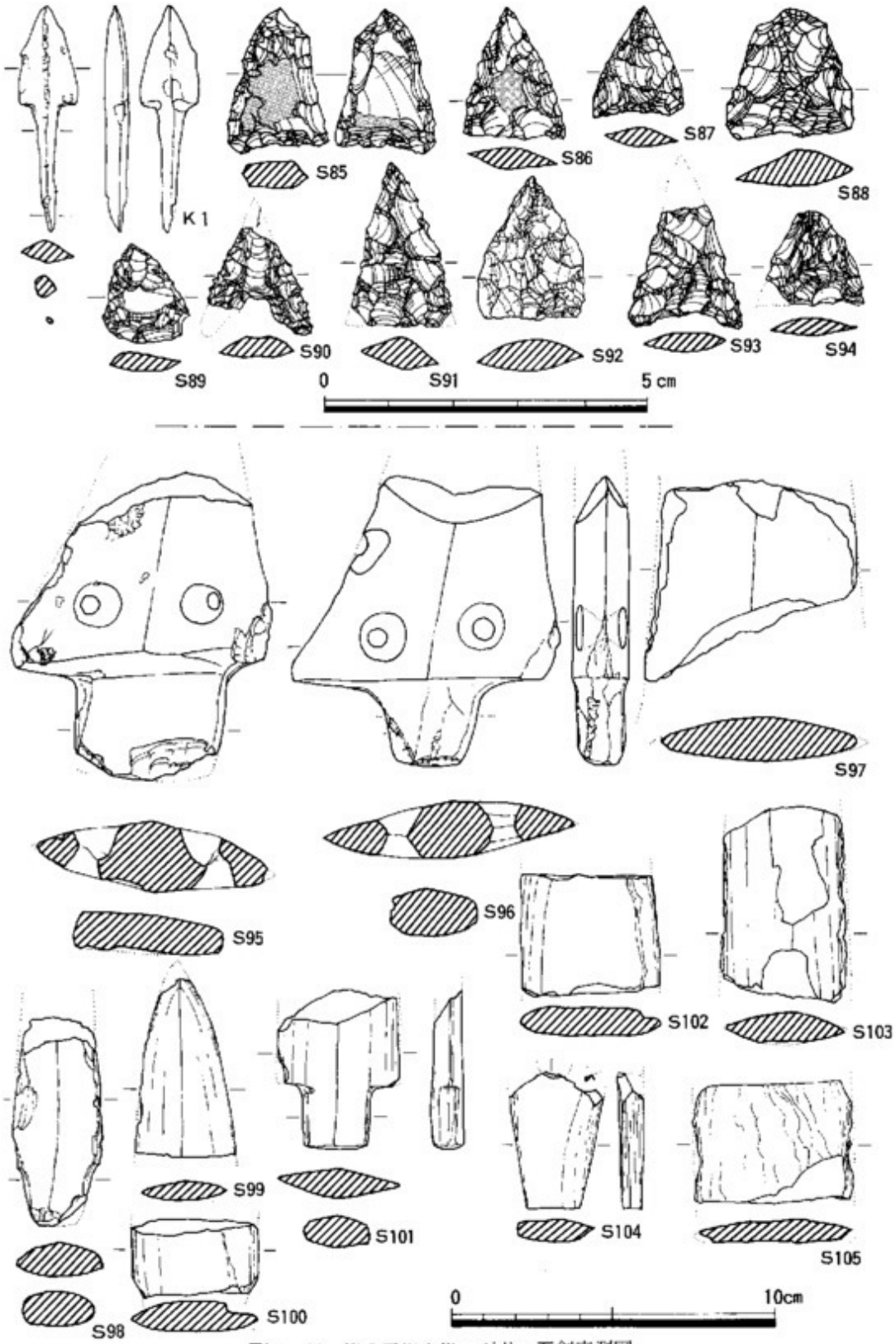


Fig. 44 第5層出土鏃・石戈・石剣実測図

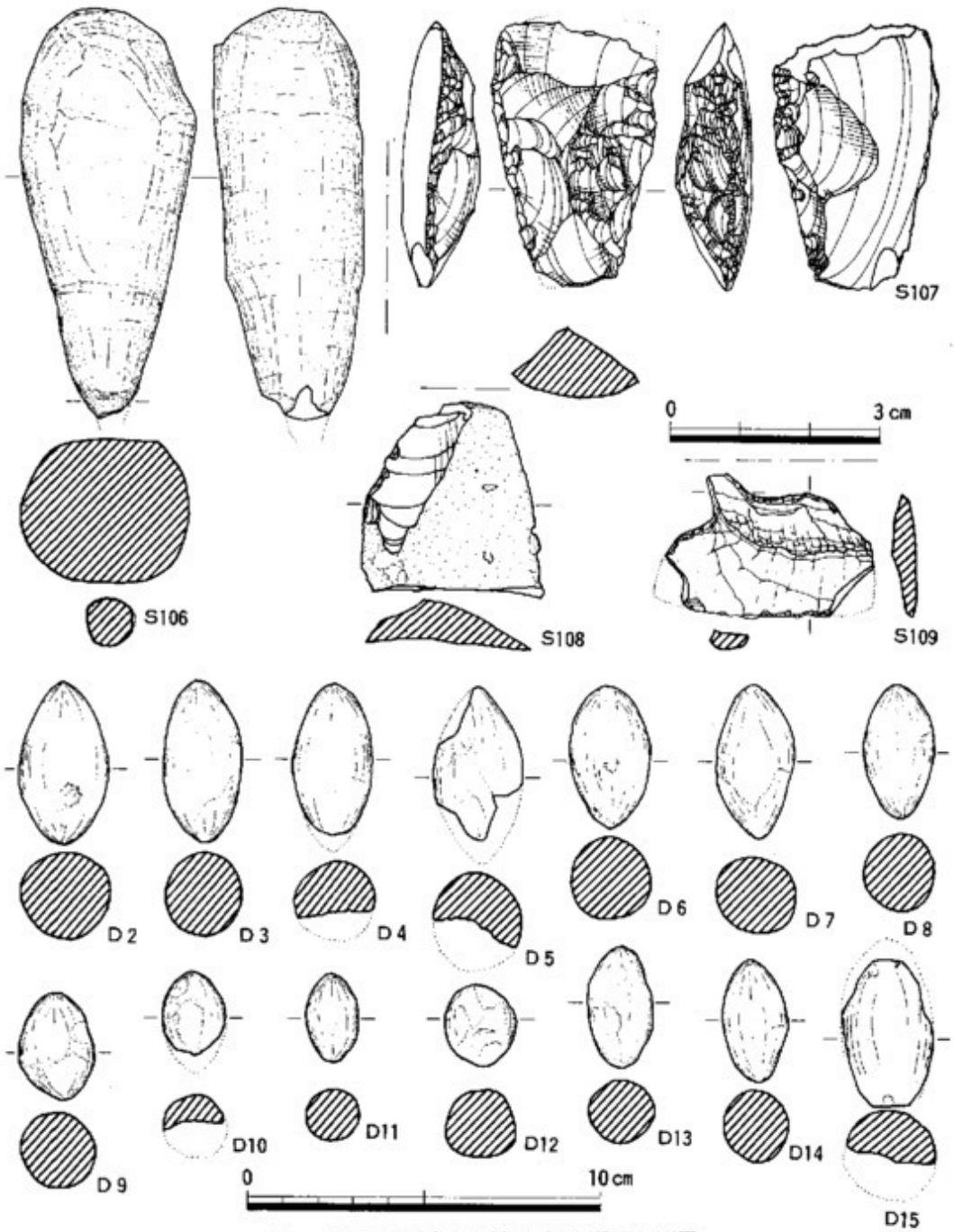


Fig. 45　第5層出土石器及び土製投弾実測図

先土器時代石器（Fig. 45　S107）

台形様石器（S107）黒曜石製の横広の不定形剥片の基部・先端部に刃潰し加工を加えている。主要剥離面の打瘤痕は平坦剥離加工によって除かれている。先土器時代の遺物として，他に，半舟底型細石刃核（黒曜石製）も出土している。

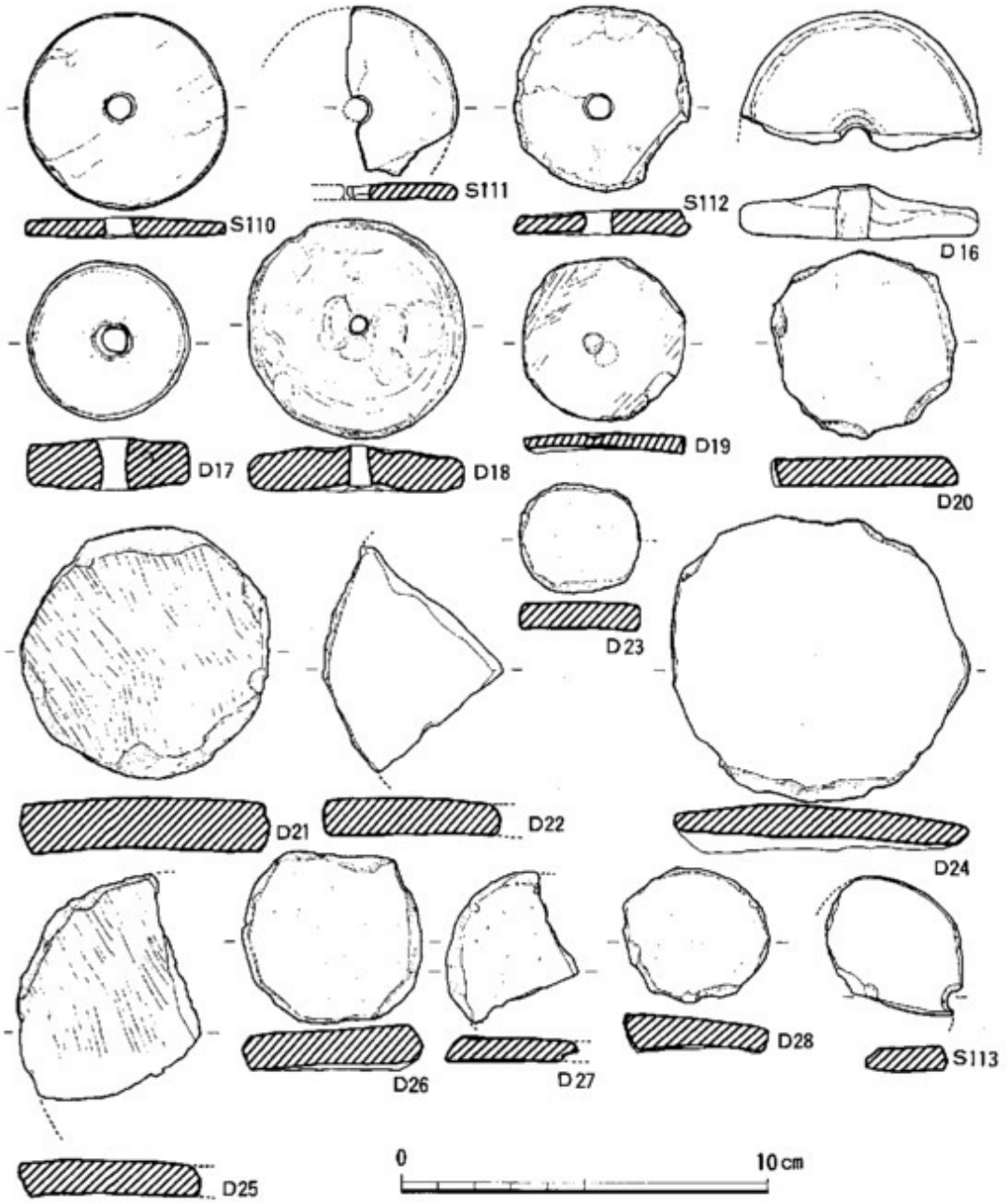


Fig. 46　第5層出土石製品及び土製品実測図

以上，本層中からは，弥生時代前期～後期前半期の土器が出土しており，第1号竪穴との切り合い関係から，第5層は弥生時代後期前半期の包含層といえよう。なお上面では，弥生時代終末から奈良時代の土器が出土しており，古代整地面とも考えられる。（山口）

Tab. 2　E－5・6地区第5層　出土石器・石製品・土製品一覧表

№	器種	石材	備考	Fig	PL
S24	扁平片刃石斧	硅質シルト質	重59.9g+α	40	
25	〃	〃	重15.4g	〃	
26	〃	〃	重75.4g+α	〃	
27	抉入片刃石斧			〃	
28	柱状片刃石斧	黒灰状粘板岩	重46.4g+α	〃	
29	〃	〃	重17.1g+α	〃	XIV
30	〃		重24.5g+α	〃	
31	蛤刃石斧			〃	XIV
32	〃			〃	
33	太形蛤刃石斧	今山産出玄武岩		41	
34	〃	〃		〃	
35	〃	〃		〃	
36	〃	〃		〃	
37	〃	〃		〃	
38	〃	〃		〃	
39	〃	〃		〃	
40	〃	〃		〃	
41	〃	〃		〃	
42	蛤刃石斧			〃	
43	太形蛤刃石斧	今山産出玄武岩		〃	
44	石包丁	安山岩質凝灰岩ホルンフェルス		42	XIV
45	〃	〃	重33.8g+α	〃	
46	〃	〃		〃	
47	〃	〃		〃	
48	〃	〃		〃	
49	〃	〃		〃	
50	〃	〃		〃	
51	〃			〃	
52	〃	粘板岩？(板岩)		〃	
53	〃	安山岩質凝灰岩ホルンフェルス		〃	
54	〃	〃	重43.0g−α	〃	
55	〃	〃		〃	
56	〃	〃		〃	
57	〃	凝灰岩ホルンフェルス		〃	
58	〃	小豆色凝灰岩 〃	立岩製	〃	
59	〃	安山岩質凝灰岩 〃	重36.7g+α	〃	
60	〃	〃	重37.5g+α	〃	
61	〃	凝灰岩？		〃	
62	〃	小豆色凝灰岩ホルンフェルス		〃	
63	〃	砂岩	重40.1g+α	43	XIV
64	〃	小豆色凝灰岩ホルンフェルス	重25.2g−α 立岩製	〃	
65	〃			〃	
66	〃	安山岩質凝灰岩ホルンフェンス	重27.7g+α	〃	
67	〃	凝灰岩 〃		〃	
68	〃	安山岩質凝灰岩 〃		〃	
D2	投弾		重23.2g	45	
3	〃		重21.2g	〃	
4	〃		重18.4g+α	〃	
5	〃		(重23.5g)	〃	
6	〃		重18.3g	〃	
7	〃		重22.5g	〃	XIV
8	〃		重13.5g	〃	XIV
9	〃		重11.7g	〃	
10	〃		重3.7g+α	〃	
11	〃		重5.2g	〃	
12	〃		重8.5g	〃	
13	〃		重10.5g	〃	XIV
14	〃		重12.2g	〃	
15	〃		重14.8g+α	〃	

№	器種	石材	備考	Fig	PL
S69	石包丁	小豆色凝灰岩ホルンフェルス	立岩製	43	
70	〃	凝灰岩		〃	
71	〃	小豆色凝灰岩ホルンフェルス	重23.9g+α 立岩製	〃	
72	〃	安山岩質凝灰岩 〃		〃	
73	〃	凝灰岩 〃		〃	
74	〃	安山岩質凝灰岩 〃		〃	
75	〃	〃		〃	
76	〃	小豆色凝灰岩 〃	立岩製	〃	
77	〃	安山岩質凝灰岩 〃		〃	
78	〃	〃		〃	
79	〃 (?)	〃		〃	
80	〃	〃		〃	
81	〃			〃	
82	〃	安山岩質凝灰岩 〃		〃	
83	〃	〃		〃	
84	〃	〃		〃	
85	石鏃	黒曜石	重1.6g 局部磨製	44	XIV
86	〃	〃	重0.9g 〃	〃	
87	〃	〃	重0.6g	〃	
88	〃	〃	重2.0g	〃	
89	〃	〃	重0.5g	〃	
90	〃	〃	重0.6g+α	〃	
91	〃	〃	重1.2g	〃	
92	〃	古銅輝石安山岩	重1.7g	〃	
93	〃	黒曜石	重0.9g+α	〃	
94	〃	〃	重0.75g+α	〃	
95	石戈	白緑色凝灰岩ホルンフェルス		〃	XIV
96	〃	安山岩質凝灰岩 〃		〃	XIV
97	石剣	〃	重63.5g+α	〃	
98	〃	〃	重30.9g+α	〃	
99	〃	〃	重13.9g+α	〃	
100	〃	凝灰岩ホルンフェルス	重14.7g+α	〃	
101	〃	〃	重22.1g+α	〃	
102	〃	安山岩質凝灰岩 〃	重30.5g+α	〃	
103	〃	〃	重33.1g α	〃	
104	〃	〃	重11.7g−α	〃	
105	石剣未製品	〃	重25.4g−α	〃	
106	穿孔具	砂岩		45	
107	台形様石器	黒曜石	重99.8g	〃	
108	Uフレイク	緑泥変岩	重55.0g+α	〃	
109	石匙	古銅輝石安山岩	重16.9g+α	〃	
110	紡錘車	滑石片岩	重23.4g	〃	XIV
111	〃		重8.5g+α	〃	
112	〃	滑石片岩	重25.8g	〃	XIV
113	?			〃	
D16	紡錘車		重32.0g+α	46	
17	〃		重31.7g	〃	
18	〃		重47.2g	〃	
19	紡錘車未製品		重12.0g	〃	
20	土製円盤		重26.7g	〃	
21	〃		重79.7g	〃	
22	〃		重28.7g+α	〃	
23	〃		重10.7g	〃	
24	〃		重71.2g	〃	
25	〃		重34.4g+α	〃	
26	〃		重31.1g 2号竪穴上層出土	〃	
27	〃		重9.5g+α	〃	
28	〃		重17.0g	〃	

5．川出土遺物

土器（Fig. 47　48）

自然の河道と推定される遺構の下部から大量の遺物が出土しているが，時間的制約から，また5層と同様の土器が出土しているので，重複をさけるために，各時代毎に数例ずつ抽出して実測を行なった。

壺（Fig. 47　398～402）

398は口縁内湾部は短く，端部は尖り気味となる。外面の頸部～胴部は下→上方向の刷毛目，口縁部は横ナデ調整を行う。399は鋤先状口縁をもつ。色調は淡灰褐色を呈し，焼成良好であるが，磨滅のため調整は不明瞭であるが，頸部は両面ともヘラ研磨と考えられる。400は無頸壺で外側から口縁部内側にかけて丹塗りを施す。401は袋状口縁で，袋部内稜をもたない。外面から口縁部内端にかけて丹塗りで赤褐色を呈する。頸部は縦方向，口縁部は横方向の刷毛調整を施し，丹塗りしている。以上の土器は後期前半のものであろう。402は頸部がすぼまり，外反しながら口縁部となる。端部は少し窪む。外面には下→上方向の刷毛目が施され，口縁部は横ナデ，内面の頸～胴部は横方向の刷毛調整が施されている。後期後半のものであろう。

高坏（Fig. 47　404～405）

404は暗文を施す平坦口縁で，内外面とも丹塗り磨研土器である。口縁部直下に三角凸帯が巡る。口縁部外側が下がり内側への発達が著しい。405は杯部下半で屈曲し稜をもつ終末期のものであろう。

器台（Fig. 47　406～408）

406は下半部に斜方向の平行の叩きのあと縦方向の刷毛目調整を施す。内面はナデである。胎土に砂粒を含み焼成は良好で，色調は淡黄赤色を呈す。407は円筒形のもので，あるいは支脚の可能性も考えられる。408は口縁部が肥厚し，口縁部は平坦で肉厚となる。調整は磨滅のため不明瞭だが，荒い刷毛目が少し残る。後期中～後半。

甕（Fig. 48　409～417）

409は板付Ⅱ式である。口縁部下端に細い刻目を入れ，胴部に沈線をもつ。外面は刷毛調整を施し，口縁部周辺から内面はナデ調整。器壁は厚く，胎土に石英粒を含み焼成良好である。410は前期末～中期初頭のもので，口縁部平坦面の両端及び外端に刻目をもつ。胴部は不明。341～342は中期初頭のもので口縁部に三角凸帯を貼り付けている。411は胴部から内湾気味に口縁部へと至る。凸帯部に刻目をもつ。412は口縁直下に三角凸帯をもつ，口縁上端は丸くなる。胎土に石英粒を含み，焼成は良好，色調暗褐色を呈する。内外面ともナデ調整を施す。413は平坦口縁を有するもので内側への発達が著しい。色調は淡褐色で外面に煤が付着している。外面の胴部に粗い縦方向の刷毛目が残り，その上から横方向のナデを口縁部内面まで行う。414は逆L字口縁で外面に刷毛調整を縦方向に施す。口縁部は横ナデ，内面は横方向のナデを

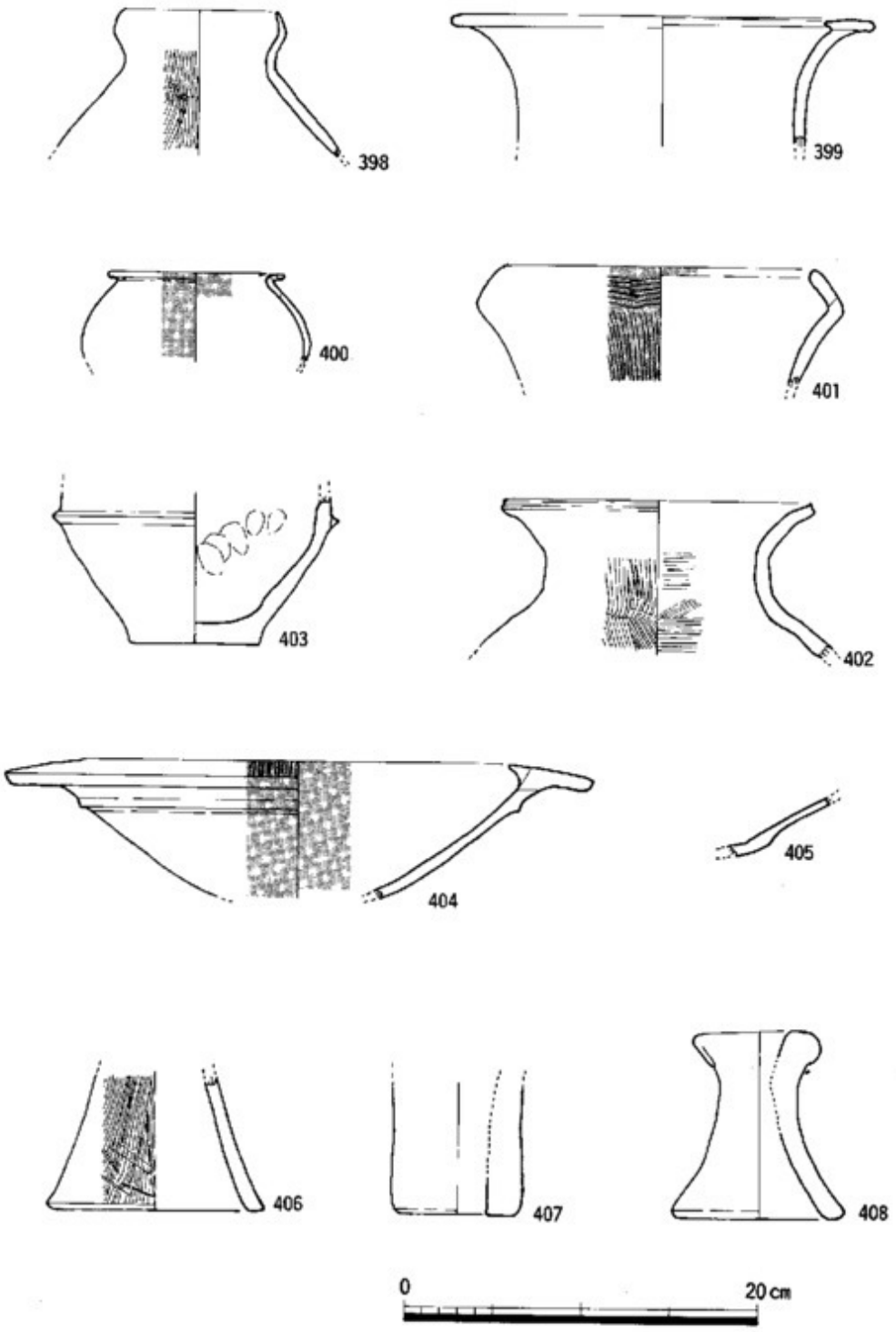


Fig. 47　川出土土器実測図(1)

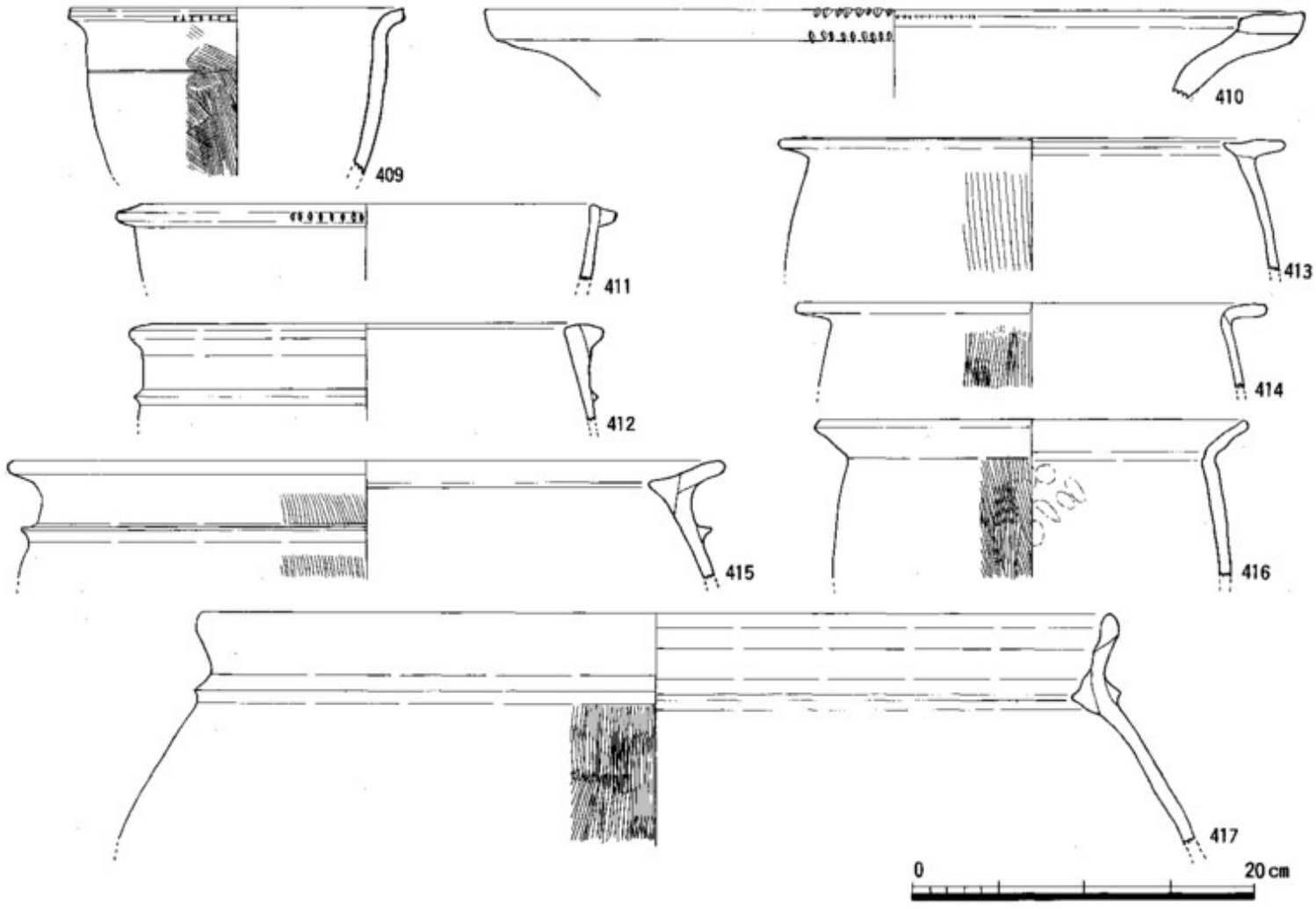


Fig. 48　川出土土器実測図(2)

行う。以上の土器は中期中葉の土器であろう。415は口縁部直下の胴部に三角貼付凸帯を施す。416はほぼ垂直に立つ胴部から強く屈曲し口縁部へ直線的に開く。端部はいく分肥厚し角張る。胴部外面は刷毛調整，他はナデ。417は口縁部が短く直立し，口縁直下のくびれ部外面に三角凸帯を巡らし，内面も発達し稜をもつ。最大径は胴部にある。口縁部内側は波状に凹凸がみられ，横ナデを施す。胴部外面には粗い刷毛調整を施す。（松村）

石器・土製品（Fig.49・50）

石斧類（Fig.49　S125～S128，Fig.50　S130）

扁平片刃石斧（S125）　珪質シルト岩製で敲打整形後入念に研磨を加えている。平面形は長方形，横断面も長方形で，刃部の角度は50°，重さ20.1g である。

抉入片刃石斧（S126・S127）S126はシルト岩製，S127は黒色シルト岩製の刃部片で，敲打整形後入念に研磨が加えられている。S127は使用痕があり，S126も刃部の角度は70°である。

柱状片刃石斧（S128）　硅質シルト岩製で敲打整形によって長方形・断面方形に整形し，入念に研磨を加えている。刃部の角度は65°で重さは32.8g である。

蛤刃石斧（S130）　粘板岩製。敲打によって長方形に整形し，体部の表裏面・左縁辺に研磨を加えている。蛤刃石斧と思われるが刃部を欠損している。

収穫具（Fig.49　S114～S124・S129）

石包丁（S114～S124）　いずれも安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製で，S114～S117・S119・S120・S124が完成品である。S114～S117・S119は敲打によって直線的な背部をつくり出し，半月形に整形，入念に研磨を加えている。刃部は両刃で穿孔は表裏から行なわれている。S124は杏仁形石包丁と思われる。S118は敲打によって半月形に整形し，研磨を加え，穿孔が試みられているが貫通していない。S121は敲打により半月形に整形し研磨によって両刃の刃部がつくり出され，穿孔が表面から試みられている。S123は敲打整形後研磨が加えられている。S118～S121～S123は未製品である。

石鎌（S129）　安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製で，敲打整形後内湾する両刃の刃部はていねいに，他は雑に研磨が加えられている。

利器（Fig.50　S131・D29～D33）

石剣（S131）　安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製で，敲打によって長方形に整形し，研磨を加えている。中茎部である。

土製投弾（D29～D33）　いずれも手捏によって砲弾形に整形している。黒色～黒褐色を呈し胎土には石英・砂粒を含み堅緻で焼成も良い。重さは，D29が23.2g，D30が22.3g，D31が20.75g である。

工具（Fig.50　D34～D38）

紡錘車（D34～D36）D34・D35は手捏によって円形に整形し，周辺部表裏にヘラ調整を施し

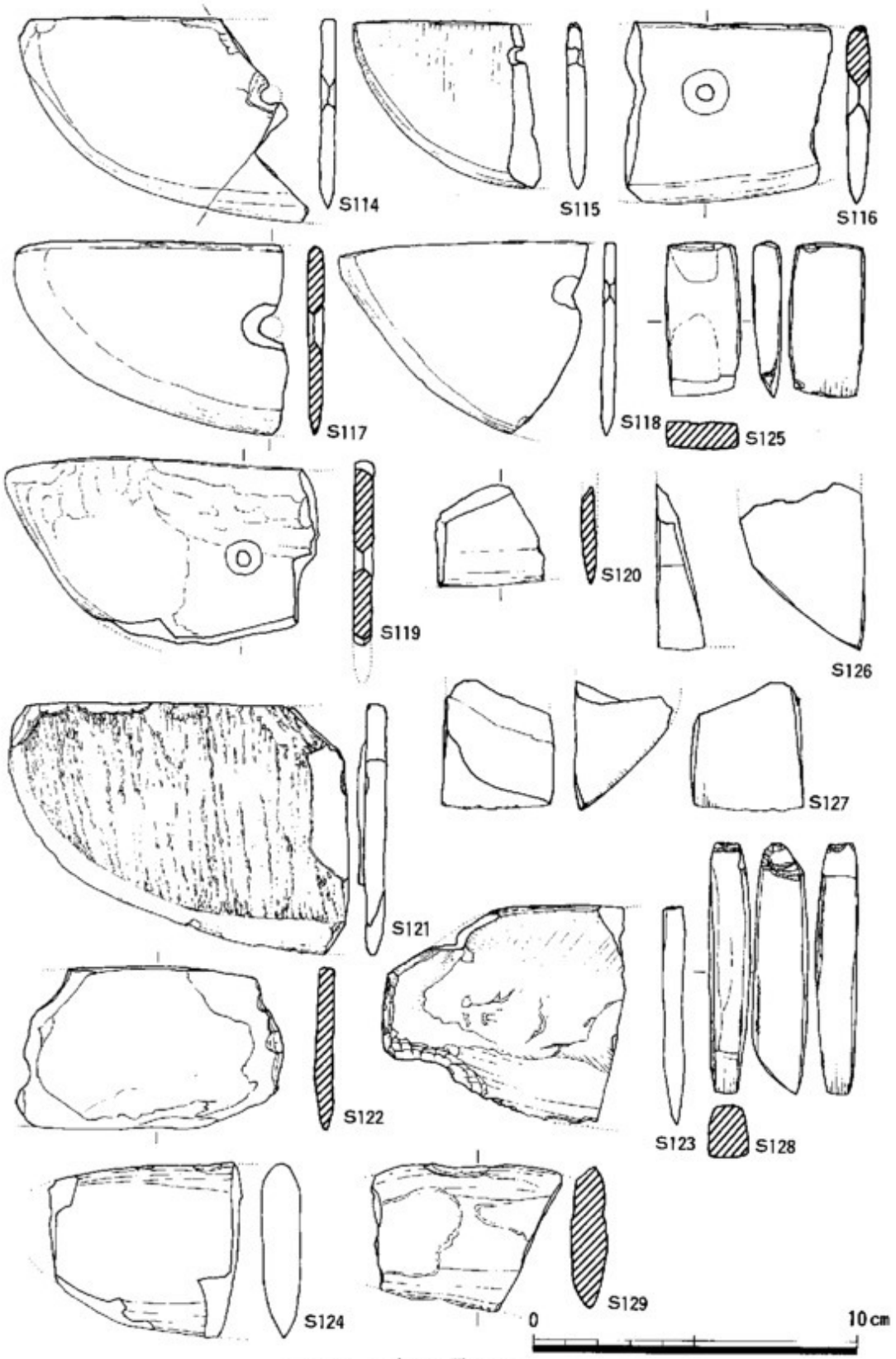


Fig. 49　川出土石器実測図

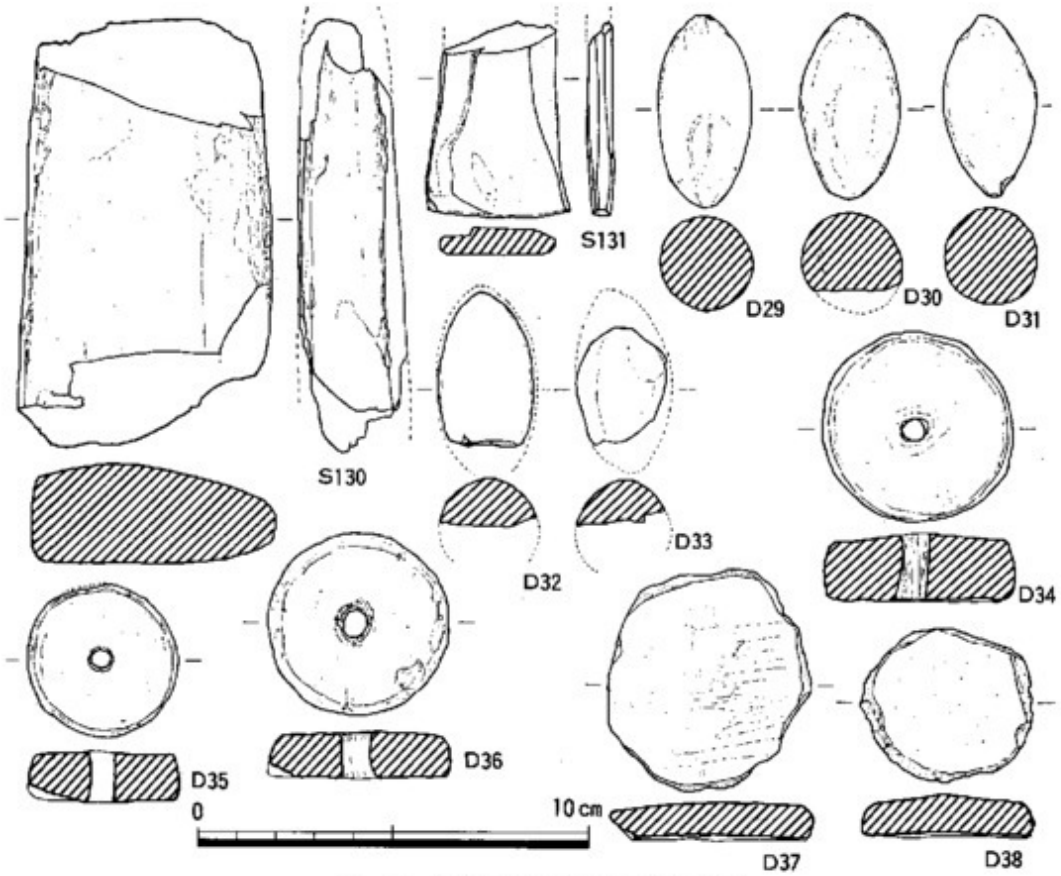


Fig. 50　川出土石斧及び土製品実測図

ている。D34は裏から，D35・D36は表裏から棒状工具によって穿孔している。D34は灰色～暗灰色を，D35は褐色を呈し，D36は丹塗りである。胎土には石英・砂粒を含み堅緻で焼成も良い。重さはD34が45.3g，D35は21g，D36が27gである。

土製円盤（D37・D38）　壺片を打ち欠きによって円形に整形し，周縁部に研磨を加えている。重さはD37が33.6g，D38が21.2gである。

木製品（Fig. 51）

ひしゃく（W 6）クヌギ材を用いて作られたひしゃくで，残存長50cm（身部12cm），身部の高さ8.2cm，柄部径2～2.3cmを計り，身部はくり抜きによって作られている。身部の器壁は 0.4～0.5 cmで全体的に磨滅しているため，削痕等はわからない。

鍬（W 7・W 8）W 7・W 8はカシの板目材を用いている。W7は巾の狭い身部をもち，柄部の断面は長方形に板目方向の削りで整形している。身部の大部分は欠損しているが，表は内弯気味となっている。W8は板目に沿って削りを加え，身部肩が張り中央部が内　する形状の鍬である。身部は約半分欠損している。身部長約20cm，身部肩巾約16cm，柄部径2.3cm。

くさび状木製品（W 9）堅い材質の木を使い，削りによって先端を尖らせ，頭部も丸くなるよ

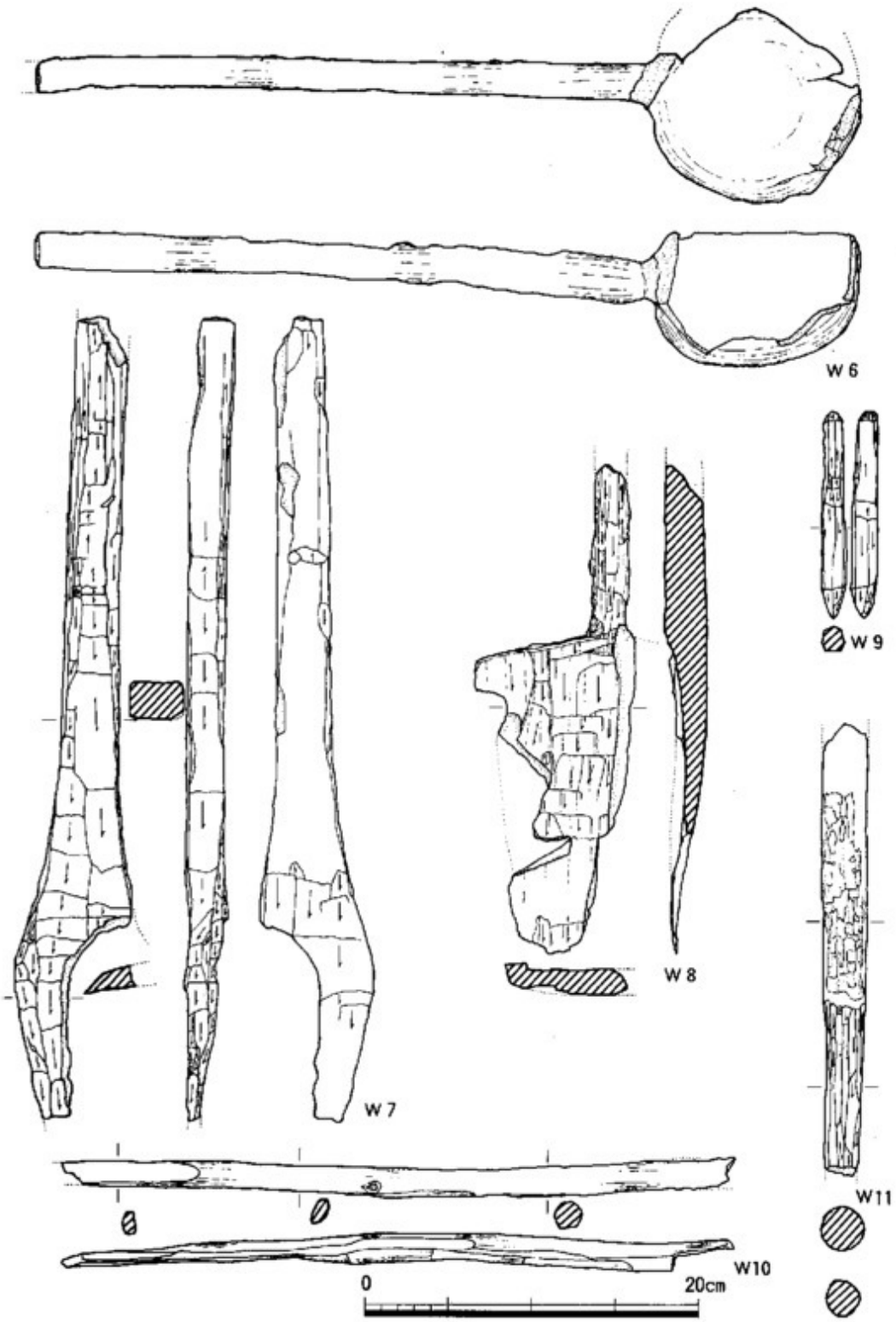


Fig. 51 川出土木製品実測図

Tab. 3　E-5-6地区　川出土石器・石製品・土製品一覧品

No	器種	石材	備考	Fig	Pl.
S 114	石包丁	安山岩質凝灰岩ホルンフェイス	重さ32.3g+α	19	
S 115	〃	〃		〃	
S 116	〃	〃		〃	
S 117	〃	〃		〃	
S 118	〃	〃		〃	
S 119	〃	〃	重さ57.6g−α	〃	
S 120	〃	〃		〃	
S 121	〃	〃	重さ100g α	〃	
S 122	〃	〃		〃	
D 29	投弾		重さ23.2g	50	
D 30	〃		重さ22.3g+α	〃	
D 31	〃		重さ20.75g	〃	
D 32	〃		重さ9.8g+α	〃	
D 33	〃		重さ5.9g+α	〃	

No	器種	石材	備考	Fig	Pl.
S 123	石包丁	安山岩質凝灰岩ホルンフェイス		49	
S 124	〃			〃	
S 125	磨平片刃石斧	粘質シルト岩	重さ20.1g	〃	
S 126	抉入片刃石斧		重さ28.0g+α	〃	
S 127	〃		重さ42.2g+α	〃	
S 128	柱状片刃石斧		重さ32.8g	〃	
S 129	石錘	安山岩質凝灰岩ホルンフェルス		50	
S 130	蛤刃石斧	粘板岩		〃	
S 131	石剣？（又は石鏃？）	安山岩質凝灰岩ホルンフェルス	重さ21.3g+α	〃	
D 34	紡錘車		重さ45.3g	50	
D 35	〃		重さ21.0g+α	〃	XIV
D 36	〃		重さ29.0g	〃	XIV
D 37	土製円盤		重さ33.6g 7層出土	〃	
D 38	〃		重さ21.2g	〃	

うに仕上げている。長さ12.6cm，径1.5cm。

弓（W10）　カヤノキ？の径1.7cm前後の丸木を用い，節部を切断し部分的に板目方向の削りを入れ，両端に大きな削りを表裏から入れて，弓弦結び部を作り出している。

杭状木製品（W11）カシの径2.7cmの丸木を使い，下に板目に沿って細い削りを入れ，断面を丸く仕上げている。杭とも考えられるが，削りがていねいであるため一応杭状木製品として報告する。削りのない部分は，表皮が残ったままである。（山口）

第3章　調査のまとめ

本調査区の調査の成果としては，板付北台地の東縁辺部における各時期の様相を知ることができたことといえよう。

遺構としては，中世の礎盤残りの建物（ＳＢ－1），弥生時代終末期の祭祀的意味を持つと思われる第１号竪穴（ＳＫ－1），弥生時代後期前半の井戸址？（ＳＫ－3），同期の竪穴(ＳＫ－2・４）。同期と思われる堰状遺構，及び柵が確認された。

本調査区からは，64749点（土器の細片及び削片・小枝等の流木を除く）の遺物が出土し，大部分（98.21％)は土器片であり，石器 1.30％，木製品0.42％，金属器0.07％である。中でも土器の78.30％，石器の66.15％は第５層から出土した。第５層からは，夜臼式土器から高台付の須恵器・土師器等も出土している。第５層は客土の可能性も考えられたが，遺物を含む土質は粗砂であり，粘土・シルト等の混入がなく，自然堆積であると考えた方が妥当であろう。また，須恵器・土師器等が出土しているが，第５層上面のみであり，第１号竪穴の上面で須恵器等が出土しているのは，第１号竪穴が第５層の大部分を切り第１号竪穴よりも古い時期に形成されていたと考えられる。本層中からは前述したように，銅鏃・鋳型（成品は何になるか不明）・石戈等の遺物が出土した。

第６層中では，板付Ⅱ式土器等が出土し，弥生時代前期後半の包含層と考えられるが，調査区北西部の約５cmの土層堆積であるため，ここでは第５層出土遺物として扱った。

第７層からは，板付Ⅰ式土器・夜臼式土器等が出土し，板付北西台地西側のＧ-7ａ・7ｂ調査区の第７～９層に対比できる層で，1556点（土器総量の2.45％）の土器片が出土した。出土土器のうち板付Ⅰ式土器は，壺６点，甕８点の14点で，圧倒的に夜臼式土器が多い。夜臼式土器は 492点で，内訳は壺が69.51％(板付Ⅰ式を合わせると66.77％)，甕が18.09％(19.17％)，鉢が11.79％，その他が0.61％である。本層中からは，他に木製農耕具鍬の柄孔部等が出土した。

第８層からは，547点の土器及び石製品・木製品各２点が出土した。547点の土器片は夜臼式土器で，Ｇ-7ａ・7ｂ調査区の第12～14層に対比する層である。土器片の内訳は，壺が40.40％，甕が57.04％，鉢が2.38％，高坏が50.18％である。

第９層からは，401点の土器片，33点の石器及び石製品が出土した。土器片は夜臼式土器で，壺が33.17％，甕が59.10％，鉢7.73％である。壺の底部は丸底・平底がある。

土器を比較してみると，第７～９層の夜臼式土器の甕は凸帯をもつものを口縁部（図示できるものについて）でみていくと，第７層が58点中53点（91.38％)，第８層が32点中25点（78.13％），第９層が33点中22点（66.67％)と古くなるにつれて凸帯をもつものが少なくなっている。壺・甕・鉢においても時期差がみられるが，出土資料が少ないため，今後の資料の増加をまちたい。

Tab. 4　出土土器一覧表

器種		SK-1				SK-2					SK-3				SK-4	第9層	第8層	第7層		第5層					川					計	%
		前期	中期	後期	不明	夜臼	前期	中期	後期	不明	前期	中期	後期	不明				夜臼	板付I式	夜臼	前期	中期	後期	不明	夜臼	前期	中期	後期	不明		
壺	口縁部		2					8	2	6		15	1			6	7	20		6	2	223	38			2	21	8		367	0.58%
	胴部		8	4				20	4	196	1	36	1	8		119	201	325	4		21								113	1056	1.66%
	底部		1	1						9		14				8	12	2	2	2	25					2	13	5	3	99	0.16%
	完形品																1													1	0%
甕	口縁部	1	15	16		1	16	38	7	26	1	60	7	9		38	40	68	4	50	35	603	191		3	17	102	28	1	1417	2.23%
	胴部				222					1608				506		179	290	1060	20	7									14	3883	6.11%
	底部		4	1	10	1	2	14	4	3		18	2	4		20	12	21	4	63		768	131		8	7	37	3	6	1143	1.80%
	完形品							1																						1	0%
鉢	口縁部			2						6			5			8	5	19	10		11	44				1	3	3	5	122	0.19%
	胴部															23	8	39												70	0.11%
	脚部																										1			1	0%
	不明																												23	23	0.04%
蓋																					5	13					2			20	0.03%
高坏	坏部		1				3	2	1			3															11		9		
	脚台部																1	2		2	4	22	25	320					1	429	0.67%
	脚部		1	2				1	2			1					底断									1	3	1	10		
器台					3					28				17				(3)					116	553					105	825	1.30%
ミニチュア器														4	1			1					5							11	0.02%
土師器																									8+α					8+α	0.01%+α
須恵器	壺																							2						2	0%
	甕																							21						21	0.03%
	坏																							9						9	0.01%
	高坏																							2						2	0%
瓦																								1						1	0%
不明	口縁部																							5563					575	6138	9.65%
	胴部									159														40804					252	41215	64.78%
	底部									1														26					6700	6727	10.58%
計		1	32	26	235	2	21	34	19	2062	2	147	16	548	1	401	547	1552	14	153	99	1680	560	47300−α	11	30	193	48	7817		
総計		294				2188					713				1	401	547	1566		49792					8099					63591	
%		0.46%				3.44%					1.12%				0%	0.63%	0.86%	2.45%		78.30%					12.74%						

Tab. 5　出土土製品一覧表

器種	SK-2	SK-4	第9層	第8層	第7層	第5層	川	計	%
土製投弾						14	6	20	41.67%
紡錘車						3	3	6	12.50%
紡錘車未製品						1		1	2.08%
土製円盤	2				1	9	4	16	33.33%
その他					1	4		5	10.42%
計	2				2	31	13	48	
%	4.17%				4.17%	64.58%	27.08%		

これら第7～9層はG-7a・7b調査区の第7～14層に対比する文化層であるが，水田址は確認できなかった。しかし，第7・8層の木製農耕具の出土や第8層出土の鉢で籾が胎土に含まれるものがあり，夜臼式土器期に水稲耕作があったことを証明する資料を追加したといえる。

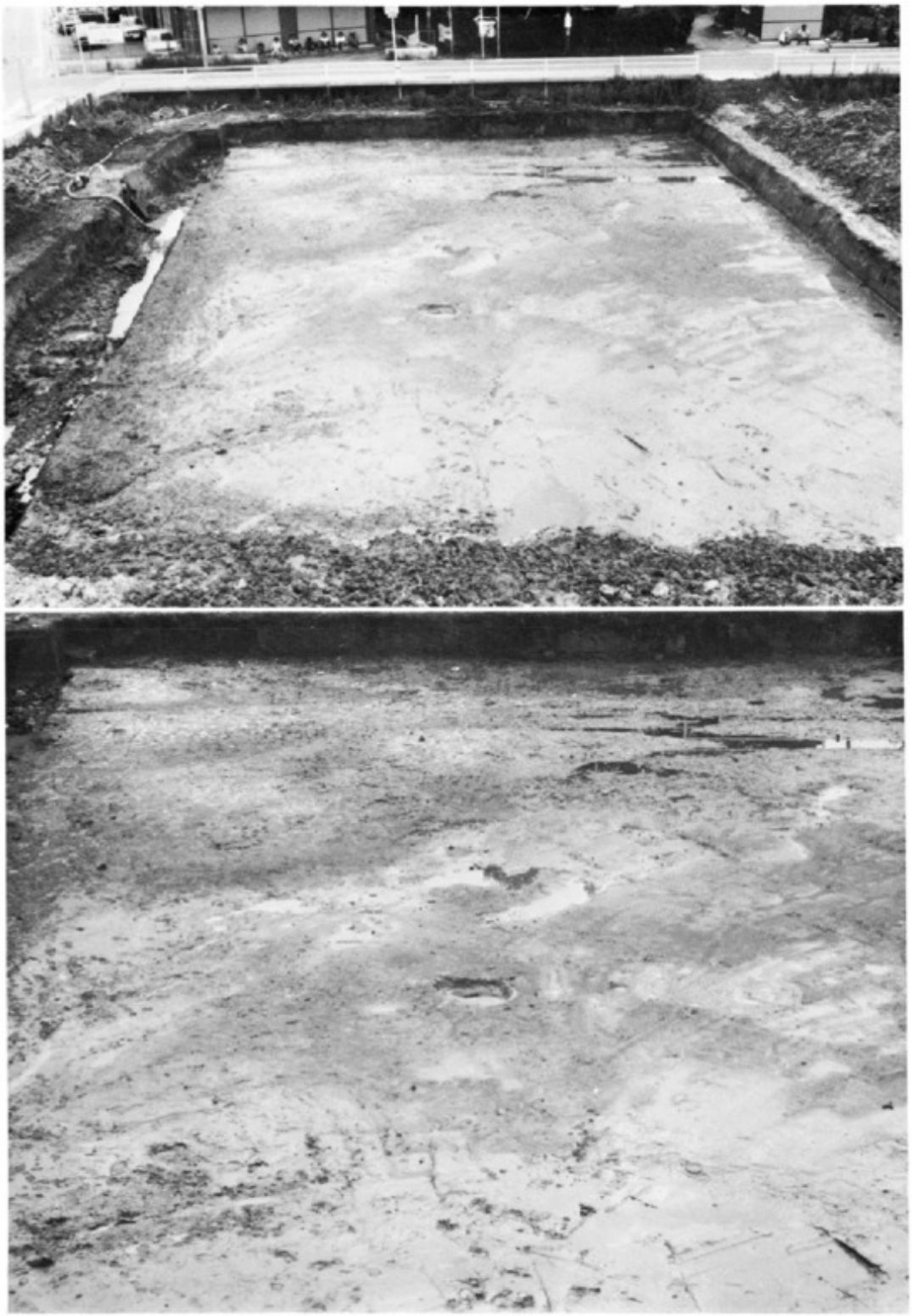
以上まとめると下記のような成果を得た。

1．板付遺跡の東縁部様相の一部を確認した。

2．夜臼式土器期の単純層を確認し，G-7a・7b調査区の追加資料を得た。（山口）

Tab. 6　出土石器一覧表

	器種	石材	SK-2	SK-4	第9層	第8層	第7層	第5層	川	計	%
石斧類	扁平片刃石斧	硅質シルト岩						6	1	7	
	扁平片刃石斧未製品	硅質シルト岩						3	3	6	
	柱状片刃石斧	粘板岩						2		2	
	柱状片刃石斧	硅質シルト岩					1		1	2	
	柱状片刃石斧未製品	硅質シルト岩							1	1	
	挟入片刃石斧	硅質シルト岩	1	1				1	1	4	
	挟入片刃石斧	その他							1	1	9.42%
	片刃石斧未製品	硅質シルト岩						2		2	
	片刃石斧未製品	蛇紋片岩						1		1	
	太形蛤刃石斧	今山産出玄武岩	1					26	3	30	
	蛤刃石斧	粘板岩							1	1	
	蛤刃石斧	その他				1	2	13	5	22	
収穫具	石包丁	安山岩質凝灰岩ホルンフェルス	2	1			4	31	7	45	
	石包丁	立岩製						6		6	
	石包丁	その他						6	1	7	
	石包丁未製品	安山岩質凝灰岩ホルンフェルス						15	2	17	
	石包丁未製品	安山岩						3		3	
	石包丁未製品	その他						5	3	8	11.56%
	石鎌	安山岩質凝灰岩ホルンフェルス							1	1	
	石鎌？	硅質シルト岩						1		1	
	磨製石器	安山岩質凝灰岩ホルンフェルス							1	1	
	すり石	その他						8		8	
利器	石鏃	黒曜石			1	1	3	9		14	
	石鏃	チャート					1			1	
	石鏃未製品	黒曜石					1	1		2	
	石戈	安山岩質凝灰岩ホルンフェルス						2		2	
	石錐	安山岩質凝灰岩ホルンフェルス						14		14	
	石錐	黒曜石			1					1	
	掻器	安山岩					7			7	12.40%
	削器	安山岩					7	9		16	
	削器	黒曜石						4		4	
	削器	安山岩質凝灰岩ホルンフェルス						1		1	
	削器	その他							1	1	
	Uフレイク	安山岩			1			3		4	
	Uフレイク	黒曜石			4		3	29		36	
	Uフレイク	チャート						1		1	
工具	穿孔具	砂岩						1		1	
	敲石	その他						4		4	
	砥石	砂岩			2			70	7	79	10.61%
	砥石	その他						1		1	
	磨製石	滑石片岩						3		3	
	磨製石未製品	滑石						1		1	
その他	鋳型	砂岩						1		1	
	剝片	安山岩質凝灰岩ホルンフェルス					2			2	
	剝片	安山岩					4	1		5	
	剝片	緑泥片岩					1			1	
	剝片	板岩						1		1	
	剝片	黒曜石			2		26	35	2	65	
	削片	安山岩			1		8	5	1	15	
	削片	緑泥片岩					1			1	
	削片	黒曜石			14		102	131	5	252	55.65%
	石核	安山岩						1		1	
	石核	緑泥片岩						1		1	
	石核	チャート						1		1	
	石核	黒曜石			5		20	74	1	100	
	礫	黒曜石			1		1	17		19	
	軽石							1		1	
	ピュエスキュー	安山岩						1		1	
先土器時代石器	台形様石器	黒曜石						1		1	0.36%
	細石刃核	黒曜石						2		2	
		計	4	2	33	2	194	555	49	839	
		%	0.48%	0.24%	3.93%	0.24%	23.12%	66.15%	5.84%		

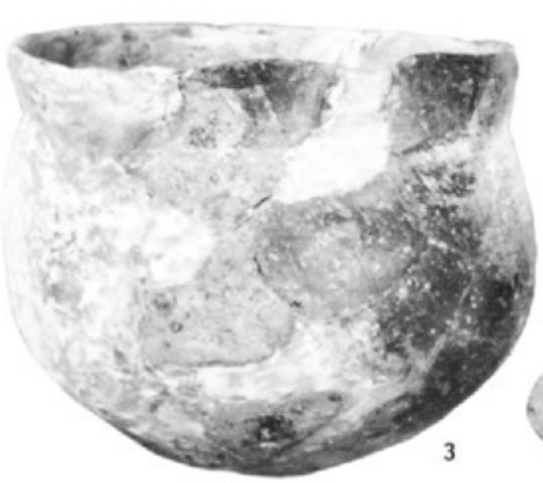


板付遺跡 E－5・6地区，I区全景（上 東から，下 東から）

板付遺跡E－5・6地区全景（上Ⅰ区　下Ⅱ区）

第1号竪穴遺物出土状況

1



3

7

6

第１号竪穴出土土器

W 1

18

17

19

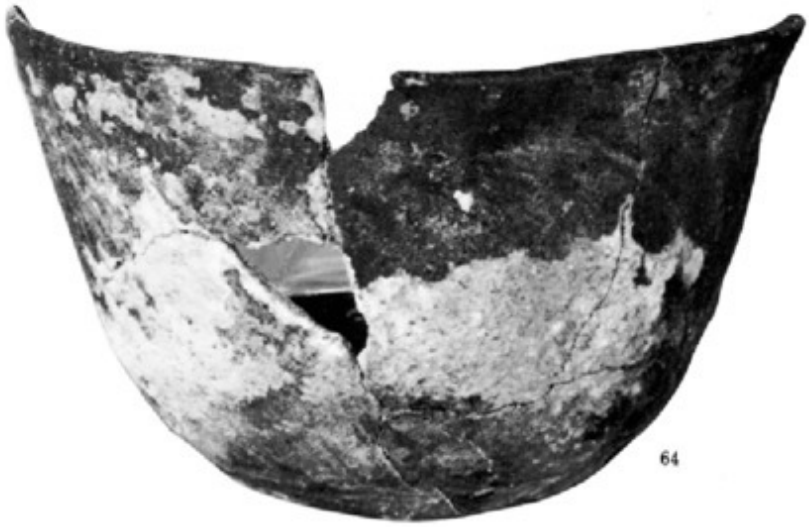
16

第２号竪穴三又鍬出土状況・第３号竪穴出土土器

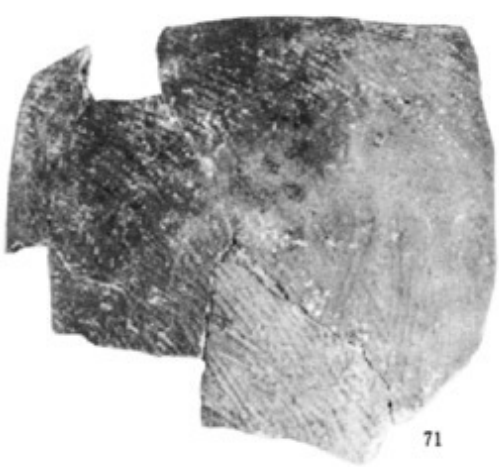
第１号建物（東から）

第１号建物Ｐ－３礎盤

第１号建物Ｐ－１礎盤

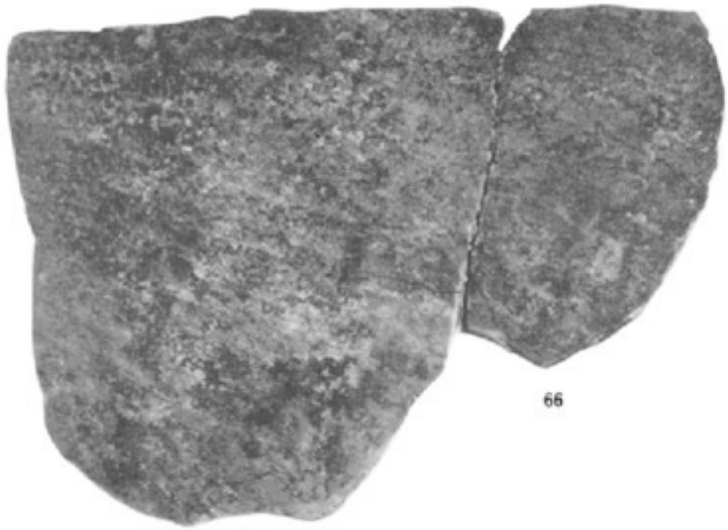


64



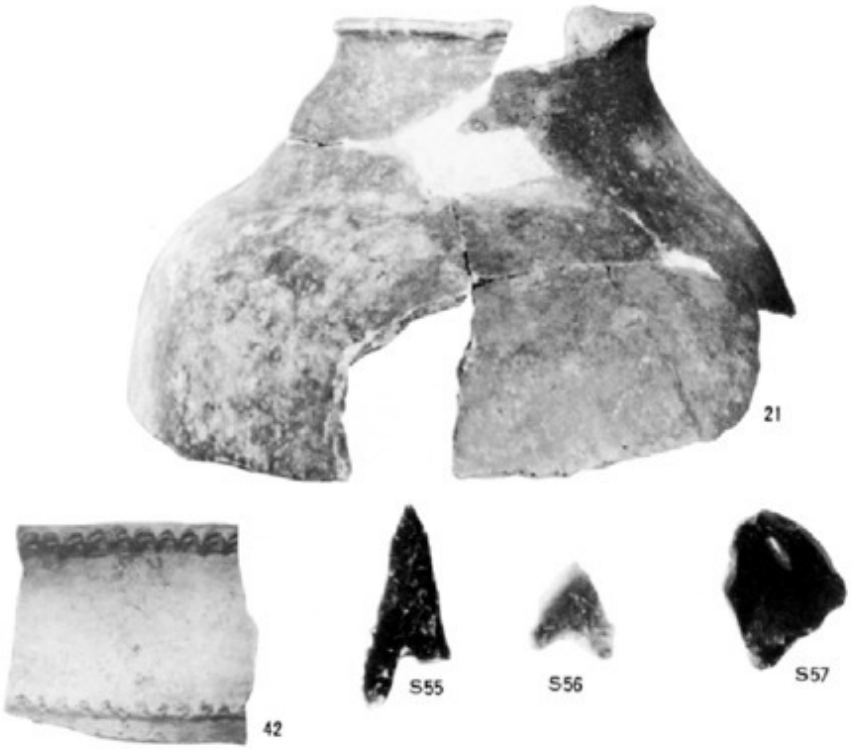
71

72



66

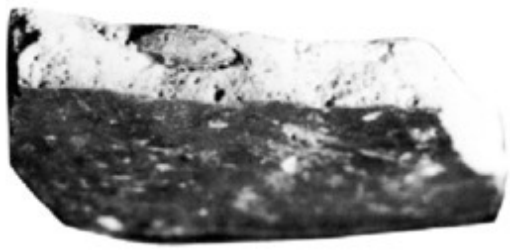
第9層出土土器



第9層出土遺物

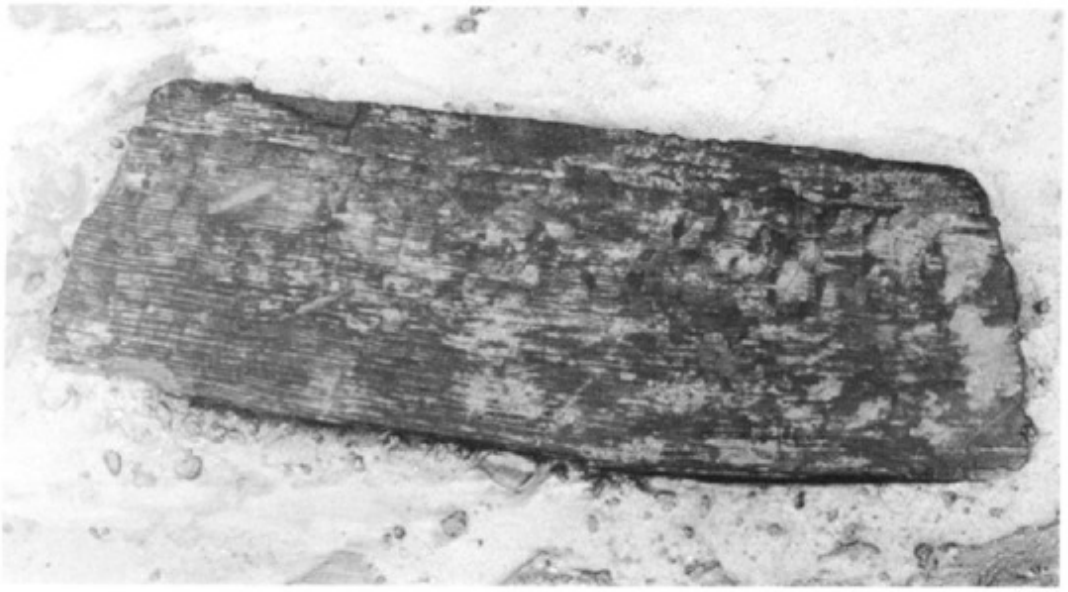
第8層小形壺出土状況

87



91

第8層出土土器（上右　胎土に籾を含む鉢）



W 3

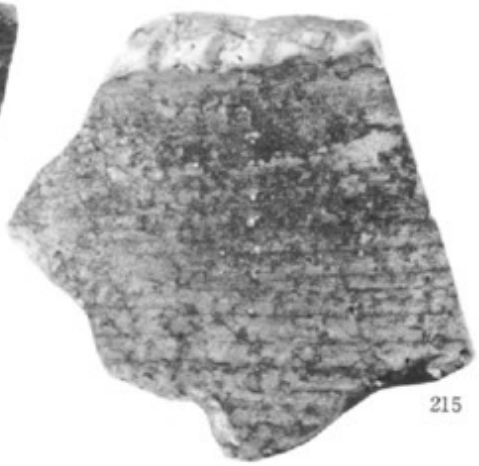
W 2

第 8 層木器出土状況

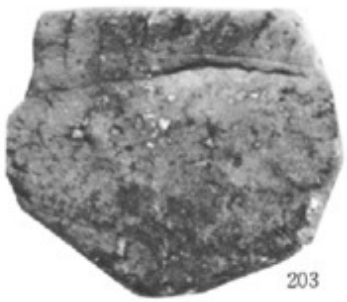
167

197

182

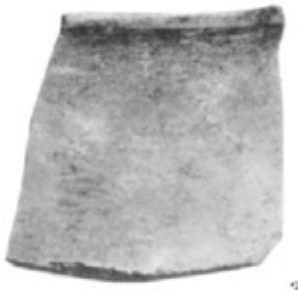

215

185

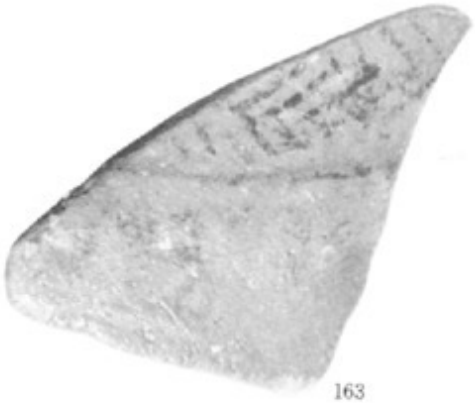

203

第7層出土土器

165

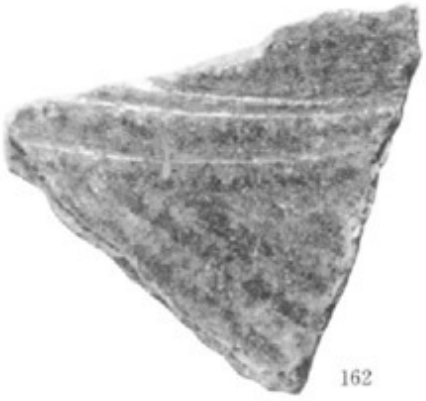


24
(第9層)



163

164



162

W 4

S12

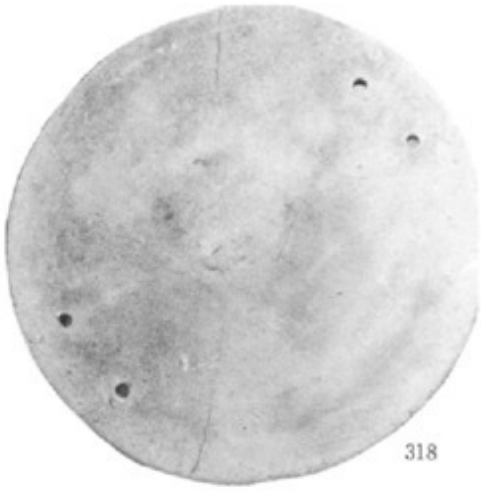
S10

第7層出土遺物

380

388

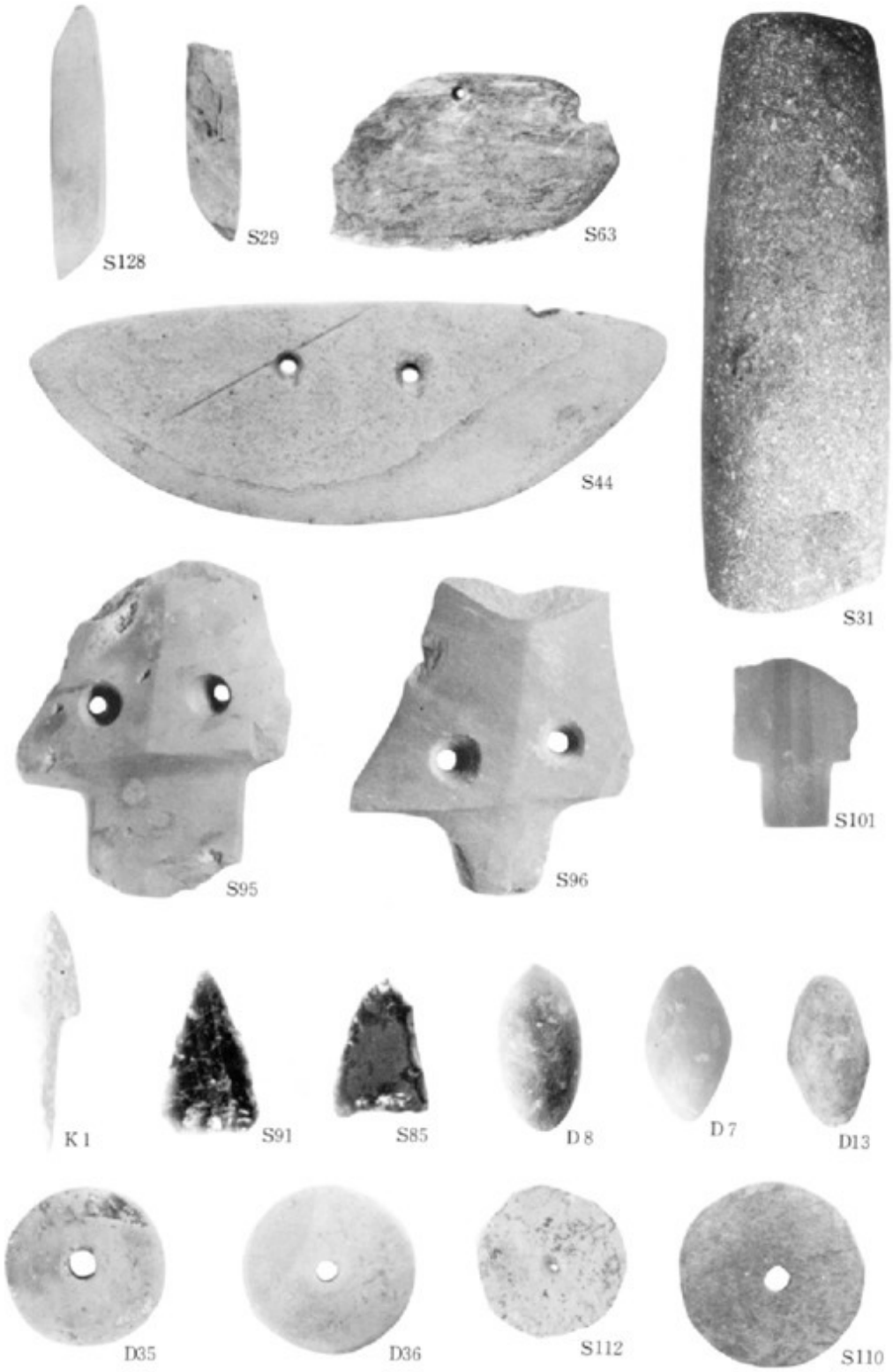
338


318

394

387

第5層出土土器

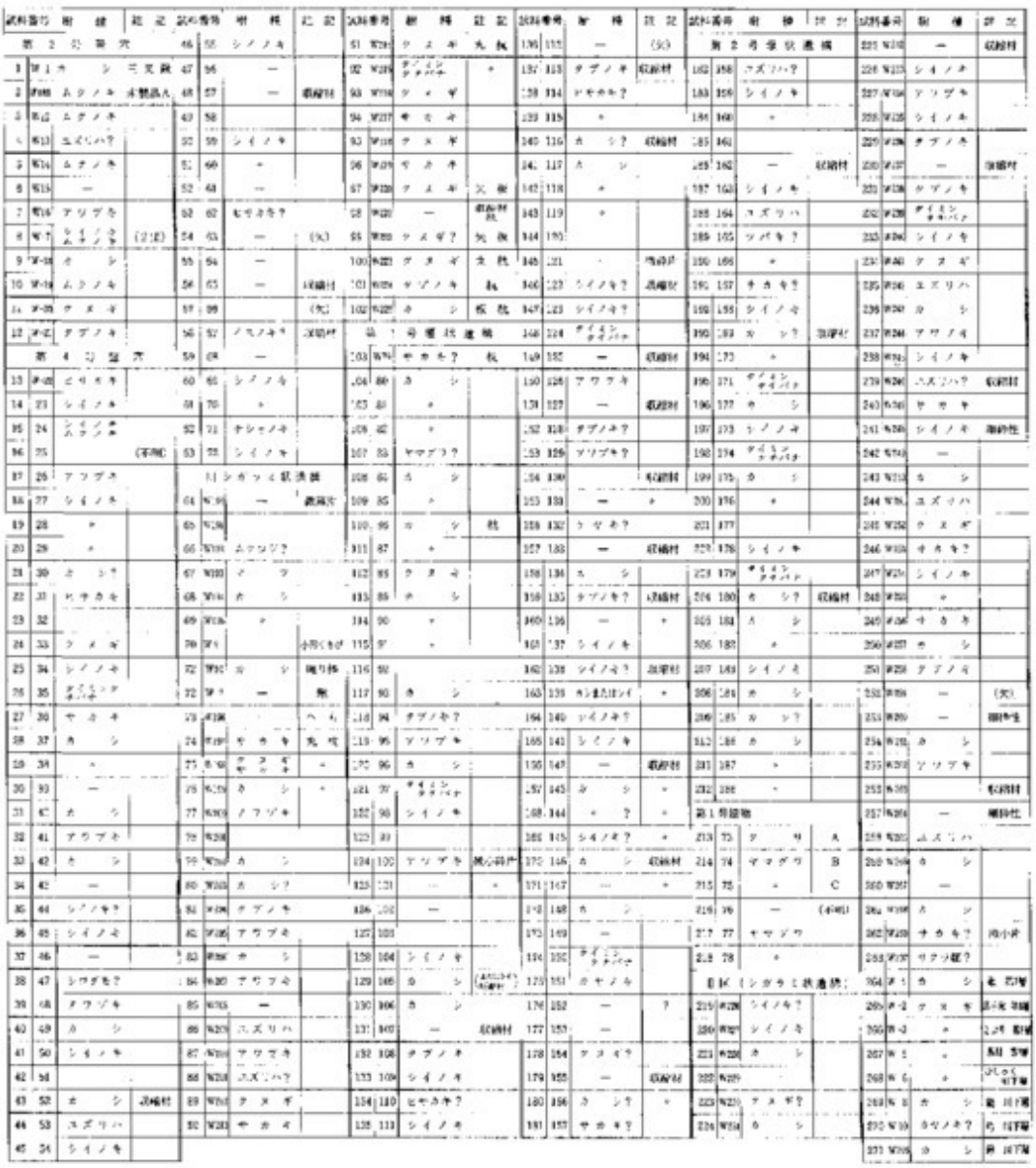

S128
S29
S63
S44
S31
S95
S96
S101
K1
S91
S85
D8
D7
D13
D35
D36
S112
S110

第5層・川出土遺物

付編　福岡市板付E-5・6地区出土の木質遺物の樹種

嶋倉巳三郎

福岡市博多区板付E-5・6地区から出土した木質遺物の樹種を調査した。試料は数ミリ大の小片が多く，乾燥のため材組織が収縮変形したものもあり，適当なプレパラートを作れない場合も生じた。その結果同定できなかったものや，特徴不十分で暫定的にきめたものもある。調査の結果を次に示す。



ま と め

試料のうち木製品は僅かであるが，まとめると次表のようになる。

品名 / 樹種	鋤	鍬	三叉鍬	諸手鍬	えぶり	ひさく	杭状木製品	くさび	板材	弓	未製品A	礎板	へら	不明木器
カヤノキ										○				
カシ	○	○	○				○							
クヌギ				○	○	○			○					
クリ														
ムクノキ											○			
ヤマグワ												○		

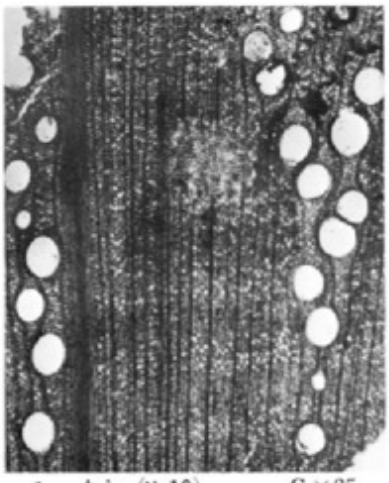
鋤鍬等には強靭なカシ材が用いられているが，中部地方以西の多くの遺跡からの出土例と一致する。他の農耕具にクヌギ材が使われているが材質はやや劣るも強靭な点は同様である。

木製品以外は主に丸杭・板杭・柵杭・矢板等であるが，樹種別に示すと次表のようになる。同定にやや疑問のあるものも一応その中に含めたが，傾向を知るには差し支えないとわれる。

出土遺構 / 樹種	第2号竪穴	第4号竪穴	川・柵	第1号堰	第2号堰	II区
カヤノキ				1		
マツ			1			
クヌギ	1	1	8	2		3
シイノキ	1	15		10	8	9
カシ類	1	7	7	24	13	8
ケヤキ？				？		
ムクノキ	5					
ヤマグワ				1		
タブノキ	1		2	5		3
シロダモ		1				
ユズリハ	1	1	2		2	4
ムクロジ			？			
サクラ類						1
アワブキ	1	3	4	4		3
サカキ	1	1	5	2	1	3
ヒサカキ	3	3		3		
ヤブツバキ					2	
タイミンタチバナ	1	1	1	3	3	1
チシャノキ		1				
（未定）	1	2	1			

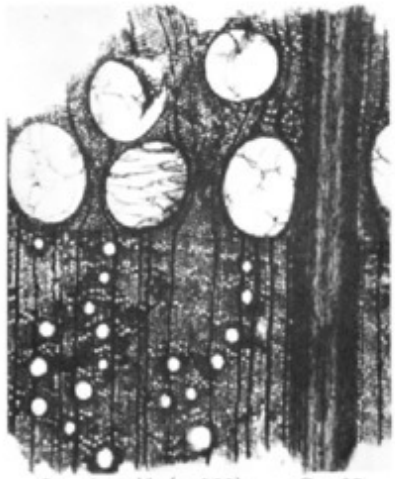
これを見ると，カシとシイノキが圧倒的に多く，次はかなり少なくなるが，クヌギ・アワブキ・タブノキなどがつづく。針葉樹は僅かにカヤノキとマツが各1例ずつあるに過ぎない。

樹種の構成はすでに報告されている板付や四箇・鶴町等の遺跡のものによく似ている。

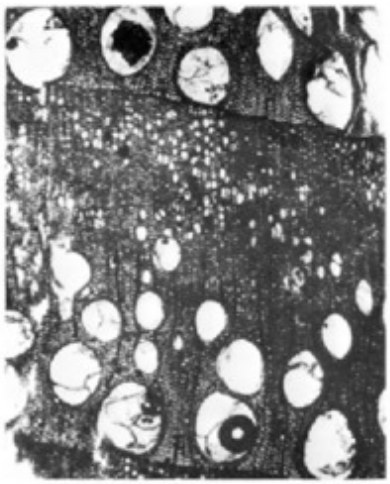


1．カシ（No.10）　C×25

2．カシ（No.10）　T×50



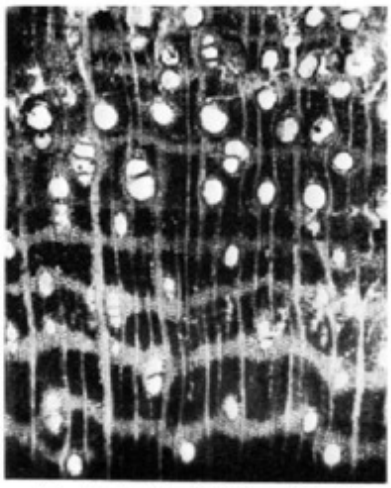
3．クヌギ（No.266）　C×25



4．クリ（No.213）　C×20

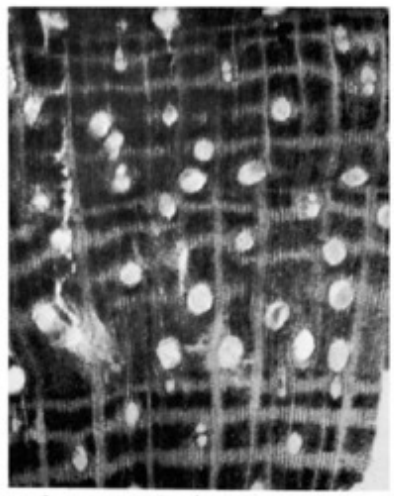
5．シイ（No.20）　C×25

8．ムクノキ（No.15）　T×50



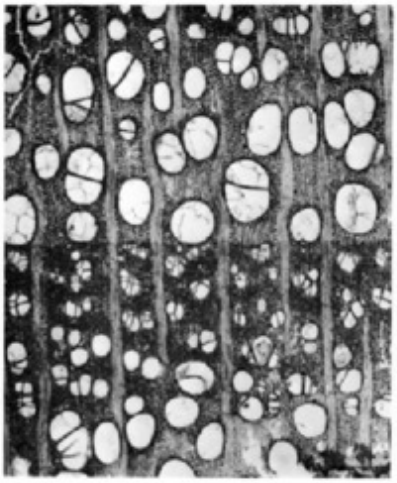
6．ムクノキ（No.23）　C×25

7．ムクノキ（No.23）　T×50

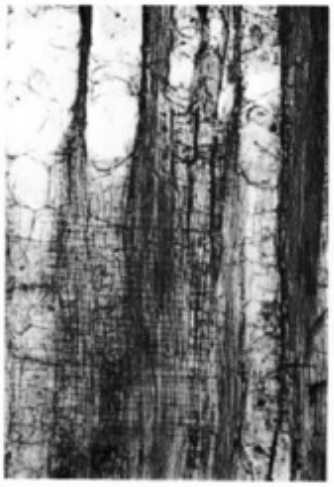


9．ムクノキ（No.15）　C×25

板付E－5・6地区出土材

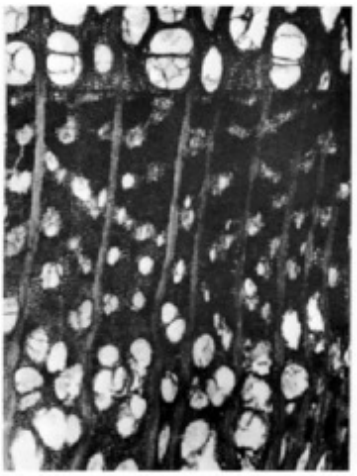


10. ヤマグワ (No.215) C×25

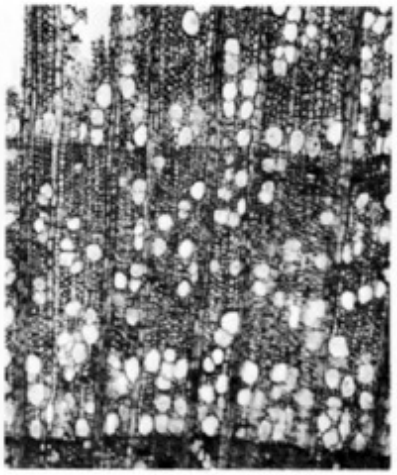


11. ヤマグワ (No.215) R×50

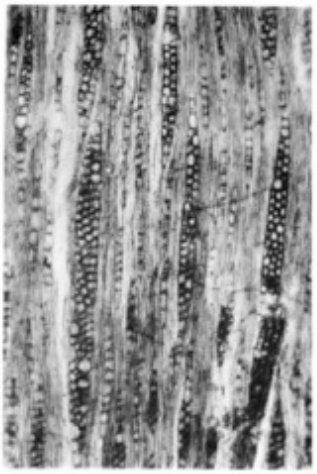
12. ヤマグワ (No.215) T×50



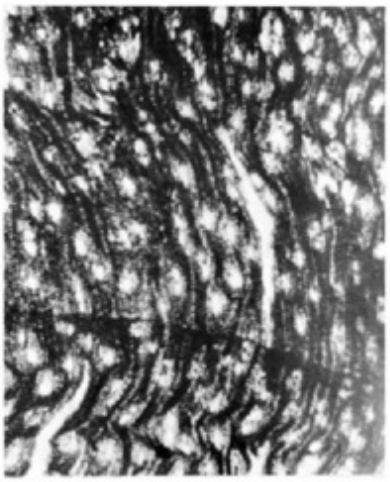
13. ヤマグワ (No.218) C×15



14. サクラ類?(No.263) C×



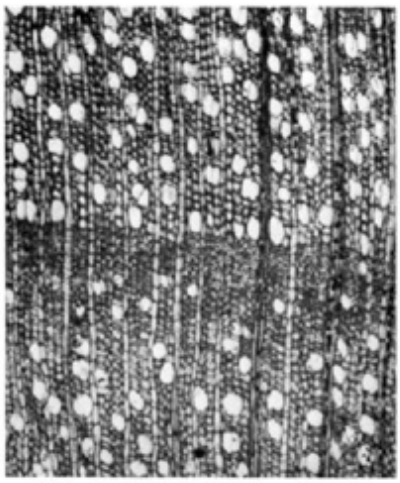
15. サクラ類?(No.263) T×50



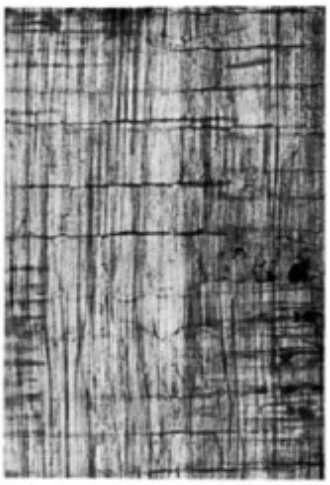
16. タブノキ (No.12) C×

17. シロダモ?(No.38) C×25

18. シロダモ?(No.38) T×50

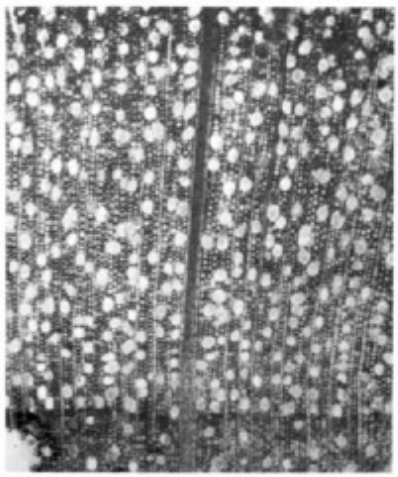


19. ユズリハ (No.44)　C×50

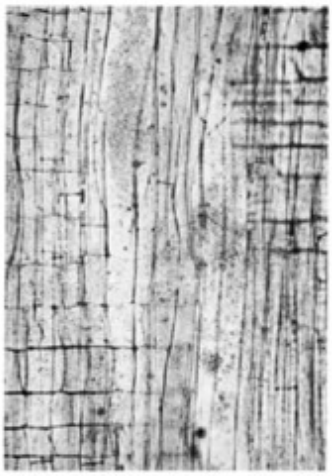


20. ユズリハ (No.44)　R×100

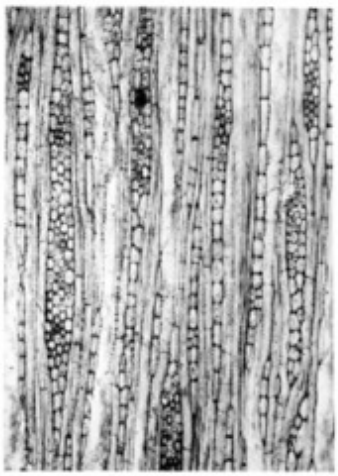
21. ユズリハ (No.44)　T×50



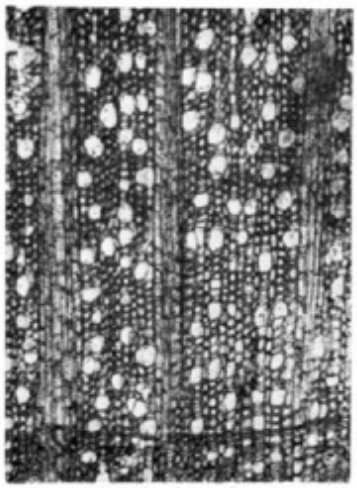
22. ヒサカキ (No.13)　C×50



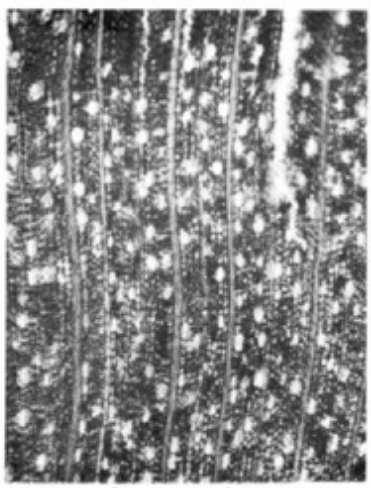
23. ヒサカキ (No.13)　R×100



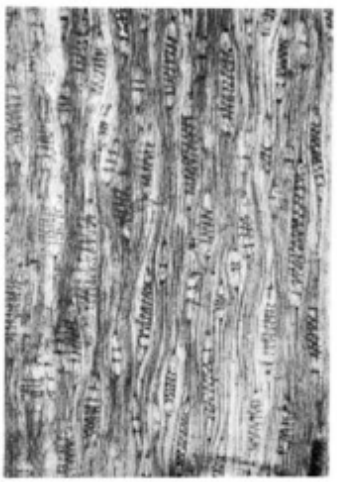
24. ヒサカキ (No.13)　T×50



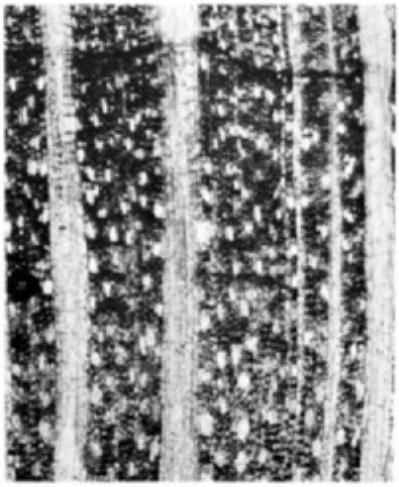
25. ヒサカキ (No.22)　C×50



26. ツバキ (No.244)　C×50



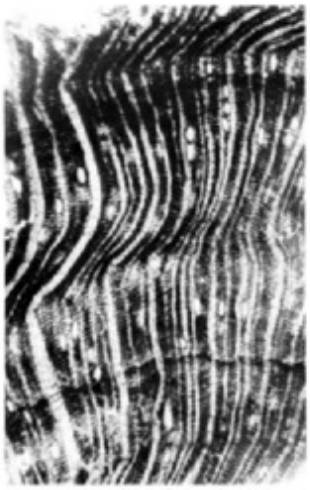
27. ツバキ (No.244)　T×50



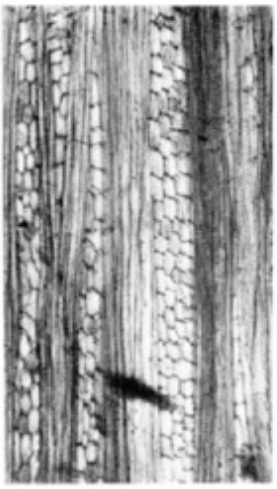
28. タイミンタチバナ (No.72) C×50

29. タイミンタチバナ (No.72) T×50

32. イスノキ?(No.48) C×50



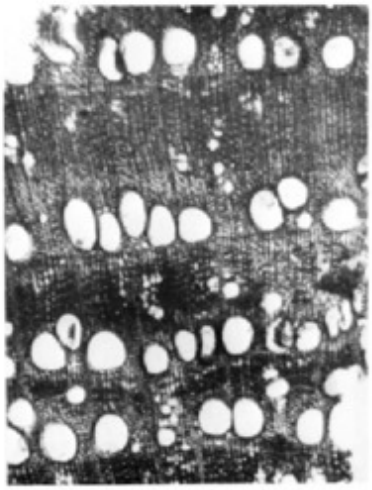
30. アワブキ (No.84)



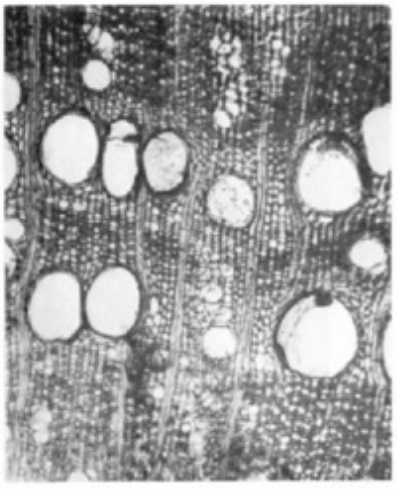
31. アワブキ (No.84) T×50

33. イスノキ?(No.48)

34. イスノキ?(No.48) T×50



35. チシャノキ (No.62) C×25



36. チシャノキ (No.62) C×50

37. チシャノキ (No.62) T×50

板　付
板付会館建設に伴う発掘調査報告書

福岡市埋蔵文化財調査報告書第73集
1981年（昭和56年）3月31日
発行　福岡市教育委員会
印刷　栄光印刷株式会社

板　付

福岡市埋蔵文化財調査報告書第73集

1981